
ture life

ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

t u r e l i f e

【Nコード】

N 2 5 9 6 0

【作者名】

ゆう

【あらすじ】

むかあし、むかし。

あるおうちに、一人の可愛らしい娘がお嫁にやってきました。娘は由緒正しいお家の娘で教養もあるのですが、お花やお歌よりも刀や兵法を好んでいました。

そして思い込みが激しい性格です。

また、彼女の旦那様は人類史上稀に見る、大変見目麗し殿方ですが、マイペースマイウェイで時々天然の呑気な旦那様でした。そして、三度の飯と愛猫が大好きです。

あ。結婚後は、奥さんのこともその大好きのカテゴリーに入りました。

そんな二人のほのぼの結婚生活のお話です。

【】が短編の1話目です。

ちなみに時代設定はおろか、世界観すら特定しておりません…。
悪しからず…。

【おままごとの始まりの前】

刀を手に抱き、輿に揺られた嫁君様は、ふう…と息を漏らす。まさか自分の人生において、嫁入りという日がこようとは…。

前日、父母・兄弟姉妹と別れを済ませたあとは、乳姉妹で腹心の侍女と過ごした。

『姫様、お輿入れ、まことにおめでとう存じます』

『嫁入りだなんて……』

自分にはおかしいわね、とは胸中でのみ付け足す。

花嫁衣装だなんて、道化と間違われはしないかしら……などと心配して小首も傾げてみた。

『お輿入れなさいましたらば、良き妻として、婿殿にお務め下さいますよう』

畳に丁寧についた侍女が言う。

その言葉に、嫁君様はぴくりと片方の眉だけはねさせる。

そして、苦虫をつぶしたような表情で

『そなたはホントに…つまらぬ事ばかり言いますね。わたくしの気も知らないで。そなたもこのままでは行き遅れ…行かず後家ですよ』

などと嫌みを言っってはみたのだが…。

『それが、おつとめにございます。そしてゆくゆくは、健やかなお子をなし、跡継ぎとして……』

『ああ！もうよい！嫁ぐ前から勤めだの、跡継ぎなど……』

主の気を知ってか知らずか、侍女はありきたりのことを事務的に言う。

わざと。

からかっているのだ。

美しい侍女は、目を細めた。

『それでは、今夜はゆっくりとお休み下さい』

侍女はそう言つと部屋を出て行つた。

静かになつた部屋で、揺れる灯火を見つめるともなく見る。

松太郎さま…。

どんな方かしら…。

嫁君様は脇息にもたれ、ふうつと息をついた。

輿が下ろされ、嫁君様は少なからず緊張した。
しかしながら、今更どうしようもない。

嫁君様は、しっかりとした足取りで輿を降りると、踏みしめるように歩き嫁ぎ先の門をくぐつた。

輿入れ

武家の次男坊が嫁をもらった。

婿殿は二十一歳になったばかりで、寡黙な男だった。伸ばした前髪が顔にかかっているため、いつもその表情は読みとりにくい。

しかし切れ長の瞳は涼しげで、チラリと流し目をすれば、それはまるで絵巻物の光源氏さながらでもあった。

背も高いのだから、それを気にして否か、猫背ぎみである。

嫁御はといえば、今年17になるこちらも武家の娘なのだが、彼女は行儀見習いや花嫁修業より兵法を学ぶことを好んだ。

美しいというより、可愛らしい彼女にはとても不釣り合いの刀が、お気に入り入りの嫁入り道具だ。

祝言はつつがなく執り行われ二人は晴れて夫婦となった。

その晩：初夜でのこと。着流し姿の嫁御を前に、婿殿はその奥にある床の間に鎮座している、彼女のお気に入り刀を見つけ、小首を傾げた。

「…織り殿は、俺を切るおつもりか？」

低すぎず高すぎない声は穏やかで、初めて名を呼ばれたこともあり、嫁御「織り」という名だけは、少なからず胸がそわそわしたのを感じた。

そして、顔が熱くなってきたことも。そんな織りに構わず、婿殿は続ける。

「このご時世、真剣は必要あるまい？まさか、懐刀などしこんではおられるまいな？」

頭の上には疑問符をたくさんつけながら、婿殿は眉根も寄せた。その表情が妖艶で、またも織りは胸がそわそわする。それを隠すように、織りは柔らかく微笑んでみた。

「…松太朗さま…。それは古の姫君のお話ですわね。望まずして輿入れた姫君が初夜、指一本でも触れれば自害する、と懐刀を喉に当てて殿をお迎えされたという」

織りがにっこり微笑み、古の話をしたことに、婿殿 松太朗は目を丸くした。

「わたくしが懐刀を持っておるか否か…ご自分でお確かめ下さいませ」

そう言うと、織り軽く両腕を開いてみせた。

（これから、どうせあなたがこの衣をとってしまわれるわけだし…）

織りは気丈に振る舞う。本当はこんな事を言いながらも緊張しているのだ。さつきから心臓の音がうるさく、頭がくらくらする。

松太朗は、小さく震える織りの指先を暗がりの中でも見逃さなかった。しかし、それ以上に、やはりこのように豪快な嫁御に驚きを隠

せずにいる。

先ほどから松太郎は、瞬きをしないのだ。

その様子が可笑しくて、織りは松太郎を見てクスクス笑う。

「目がまん丸になっていらっしやる」

織りは緊張を悟られないように努めて明るく言った。

しかし、松太郎が、黙ったままなので

(怒ってしまわれたかしら?)

と織りは彼を見上げた。

しかし、予想していた顔はそこにはなく、代わりに困ったように苦笑する松太郎がこちらを見ているだけだった

初夜

「あれは、わたくしのお友だちです」

床の間の刀を振り返って、織りは松太郎にそう言った。

困ったように微笑んでいた松太郎はまた眉根を寄せてしまう。

そして今度は織りが苦笑した。

「わたくしは包丁より刀が好きなのです。きれいな着物より袴をはく方が身が引き締まります。絵巻物より兵法を好んで読みます」

ピンと背を伸ばし、当世の花嫁とは思えぬことを真つすぐな瞳で言う織りに、松太郎は正直面食らった。

武家の娘ならば、例にもれず、良妻賢母の教育を受けて育ったに違いない。

だが、織りはそれとはまったく逆のものを好んできたと言っただけだ。

面食らった松太郎に、織りは不敵に微笑んでいた。

ピンと伸びた背のなんと美しいことが。

そつと松太郎は織りに手を伸ばす。

そしてその柔らかな頬を撫でるとそのまま顎を持ち上げた。織りは睫毛を揺らしながら目を閉じ、全てを松太郎に任せる。

松太郎の唇と舌にされるがまま、しかし、頭を松太郎に支えられながら、織りはふかふかの布団に身をゆっくりと倒されてゆく。

唇が離れ、真上に覆い被さった松太郎と目が合と、松太郎は何も言わず体を起こし、床を立った。

織りは、不思議に思い彼の姿を目で追う。松太郎は、燭台に近づき

フツと明かりを消した。途端に当たりは闇み包まれ、ほのかな月明かりのみが部屋へ差し込む。

松太郎は、再び床に戻るとゆっくりと織り覆い被さった。着物の合わせ目から入ってきた松太郎の手は、その唇とちがってひんやりと冷たくて、思わず織りは小さく声をあげてしまう。その瞬間、松太郎の手が遠慮がちに引つ込められてしまった。

「あ……」

不安げに、織りは松太郎を見上げる。

失礼なことをしてしまったかもしれない……。

しかし、織りの心配をよそに松太郎は上半身を起こし、きよとんと自分の手のひらを見つめる。そして

「少し、冷えているようだな。……驚かせて申し訳ない」

はあっと口元に手をあてて、松太郎は自身の手を温めた。

「どうやら俺も緊張しているらしい」

両手をこすりあわせながら、松太郎は目だけを覗かせてニツと織りに笑ってみせる。

すると、不思議と織りの強ばった体から、少し力が抜けてしまうようだ。

「痛かったら、遠慮なく言ってくれ」

松太郎は体を倒しながら織りの耳元で囁く。それがくすぐったくて、織りは身をすくめた。そして体が熱くなってくるのを感じながら、松太郎に応えた。まだ冷たい松太郎の手が、今度は着物の上から織

りに触れてくる。先ほどよりも遠慮がちに織りの反応を確かめるように。そして様子をみながら、男のわりにほつそりとした、しかし織りの胸をすっぽり覆ってしまうほどの大きさの松太朗の手が、襟をゆるめてその中へ滑り込む。触れられた場所が熱い。織りは先ほどとは違い、武家の娘らしく夫の気の向くままに体を預け、貞淑に振る舞った。

ただ一度だけ。織りは上がった呼吸の合間に小さく声を漏らした。その瞬間に織りは松太朗と本当の夫婦になった。

「大丈夫か？」

掠れる声で、松太朗は織りの流した涙を優しく拭ってやりながら尋ねた。

きゅっと口を真一文字に結んだ織りが小さく頷く。

「痛いのであろう？」

気遣わしげに尋ねる松太朗に、織りは一度首を振る。

瞑った瞳からは、ポロポロと涙が流れているのだが…。

「織り殿」

松太朗の優しい呼びかけに、織りはゆっくりと目を開けた。

長い前髪は後ろにかき上げられ、先ほどまで見えにくかった松太朗

の表情がよく分かる。月明かりにくつきりと浮かぶ無駄のない彼の体がまず視界に入ってきたのだが、直視することができず、サッと目をそらしてしまった。

「織り殿」

再び呼びかけられ、上に目をやる。額に汗を滲ませた松太朗は、織りと目が合うとにっこりと微笑んだ。優しい目元にはどこか妖艶さがあり、織りの胸の奥がまたそわそわとする。心臓は飛び出してきそうなほど早鐘を打っていた。

「しよ・・・松太朗さま……」

織りの声に、松太朗は一瞬眉根を寄せ、小さく声を上げた。そしてそのまま唇を重ねる。

初めてのそれより少し荒いものではあったが、松太朗は優しかった。それが織りを安心させ、同時に痛みを少しずつ悦びに変えてゆく。

おそらく剣術の稽古は、織りの方が松太朗よりしているであろう。それでも松太朗の腕は織りのものとは全然違っていた。織りの腕よりもたくましく堅い腕、その奥にある肩も、織りよりずっと幅があって硬くて大きい。

殿方とは、どうしてこうもおなごと違うのか。

殿方とは、どうしてこうもおなごと違って堅いのだろうか。

殿方とは、どうしてこうも遅しくおなごをつぶさぬよう、気遣いな

がら自分を支えていられるのだろう。

自分はもう、いっぱいいっぱいなのに。

頭の中が真っ白になってしまいそうなのに。

織りはその背に手を回し、ぎゅっと掴んだ。

松太郎の動きが速くなるにつれて、織りは知らずのうちに彼の背中に爪を立てていた。

しかし、松太郎はそんなことを気にとめることもない。

なぜならば……。

今、必死に自分を受け入れるこの娘が愛おしくてたまらないのだから……。

後朝

「つくしゅ」

肩がひんやりとする。

ぼんやりとした意識の中で、寝返りをうとうととして下腹部に鈍い痛みと違和感を感じて、ゆっくりと目を開けた。やわらかい日差しが部屋に差し込んでいる。

（ああ…そうだった…）

空いた枕を見て、織りはまた目を閉じた。

嫁入りしたんだった…。

そして昨夜は…。

織りはカッと顔面から火が出るようだった。

それと同時にハッキリと目が覚め、昨夜の名残であるかのように、うるさいほどに心臓が早鐘をうつ。

痛みや体の中から急激に襲いかかる【何か】に耐えようと、必死に唇を結び、松太郎にしがみついた。

『織り殿…』

何度も松太郎が自分の名を呼んだ。
その度に胸が高鳴るのを感じながら、松太郎の動きに合わせてよう
に出そうになる声を殺した。

だつて…。

声を上げてははしたないと言われてきたから。

松太郎の手が織りの顔にかかる髪をよけ、額と頬を撫でる。そのま
ま手は下へと下がり、指の腹で唇をなぞる。

なぞられた唇は力が抜け、吐息の合間に声が漏れた。

「!？」

普段とは違う自分の声に驚き、織りは突出に目を開けて口を手で押
さえた。

すると松太郎がその手をあっさりとどけてしまう。

「いやあ…」

織りは恥ずかしくてキュツと目をつぶり顔を背けた。

しかし、松太郎がそれを許さず、顔を彼の方へ向けさせる。目を閉
じたままの織りの額をゆっくりなでながら、松太郎は余裕の声音で
「なぜ。夫婦になるのに…。織り殿、もっと顔を見せて。そして声
を聞かせて欲しい。そのままのあなたを俺は見たいし、感じて
いたい」
などと囁くのだ。

織りはカァツと体中が熱くなるのを感じた。

松太郎は織りの気持ちを知ってか知らずか、妖艶に微笑む。

そして、己の指を織りのそれに絡め、耳元に唇を寄せた。

『俺は織り殿に惚れました』

しゃあしゃあ言った松太朗の言葉を、織りは頭の中で反芻させ、ドツクンドツクンと、耳にじんじんと響く心臓の音を体中で感じながら、庭から聞こえる小鳥たちの声を聞いていた。

(松太朗さま…)

ぎゅゅと自分の体を抱きしめる。

嫁入りなど、つまらぬ人生の始まりだと思っていたのが嘘のようだ。

「織り様。朝でございます」

侍女の茜の声で、織りはハッと我に帰る。

そしてそそくさと着流しを着直し起き上がる。

やはり下腹部が痛い。それに体中が筋肉痛のようにあちこち痛い。

そして……。なんだか違和感があっただけじゃない。

ゆっくり障子が開けられると、茜は漆塗りの盆を持っていた。

「おはようございます。松太郎さまより、後朝の歌が届いておりますよ」

目を伏せ、すつと茜は盆を差し出す。

「松太郎さまから・・・」

織りは、はやる気持ちを抑え、手紙を受け取った。

上等な料紙だと思われるそれは、まだ墨の香りがする。松太郎が一生懸命筆を走らせてくれた様子が思い浮かばれ、織りが口元がゆるむのを押さえられない。

松太郎さまはいったいどんなお歌をくれたのだろう・・・。

熱にうなされてしまったようにとろんとした瞳で、頬を染める主を茜がニヤニヤ見つめた。

「茜・・・下がっていいですよ」

茜のからかうような視線に気づき、織りがジトつとした目で言う。

「あら」と、クスクス鈴を鳴らしたように軽やかに笑いながら、茜は部屋を出た。

やはり茜は変わらず茜だった。

初夜を迎えた翌朝の、このデリケートな時に、まさかあの忠義者の侍女は自分をからかうように見つめているなど・・・。

そもそもそついう者を、本当に忠義者というのであろうか。

織りは小首を傾げた。

自分は、連れてくる侍女を間違えたのかもしれない・・・。

まったく…と独りごち、織りは一つ深呼吸をした。
そして、ゆっくりと折り目を確かめるように開き、そわそわと手紙
を読んだ。

《始まり》 f i n

後朝（後書き）

こうして、ふたりは契りを結びました。

おっとりとした松太朗さまの、積極的な姿に戸惑いを覚えた織りさまでしたが、妖艶な容姿だけでなく、その優しさに、織り様は松太朗さまのことが大好きになっていきます。

これから、二人がどんな生活を送っていくのかは、、、これからの
お楽しみ。

【後朝】

まだ夜も明けぬ頃。

ごそごそと松太郎は布団から起き上がった。
ぼんやりした頭で考える。

（ああ… そうだった…）

横で小さな寝息をたてる少女を見て、松太郎はまた目を閉じた。

祝言を上げたのだった…。

そして昨夜は…。

年甲斐もなく、カツと顔が熱くなってゆくのが感じた。

そして昨夜の名残かのように、心臓がうるさいくらいに早鐘を打つ。

会ったばかりの娘と祝言をあげ、初夜を迎えるにあたって、松太郎は特別な思い入れなどなかった。
全ては家のため。

裕福でない下級武士の家に、次男坊がいつまでも居座っていてもただの穀潰し。

ならばさつさと嫁をとり、家を出てしまった方がよい。

それに、女を抱くのも初めてではない。

いつも通り・・・やれば良いのだ。

そうすれば、女は悦ぶ。どこにどう触ればよいか、どう声をかければよいか。

そう。いつも通りだ。

そう思っていた松太郎は、やって来た少女に目を見張った。

まず、花嫁衣装を着たあどけなさの残る娘の真っ赤な唇がとても可愛らしく思えた。トクン・・・と小さく胸を打つものがある。

そして昨夜。

まっすぐな眼差しに、ピンと伸びた背。よく通る声には張りがあり迷いが無い。

そして武家の娘らしからぬことを言う。

また一つ、トクンと胸を打つ。

しかし、そんな彼女が実は大きな不安と戦いながら微笑んでいることは、容易に想像がついた。

大きなことを言いながら、彼女の小さな手は震えていたのだから。

織りのその姿を愛おしく感じた。

昨夜は、必死に理性と戦っていたのだ。

気丈に振る舞っていた織りも、いざ床の中ではやはり身を固くさせ

ていた。

小さく震える肩は、何とも頼りない。

そんな織りに触れるだけで松太郎の胸は高鳴った。そして締め付けられるように苦しかった。

武家の娘らしからぬことを言う織りが、床の中では武家の娘らしく振る舞う。それはとてもぎこちないものであったが、いじらしい。松太郎を華奢な全身で必死に受け止めている。

初めての恐怖と破瓜の痛みに耐えながら、織りは武家の娘らしく努めた。

そして、改めて松太郎は気づいた。

(織り殿にとって俺は、初めての男か・・・)

そう思えば、高ぶる気持ちをそのままをぶつけなければいいと言っものではない。

そうすれば、きっと織りを傷つけてしまうだろう。

こんなまっすぐな娘を、そのような形で傷つけてしまっとはいけない。

ガラス細工のように繊細な織りは、壊れてしまいそうだ。

こんなことは初めてで、松太郎も戸惑っていた。

『ああ…っ』

『織り殿…っ』

松太郎は、織りを丁寧に扱いながら、その姿や声をじっくりと知っていったかった。

ふいに漏れた甘い声は、松太郎の理性を奪いそうだった。小さく上げた甘露な声に自身で驚く織りの手を掴んで口元からどける。

恥ずかしそうに視線をそらした織りが、可愛くて仕方がない。

その恥ずかしがる表情も、自分の前でしか出したことがないのだ。その甘い声も。

そして、織りにそんなことをさせられるのは、自分だけだ。

徐々に、松太郎の心に独占欲がこみ上げてきた。

それでも、松太郎は自分のその気持ちを抑えながら、織りに言葉で気持ちを伝えていた。

最後にフツと意識を飛ばした織りに自身も倒れ込んだ。

織りから聞こえる胸の鼓動。

心地よい旋律を聞き、その温かさを感じながら、松太郎はゆっくりと目を閉じたのだ。

朝餉

「くしっ…」

織りの小さなくしゃみで、松太郎は我に返って目を開ける。危うくまた寝てしまうところだった。

ギョツと布団にくるまる織りの頭にふわりと手を乗せる。身じろぎをした織りだか、松太郎がその髪を梳いてやると、心地よさげに口元をほころばせた。

彼女の全てを守りたいと思った。そして、いつでも笑顔で側にいて欲しいと。

松太郎は身仕度を整え部屋をそつと出る。

胸を締め付ける思いを歌にこめるために。初夜を迎えた織りに、家の名に恥じぬよう、後世にも語り継がれていくような立派なものをしたためなければ…。

日が上ってしまった頃、家のものが朝餉を告げに来た。

悩んだ末の歌はすでに織りの手元に渡っているはずなのだが、松太郎は沈んだ気持ちでいた。

できれば、朝餉の席は織りと別にしてほしかったのだが、そういう

わけにもいかない。
仕方なく松太郎は、重い腰を上げた。

(呆れているのだろうか・・・。なんとフォローしようか)

そんなことを考えながら部屋へいくと、一番に織りと目が合ってしまった。

織りは、松太郎の姿をしばしとろんとした瞳で見つめる。

松太郎は苦笑した。

「おはようございます、織り殿。よく眠れましたか？」

「あっ...その...おはよう...」

茹で蛸よろしく真っ赤になった織りは俯きながら小さく答える。

それを見て、昨夜の情事を思い出しかけた松太郎は、ふるふる首を振った。

「いや...失礼。よく眠っておられたな。...体は辛くはありませんか？」

気持ちを抑えはしたが、高ぶっていた。

ましてや織りには初めてのこと。きつと無理をさせたに違いない。

なにせ、さらに俯く織りの首筋や鎖骨にはしっかりと昨日の跡が痛々しく残っている。

きつと他にも...

立ったままの松太郎の腹が、ふいにぐうぐうと鳴った。

織りは一瞬きよとしたが、すぐにクスクス笑い出した。

よく見ると、彼女のそばに控えている侍女の茜も、袖で顔を隠して

肩を振るわせている。

松太郎は、フツ笑うと、自分の膳の前に腰を下ろした。

「飯にしよう」

そう言つて、手を合わせると威勢よくご飯をかきこむ。

華奢な体からは想像ができないほどに、松太郎はよくご飯を食べていた。

織りは、その様子が昨日の妖艶な松太郎とあまりにかけ離れており、一瞬呆けてしまったが、あまりに豪快な食べっぷりなのでいっそ気持ちよくなってきた。

「そういえば、松太郎さま」

「うん？」

「今朝のお歌ですが」

「んごあ」

忘れていた歌の話題になり、思わず松太郎はむせてしまった。胸をドンドンと叩く松太郎に、織りは目を丸くする。

「あ……あれは……」

後世に恥じぬものを残さねばと思ったのだ。

織りのためにも。

だから、あれから半刻紙とにらめっこした。

しかし、考えれば考えるほど分からなくなり…。

朝昼晩 共にある人 いることぞ 嬉しきことは 何にも変わらさず

捻りも裏読みもない駄作であった…。

「あれは…」

お茶でとりあえず喉に流しながら言いわけを必死に考える。
どんなに言いわけをしても、あれは駄作に変わりはないのだが…。

「織り殿をぞんざいに扱ったわけでは、いつさない。ただ…
なんと申すか…。」

「ありがとうございます」

必死に弁解しようとする松太朗に、織りはたたみかけた。

松太朗は、織りの方をおそろおそう伺う。

思っても見ない言葉を、織りが発したからだ。

怪訝そうな顔をする松太朗に、織りはうっすらと頬を染めてニッコリと極上の笑みを浮かべる。

「これから、わたくしたちは朝も昼も晩も、一緒ですね」

お歌

朝日のようにさわやかで清々しい笑顔の織りは、さらに続けた。

「松太郎さまは、わたくしが歌が苦手なこと、ご存じだったのですか？」

尋ねる織りに、松太郎は茶碗と箸を持ったままきよんとした。

「わたくし、歌は詠みませんから…。捻ったお歌を頂いたらどうしよう、内心心配していましたのよ。とても…わたくしにはステキなお歌でしたわ」

そうだった…。

と、松太郎は思った。

織りは、普通の娘が受けるような教育は受けていないのだ。

何せ、包丁より刀、絵巻物より兵法を好むのが、織りという娘である。

松太郎は柔らかく微笑んだ。

「あれは、そのようなつもりで書いたわけでないのだ」

織りは、え？と聞き返す。

松太郎は、相変わらず長い前髪を顔に垂らしていたが、今日はきちんと表情が見えるように分けてある。そのキマった姿で、朝日のように柔らかく微笑むのだから、目が眩む。

松太郎は、そばにいた茜に茶碗を渡しておかわりをよそってもらう。ほかほかの真つ白いご飯を受け取りながら、松太郎は続ける。

「織り殿に恥をかかせぬような歌を、とっていたのだが、考えれば考えるほど作れなくなってしまった」

おかわりしたご飯をお新香で進めながら、松太郎は話した。

「本当は、さつさと渡せるよう、事前に準備をしていたんだ…」

もぐもぐ相変わらずの食べっぷりを見せる松太郎にキラキラとした瞳を向ける。織り。

準備していたんだ、その次は？なあに？？と、先を急かすように織りの瞳が輝きを増す。

少女の瞳には、甘い何かを期待する輝きがあふれている。

それに気づいているのか否か、優しく織りを見つめ返しながら、松太郎は続ける。

「そんなものでは足らぬ気がして…。俺の新鮮な気持ちを伝えようとしたら、あんな捻りも裏読みもない歌に仕上がってしまった。まったく、人生最大の駄作だよ。

だが・・・まあ。織り殿には昨夜、気持ちを伝えしたので、ご存じのことだろうしな」

そう言つて松太郎はニツと意地悪な笑顔をしてみせ、おかわりしたご飯に湯飲みの茶を入れ、即席お茶かけご飯を流し込む。もはや食べることに夢中になっている松太郎をよそに、織りは真っ赤になつて俯いた。

『俺は織り殿に惚れました』

絡めるように握られた手に力を入れて、掠れる声で耳元で囁いたあの松太郎の言葉を思い出した。

あれが何よりも嬉しい、松太郎の歌である。

(・・・大丈夫かしら。この夫婦。まるでおままごと・・・。)
茜はそんな主夫婦を見て、胸中で独りごちた。

食べることに夢中で、どこかテンポがずれている絵巻物の貴公子然としてゐる一家の大黒柱。
まるで夢見る少女を絵に描いたように地に足がつかない奥方。

こうして、二人の新婚生活が始まったのであった。

【後朝】 f i n

お歌（後書き）

見目麗しい旦那様も可愛らしいお嫁さんを迎え、後朝の歌という大仕事も終えました。

さあ。

これから天然旦那様は、しっかりと一家の大黒柱として過ごして行けるのでしょうか。。。

【鱗雲】（前書き）

かわいらしい花嫁さんが嫁いで来て、あっという間に1ヶ月が経ちました。

二人は相変わらずのんびりと暮らしており、しっかり者の使用人がいなければ、きっと二人は餓死してしまうでしょう。そして、お部屋も散らかりっぱなしのはずです。

そんな二人はきちんと夫婦としてやっていけるのでしょうか？

二人はきちんと想いが通じあっているのでしょうか・・・？

【鱗雲】

鱗雲が流れる秋の爽やかな日。

「織り殿、此度はめでたく嫁入りなされたそうで」

織りと道場の縁側に座り込んだ師範代が、ズズツとお茶を啜りながら目元を緩めた。

「はい。でも今までと何ら変わりませんわ」

同じようにお茶をズズツと啜りながら、胴着姿の織りが、秋空のような爽やかな笑顔で答えた。

まだ若い師範代（とは言え、30歳手前なのだが）は、ご隠居よろしく背を丸めて織りの言葉かぶりを振った。師範代とは思えない線の細い男である。

その線の細い男は、細い真剣な眼差しを織りに向け、改まったように重たく口を開く。

「織り殿、この際だから申しておくが、今の世の中、女性は家に入れば夫に従うのが習わし。良妻賢母の教育とはそういうものです。お母上はこの道場にあなたがお通いになることをとても心配しておられたのです。そんな織り殿も晴れて奥方になられた以上は、身を

慎み、お家繁栄のために……」

「もっつ！水村さままでなんてことを仰いますの！？言われなくても、御仏の功德があればわたくしもそれなりに落ち着き、ゆくゆくは良き妻、良き母として立派に……」

「子は御仏の功德によってばかり得られるものではありませんぞ。

鶴でもなく、あれは男女の……」

「まああつ！！！昼間っから何を仰いますの！？これだから殿方と言うのはっ……」

水村の発言に、織りは顔を真っ赤にしてキンキン声で叫ぶ。

いやですわ！と首をブンブン振る織りの隣で水村は呆れた面持ちで耳をふさいだ。

これでは御仏の功德とやらがあつても、とても落ち着いた良き妻賢き母にはなれそうにない。

「何を昼間から話しておるのだ？」

突然、道場の手前から声が聞こえたかと思うと、間を空けずに見慣れた顔が覗く。

「しよ…松太郎さま！？」

現れた人物を見て、織りは目をまん丸くする。そして慌てて居住まいを正した。

出会って1月経つが、いつ見ても見目麗しいその人こそ、織りのダ

ンナさまで、想い人の松太郎だった。

松のように横にも広く伸び、朗らかに育つようにと『松太郎 シヨウタロウ』と名付けたらしい。

先日二人で庭の松を眺めているときに、松太郎がぼつりと織りに話してくれたことだ。

もちろん織りは、そんな話しでも「ステキですねえ」などと、感極まる想いで聞いていた。

あとから茜に「織り様も大変ですね」などと言われた際には、真剣な面持ちで説教をした。

曰く「旦那さまのことを何でもいいから知っていたいのです。どんな細かいことでも、松太郎さまに関わることをご本人の口から聞ければ、織りは幸せになれるのです！」と。

「どちらさまかな？」

開いているのか閉じているのか分からない細い目で、きよとんとする水村に、松太郎はやんわりと微笑んだ。

「失礼。妻がお世話になっております。夫の松太郎と申す」

「ああ、貴方が」

「つま…」

水村の細い目にも眩しいくらいの爽やかで、織りにとっては目眩すら覚える笑顔で、松太郎は自己紹介をした。細い瞳で松太郎を見つめる水村の隣では、うっとうしいくらいに織りが胸をときめかせていた。

他人に自分のことを「妻」と紹介したことに、織りは感動で胸が熱くなる。

自分たちは、夫婦なのだ実感した。

団子

うっとりしている織りに微笑む松太郎。

お邪魔かな？とほほえましく仲睦まじい若い夫婦を見つめる水村は「お茶でも飲んで行かれませんか？」と松太郎に同席を勧めた。

普段見ることのない、乙女チックな織りを見るのも面白いし、そんな織りを可愛がっているのであるう、見目麗しいこの殿方をもう少し見てみたいと思った。

そしてよいしょ…など、年不相応の声とともに水村は立ち上がり、奥へ下がる。

「かたじけない」と、その背に声をかけた松太郎は、ニコニコとしている織りの隣に、こちらもニコニコと腰を下ろす。外で妻とこうしてお茶を共にするのは初めてだし、胴着を着て、スツキリを髪をまとめている織りを見るのも初めてだった。家の中でみる彼女とは少し違うような気がして、新鮮だ。

しかし、松太郎が腰を下ろしきつてしまうと同時に……

「まっ！嫌ですわ、松太郎さまっ」

突然、間髪入れずに相変わらずの金切り声で危難がましく叫ぶと、織りは松太郎からバツと離れてしまう。

「……………」

松太郎はキンとする耳にも気を向けず、目を見開いて、ただただ呆然として織りを見る。

これが先ほどまで、瞳を潤ませ、紅潮した頬で自分を見上げていた娘の反応なのだろうか。
今のは照れ隠しの行動ではない。明らかな拒絶である。

なぜ？

松太郎は首を傾げる。

(?なぜだ……………?俺は織り殿に何かしたか……………?)

呆けていた松太郎は、織りの行動に皆目検討がつかず、脂汗を浮かべて思案した。

そんな松太郎を見下ろし、織りは気まずそうに俯く。
しまった……と思っているような表情を見せてはいるものの、そ

こから動けずにいた。

そして、何かにすぎるように松太郎を見返すが、松太郎は相変わらず呆然と織りを見上げて首を傾げていた。

二人の間に気まずい空気が流れる。

「何ですか？織り殿は騒いで」

松太郎のお茶と団子を持ってきた水村は、ため息混じりに織りの脇を通り過ぎる。

織りは、チラリと水村を見る。その瞬間水村と目があつたのだが、何も言えずにまた俯いた。

まるで、しかられた子供のようである。

そして、水村は松太郎の隣に、織りが座れるだけのスペースを空けると、再び年不相応に「どっころせ」などと言いながら座った。

「まあ、いただき団子があるし、これを食べて気持ち落ち着けて下さい」

松太郎に熱い玄米茶と団子を渡して、織りと自分の湯のみに熱いお茶を注ぎ足す。

織りは苦虫を潰したような表情で、小幅でちょこちょこ寄って来たかと思うと、長い髪を揺らしてちょこんと水村の隣に座った。

「織り殿…」

「…織りさん、座る場所を間違えておられるぞ」

わざわざ水村が空けておいた所とは逆の位置に座った織りに、松太朗は半眼で呼びかける。

そして水村も似たような表情でピシヤリと言った。

「だ…だつて」

「織り殿、俺の分の団子もあげますから」

小さな子どもをあやすように団子を織りの目の前で揺らした松太朗が言う。

何をこんなにご機嫌ナナメになっているかは分からないが、おそらく自分が何かしらしたのだろう。

(うむ……。昔もたびたびあったものだ)

こつそり、昔の女性関係を思い出し、松太朗は分からず反省した。

「わたくしが団子くらいで気持ちが悪く女だと思いいのですか！
？」

ひどい！と織りは首を振る。

松太朗は、妻の目の前で揺らしていた団子をじっと見つめると、小さく首を傾げてしぶしぶ皿に戻す。

「では何が気に入らぬのです。ハッキリ言わねば松太朗殿も困っておるではありませんか」

幼い頃から織りを知る水村は、まるで小さな子どもを叱るようにして遠慮なく言った。

思えば織りは、幼いころから父母には怒られた記憶がほとんどないが、茜やこの水村にはよく叱られていた。

遠慮せず、ダメなことはダメだと言ってくれくれる数少ない大人を、子どもながらに織りは信用しているし、信頼もしているのだ。

それは今でも変わらない。

織りは松太朗と水村を交互に見て、小さく唸る。

むっっ…と唸る織りは指をモジモジさせながら「だって」と呟いた。そしてキッと松太朗を見る。

「な…何だ…？」

女心

身じろぎする松太朗に、

「松太朗さまは女心の分からぬお方ですつ。わたくし……」
胴着ですよつ。しかも稽古を終えた後ですよ……」

と、キュツと小さな拳を握った嫁御は泣きそうな顔で夫に訴える。
本当にその瞳は涙で潤んでいた。

そんな織りを見て、ますます松太朗は苦々しい表情で脂汗を浮かべる。

しかし、水村だけは織りの言わんとすることを分かったらしく、脱力したようにため息とともに

「……そんなこと……」
とつぶやいた。

そして、この言葉を略さずに正確に表記するのであれば

『……そんな（下らない）こと……』
で、あった。

「はっ……？へっ……？」

呆れた声で天を仰ぐ水村を横目に、松太朗だけが合点がいかぬよう
で慌てている。

そんな松太朗を、開いているのかいないのか分からない細い目で水
村は眺めた。

そして、仕方ないとあきれ顔で織りを振り返ると、

「得てして色男というものは、女心に鈍感なものですな」

と、さとったかのように言った。そして水村はふうっとため息をつくと、ズズッと茶を啜る。

「な…何を言っておられるのだ、水村殿」

珍しく松太郎は慌てている。

それはすごく見ものであったのだが、まるで悲劇のヒロインになりきっている今の織りは、全く気づかない。

「織り殿!？」

「水村さま、やはり松太郎さまは分かって下さいませんわ」

師範代の腕に縋る嫁御を見て、松太郎は自分だけ分からぬこの事態に戸惑っていた。

あきれ顔の水村は、袖にすがりつく可愛い弟子のために、その夫へと振り向いた。

そして、至極まじめに弟子の言葉を代弁する。

「松太郎殿、織り殿は稽古をして汗をかいたから、あなたの隣には座りたくないようです」

水村の説明に、織りは真っ赤になって顔を隠した。それではあきたらず、水村の影にすっかり身を隠してしまう。

松太郎はそんな織りを見ながら、一言言った。

「はっ。」

一言ではなく、一文字であったか……。

「ま、年頃のおなごの、夫に汗臭い姿などみせられないという可愛い乙女心です」

あからさまな言葉で解説を加える水村に、織りは相変わらず松太郎から身を隠して、「嫌ですわ」と甲高い声を飛ばす。

「そんなこと」

すべてを理解した松太朗はため息混じりに小さくつぶやいた。あとは脱力しそのまま後ろに大の字で倒れる。

「まあ！」

と夫のあまりの態度に織りは、ひよこつと水村の陰から顔を出す。

「そんなこと、ではありません！大事なことですわっ」

ムキになって松太朗に言う織りを見て

「ははははっ」

と松太朗は笑うしかなかった。

「まあっ！笑い事ではございませんわ！」

織りが必死に訴えれば訴えるほど、笑いが出てしまう。

「いや、すまん・・・しかし・・・。ははははははー！」
「本当に笑うしかありませんな。あははははは」

一緒になって水村も笑い出した。

もうつと、ご立腹の織り姫は、自分の団子をパクリと食べる。

そして、松太朗の団子を素早く手に取ると、「あっ」と身を起こした松太朗が腕を伸ばすより早く、大きなお口でパクリパクリと食べてしまった。

「織り殿！今のは俺の団子だ」

「だって松太朗さま、さつきわたくしにくれるって仰いましたもん」

「言ったが、あのとき受け取らなかったではないか！」

「あのときは、いりませんでした」

「な・・・なんとわがままな・・・」

団子一つで口論を始めた夫婦を見て、自分の団子をつまんでいた水村も一人ごちる。

「相変わらず口卑しい姫君ですねえ」

こうして、騒がしく秋の午後は過ぎて行った。

お迎え

喧々囂々

騒がしい中でも、団子とお茶は確実にそれぞれの腹の中に消えていった。

「さて。そろそろ帰りますよ」

松太郎は、ご馳走さまでした、と湯のみを置いて織りを促した。

「そういえば松太郎殿はなぜこちらに？」

水村は小首を傾げる。

織りもきよとんとした。なぜならば、いつもは道草などせず、松太郎は帰って来るのだ。

仕事のない日ですら、彼はぼうつと庭を眺めているか、家庭菜園（少しでも家計を助けようとうものど趣味が一致したためだ）を楽しんでいるような男である。

貧乏侍に、道草は御法度とされているらしい。

水村の問いに、きよとんとしたのは松太郎も同じだった。

水村と織り、交互に目をやる。

「なぜって…妻を迎えに来たのだが…」

当然だろう、と付け足す松太郎は、ひたすらそう質問されたことに意味が分からず、眉をひそめた。

しかし、織りは一気に恋する乙女の表情になる。

「松太郎さま」

「よい婿に嫁がれましたなあ」

感極まる織りに、目頭を押さえる師範代。

松太郎は二人が一体なにに感動しているのか分からず、一人腕組みをして首を傾げた。

「いったい何なんだ？」

何を言っているのだろうか？

いくら考えても、松太郎にとって妻を迎えに来たということとは、何ら不思議なことでもなく自然な流れだったので、分からない。しかし、もうすぐ夕飯の時間だ。帰らなければ。

「だから織り殿、汗をかこうが俺は全く気にしないから、一緒に帰るぞ」

「でもお」

やはり女心は分からぬらしい松太郎は、モジモジする織りに言い放った。

「お互い汗をかきながら肌を重ねた仲ではないか」

「つつつつつ！！！！！！！！！！」

今更何を、と呆れたように言う松太郎に、織りは真っ赤になって飛び出しそうなくらい目を剥いた。

もはや悲鳴にもならず、鼻からこれでもかというほど、息を吸う。そして、気持ち胸を張るようすらして織りを迎える松太郎に、織りは腹の底から叫んだ。

「松太郎さまのバカ！！！！！！もう織りは知りません！！！！！！」

脱兎のごとく駆け出した織りは、松太郎を置いて道場を出てしまった。

松太郎は、脇を通り過ぎた織りの着物をつかもうと手を伸ばしたが、むなしくそれは空をきるのみだった。

「なっ……。俺を忘れて行くとは……」

自分の失態に全く気づかず、今度は松太郎が目を剥く。
驚いたように織りの出て行った先を見つめる松太郎を見て、水村は
かける言葉がなかった。

（織り殿も大変な男に嫁いだものだ…）

男心

「松太朗殿」

織りが自分を忘れて帰ってしまったと鼻息を荒くしてあた松太朗を、水村が呼びかけた。

「これは織り殿の忘れ物です」

そう言つて渡したのは竹刀と袱紗だった。

松太朗は、なぜ袱紗？と、中を確認する。

すると見慣れたものが表れ、松太朗は青ざめる。

「今日は、嫁いだから初めて稽古に出てこられたのだが…。やあ見違えました」

今度は本当に閉じている目元を緩ませて、水村は青ざめる松太朗に気づかず続ける。

「お美しくなられたし、すっかり女心まで芽生えられておる。全部松太朗殿のおかげだ」

最初、道場に顔を出した織りを見て言葉を失った。

すっかり垢抜けて、立派な女性になっていた。

黙っていれば、織りはもう姫君ではなく、奥方である。

「まあ、相変わらず落ち着きはないが…。しかし、先ほど嬉しそうにその文を見せてくれて。聞けば後朝の歌だと言つので…本当に驚きました」

幼い頃から見ていた織りが、成長し、嫁いで女になり、奥方然とした表情を見せるようになった。娘の幸せを素直に喜べないような複雑な思いが、水村にはあったのだが、松太郎を見て安心した。

少し……

いや、だいぶん天然ではあるようだが、彼ならば織りを幸せにしてくれる。

織りが愛おしくて仕方ないのだろう。それが手に取るように分かる。それは、水村としては複雑に腹立たしさもありはするのだが……。何にせよ、松太郎は織りを大切にしてくれると分かった。

「松太郎殿……」

松太郎と向き合い、娘を送り出す気分になっていた。

しかし、そんな水村の肩を松太郎は青筋を立てた表情で掴んだ。

「えっ……あれ？」

「忘れて下され……」

絞り出すような松太郎の声に、水村は戸惑った。

「しよ……松太郎殿……何を……?????」

「頼む……この後朝の歌のこと、忘れて下され……。これは……俺の一生の恥だあ……！だからっ……」

朝昼晩 共にある人 いることぞ 嬉しきことは 何にも変わらず

何の捻りも裏読みもない。松太郎の生涯で一番の駄作（自称）である歌をまさか他人に見られているとも知らず、松太郎は絶望に暮れた。

そんなことに必死になる松太郎を見て、呆けていた水村は、次の瞬間には高らかに笑い飛ばした。

「笑い事ではないのだ…！」

「ははは…誰にも…言わぬ。ご安心めされよ。…くくっ」

似た者夫婦ではないか。

水村は思った。

「松太郎殿の名誉の為に申し上げるが、織り殿はその歌をしっかりと胸に抱き、頬を染めて私に自慢してこられたのですよ」

「……こんな歌を…？」

「織り殿は、本当に松太郎殿を好いておるのですよ」

にっこりと微笑む水村に、松太郎は顔を赤らめた。

(青くなったり赤くなったり…忙しい御仁だ。)

「恐らく今、『いつになったら松太郎さまはわたくしに追いついて来られるのかしら』と織り殿は不安げに待っておるはずだ。早くせねば、次は『もうっ！松太郎さまなんて知らない』とご機嫌を損ねるだろう」

わざと声を高くして織りの声を真似ようとする水村に、松太郎は苦笑した。なんだかムキになるのも、バカバカしくなったのだ。

そう思うと力が抜け、ふつと笑い踵を返した。

「全く似ておられぬぞ」

わざとそう言つて松太郎も駆け出す。

その後ろ姿を見送り、水村はんぐつと伸びをした。

帰り道

駆け足で松太郎は帰り道、織りの姿を追った。すると案の定、道場を出てしばらく行った橋の上で、織りはぼつと川を眺めていた。

その横に、松太郎が並ぶ。

「織りは怒っているのですっ」

織りは顔を背けてそう言う。

「うむ、俺は織り殿から置いてけぼりにされて悲しかった」

松太郎も川を見ながら抑揚なく言った。

川面にはそっぽうを向く織りと、間抜けな顔の自分が並んで写っている。

「織りは怒っているのですっ」

ぷつと膨れ、同じ言葉を繰り返す。そんな織りの顔を松太郎が覗き

込み…

「織り殿、今度から街を歩くときはその顔で歩くといい」

膨れ面の織りを見ながら、おもむろに松太郎は真面目くさった顔で言った。

「な…」

さすがにムっとした織りは松太郎を見上げた。

松太郎は腕組みし、やはり真面目な表情で織りの顔をじっと見る。

「うむ…その顔でもいいが…」

「わたくしをからかってるんですか!？」

夫の胸ぐらを掴む勢いで言う織りに、松太郎は首を振る。

「真面目に言っておるのだ。よく見れば市井とは…年頃の男の往来が多い。織り殿がいつものようにニコニコしておっは、どこの馬とも知れん奴が織り殿に懸想してしまう。それは…やはり夫の俺にはおもしろくないからな」

辺りを見回し、心なしか誇らしげな松太郎が、珍しく饒舌に松太郎が言う。

それが織りにはあまりに突飛な発言であつたため、頭もよく回らずただただ呆然としてしまった。

「しよ…松太郎さま…？」

「まああまり家にじっとしてるのも織り殿の性分に合わないだろうから、道場の帰りは一緒に帰ろう。たまには散歩に出かけるのもいいな。そうすれば共に語らせるしな」

目を丸々させて、ぽかんと口を開けたままの織りは驚き覚めやらぬまま呟いた。

「松太郎さまも…そんなこと考えるんですか…？」

織りの言葉は、松太郎にとっていつも不思議なものだった。

「？そんなこと…？」

「わたくしと共に時間を過ごしたい…」と

やはり織りの言葉は不可解だ。

「?当たり前だろう。夫婦なのだから。織り殿、水面を見るがいい」
言われたとおり、織りは水面を見た。

先ほど松太朗が見たように、今度は訝しんだ面持ちの織りと、誇らしげな松太朗が並んで写っている。

それを見て、織りは松太朗が言いたいことがよく分からず、実物の松太朗を見上げる。

松太朗は、水面を見ながら口を開いた。

「祝言を挙げて、早一月。こうやって並ぶと、ちったあ夫婦らしくなってきたとは思わぬか？」
言われて織りは、もう一度水面の二人に目をやる。

「…そうでしょうか？」

織りは首を傾げる。

まだまだ幼さの残る自分と、大人で見目麗しい松太朗。とても夫婦らしくは見えない。

せいぜい近所の綺麗な兄ちゃんとかじゃ馬な妹といったかんじであるのか……。
そう思うと、織りは俄然松太朗の隣にいることに、そわそわ落ち着きなく感じた。

「うむ。俺は少しそう思うのだがなあ……。

毎日同じ飯を食い、同じ部屋で眠り、同じ家に住まう。

俺は自分の『家庭』があることがうれしくてたまらんだ」

実は祝言の夜以来、二人は同じ布団には寝ていない。二つの布団を並べて寝ている。だからもちろん夫婦の営みもあれ出来ないのだ。

だからかもしれないが、織りは本当に「妻」としての自覚がなかった。

今までと何も変わらないと思っていた。

しかし、松太朗は同じ家で寝食を共にするうちに、きちんと織りを妻として迎えていた。

まだまだ幼く無邪気な織りを、急に大人にするのがなんだか可哀想な気がして、祝言の日以来手を出さずにいたのだ。

帰る道すがら、ポツリポツリと胸の内を明かす松太朗を、織りは愛おしく感じた。

そして、彼との距離がぐつと縮まったと感じた。織りは熱くなる胸の奥を感じながら、極上の笑みを浮かべながら、その話に耳を傾けたのだ。

鱗雲・・・のその後(前書き)

夫婦として想いを確かめあった二人。

でも、お嫁さんには一つ気がかりなことがあったのです。

鱗雲・・・その後

「松太郎さまって…よく分かりませんわ」

相変わらず鱗雲の下、稽古を終えて水村とお茶を啜る織りは、ため息まじりにそう言った。

「鈍感な方かと思えば、わたくしがドキドキするようなことを仰るし…」

「う…うゝむ…」

彼は天然なのだ。

何においても計算でも悪意でもなく、自然とそれをやっているのだ。それが分かりきった水村は、この幼妻に何と言ってやればよいのか、思案した。

「わたくしを大事になさっているかと思えば、メダカさまなる方のお話をニコニコとなさるし…」

「メ・・・メダカさま…?」

うなだれる織りの話しを聞きながら、水村は上ずった声でオウム返しする。

変わった名である。

そして松太郎がまさか妾を囲っているとも思えない。

かと言って、花街通いをするような男にも見えない。

男である水村も目眩を覚えるほど美しく眩しいほどの微笑みを浮かべる松太郎は、おそらく自分の容姿についての自覚がない。

というか、そういうことには無頓着なのだ。

そして、女道楽に関しても同じように無頓着だ。

よく言えば、常に何があっても動じず、ひたすらに自然体でいるのだある。

そんな松太郎に女の影？

眉根をぎゅーっと寄せて、水村は唸った。

「武家の娘ですから…夫に側室があっても、覚悟はございます。でも松太郎さま、『そんなのではなく、猫の話した』なんて…」
悲しそうに織りがつぶやく。

あの日以来、少しずつ「妻」としての自覚も芽生え出した織りは、松太郎が誤魔化したり嘘をつくのがひどく悲しかった。

と、同時にあの松太郎がそんな誤魔化しや嘘を言うのだろうか…
とも思う。

信じてよいのか否か…。

悩む織りを横目に、水村は確信して、自信を持って言う。

「猫の話でしょう。」

…失礼ながら、松太郎殿には妾を囲う甲斐性も余裕もないはずだ」

自信たっぷり、そして冷静な水村の言葉に、織りはうむ、と唸る。

「織り殿」

話題の人は、相変わらず目が眩むほどの笑顔でいつも通り愛妻を迎えに来た。

相変わらず夫婦らしい甘い時もないのだが、この二人は仲睦まじくやっている。

おそらくお互いがお互いを大切に、そして愛おしくおもう気持ちが彼らの絆を深めているのだろう。

「帰りましょう」

手を差し出す松太郎に、織りは上目遣いに水村を見る。

水村は、ふわりと微笑んだ。

「何も心配することはありませんよ。松太郎殿に安心してついて行きなさい」

「そうでしょうか？」

「松太郎殿には…嘘をつく器用さもないだろう」

ねっと、松太朗に笑いかける水村に、松太朗は「何だ？」と二人を交互に見た。

「早く帰りなさい」

昔からするのように、水村は織りのお尻をポンと叩く。その拍子で織りは縁側からピョンと地に降りた。

すると

「水村殿、俺の妻に何をするのだ」

松太朗は、大股でこちらに歩み寄ると、織りの背に腕を回し、胸に抱く。

「松太朗さま??」

赤くなった織りが、胸元から松太朗を見上げる。

初夜以来、初めて松太朗をこんなに近く感じる。

そして、初めてこうやって抱きしめられる。

着物越しに感じる松太朗の体温と、小さく感じる胸の鼓動。

そして、頭一つ分違う彼を直に感じて、

(松太朗さまってやっぱり背が高いなあ・・・)
などと、呑気に考える。

「申し訳ない」

水村は両手を肩まで上げるとプラプラ振って見せる。

織りの尻に軽率に触れたこと。

そして織りの尻を軽率に叩いたこと。（と言っても軽くなので、痛くはなかったはずだ）

それらの水村の行動に、焼き餅を妬く松太郎を見て、彼は苦笑した。

「??？」

頬を染めながら怪訝な表情の織りは、なぜ松太郎が苦虫を潰した顔をしているのか分からなかった。

「織り殿、手を繋がないか？」

帰り道、松太郎は言いながら織りの返事を待たずにその手を取る。もちろん手をつなぐのも初夜以来である。

「小さいな」

つないだ手を目の前にかざし驚いた松太郎が呟く。

「松太郎さまの手が大きいのです」

松太郎に手を引っ張られた状態の織りが冷静に答える。

松太郎はふくと、その手を下ろした。

「今日の夕飯は何だろうな」

「里芋の煮っ転がしだと茜が申しておりました」

松太郎の家は、未だに茜が食事の準備をしている。茜の料理は天下一品だ。だから、織りが料理が一切できなくても困りはしないのだ。それに、二人も茜のご飯がいいし、茜も喜んで自分のご飯を食べてくれる二人のために一生懸命作る。

そのかわりと言ってはなんだが、茜には二人とも頭が上がらない。

「そういえば、メダカが最近顔をみせないな・・・」

「め・・・メダカ・・・さま？」

さきほどの話しを聞いていたのだろうか？

おもむろに松太郎が呟いた。

「織り殿はメダカには会ったことはないか？」

きよとんと自分を見下ろす松太郎に、織りは視線をそらして頷く。

「今年の春先に突然うちに来るようになったのだが・・・」

茜がえさをやっているのかな？」

もしかしたら、昼間に茜がやっているのかもしれない。そう思ったのだ。

織りは、パツと松太郎を見上げる。

「え・・・エサ？」

「うむ。メダカは晩飯の残りものを好んで食べていた。・・・まあこんな家計ではネコのエサなど買えはせんかな」

「あ・・・ネコ・・・でしたか」

「ネコだ。三毛猫だ」

松太郎の言葉に織りは安堵し、一人でクスクス笑い出した。

「どうした？」

「いいえ・・・」

そう言いながらも、笑いが止まらない。

よくは分からないが・・・織りが楽しげに笑っているのでよしとしよう。

好いた娘が隣にいる喜び。
家族のある嬉しさ。

織りが嫁いでひと月。
松太郎は徐々にそれを実感していた。

f i n

鱗雲・・・のその後（後書き）

天然松太郎と無邪気な織り。

しばらくは二人と使用人一人の新婚生活が続きそうです。

【落葉】（前書き）

葉っぱが色づき、山のおちらこちからも赤や黄色になり始めた頃。
松太郎の食欲には拍車がかかってきました。

【落葉】

「秋も深まったな」

にや

庭の大きな銀杏の木を見つめながら松太郎は目を細めた。

朝夕は冷えてきたが、日中の縁側は小春日和で心地よい。色付いた銀杏をしがない1日、ぼんやりと眺めているとそのままうたた寝をしてしまいそうだ。

「あの葉が落ちましたら、焼き芋をしよう」

にや

その為に、今は薩摩芋を栽培中だ。そろそろ収穫できるはずだ。

「芋を収穫したら、芋の炊き込み飯と味噌汁を茜に作ってもらおう」

にや

膝の上に鎮座する愛猫の背を撫でながら松太郎は目が潰れてしまいそうなほど輝かしい微笑みを浮かべた。

この愛猫 メダカと名づけていると、三度と限らなくてよいの

だが…の食事をこよなく愛する絶世の美男子は、己の容姿には全く無頓着である。

そして、貧乏だった。

「そうだ。今年は水飴を買ってきて、大学芋を作ってもらおう」

パツと表情を明るくした松太郎は、「いい考えだ」と、独り満足げに頷く。

毎年、庭の落ち葉を集めて焚き火をし、そこで芋や栗を焼くのが、幼い頃から松太郎の家の恒例行事だ。

確か去年は兄がたくさん銀杏を買って来たので、義姉がそれを炊き込み飯にして、残りは茶碗蒸しにした。それでも余ったので、焚き火で焼いたのだ…。

「大学芋は甘いから、きつと織り殿も喜ぶだろう」

メダカと食事をこよなく愛する松太郎には、もう一つ愛するものが今年を増えた。

妻の織りである。

松太郎は、喜ぶ織りを想像し、目尻をトロンとゆるませ、口元には押さえがたい笑みをたたえた。

「そういえば織り殿は何か好きなんだろうな…。なあメダカ」
顎をゴロゴロ鳴らせていたメダカは、突然キツと鋭い目を剥き、松太郎の指を軽く噛んだ。

「った！？何をするのだメダカ！！！」

現実に戻された松太郎は、慌てて手を引いた。
松太郎の細く、優雅な指には赤い噛み痕がしっかりと残っている。
幸い血は出ていないようだ。

驚く松太郎を後目に、メダカは優雅な仕草で松太郎を一瞥し目を閉じると、ふあくっと大きな欠伸をして、再び彼の膝の上で惰眠を貪る。

「まったく…。猫は気ままで楽な生き物だな…」

そよそよと風が吹き、松太郎の髪もメダカの毛も心地よく揺れる。

眠るメダカの背を撫でながら、今日の休日をいかに過ごそうかと松

太朗は考えていた。

「お上が俺をもそつと働かせれば、俺ももう少し贅沢が出来るのだがなあ……」

少なくとも、三食違つおかずで飯が食べられるだろう。

天然

「松太郎さま」

穏やかな明るい声に松太郎が振り返れる。

質素な着物に身を包んでいるものの、若さ故と元来持ち合わせた明朗快活な性から、自然とそれが表情にあらわれ、それは内側からにじみでる華やかさになっている。彼女が笑えばそこは花畑のように明るくなる。

そんな妻を松太郎はすっかり気に入って可愛がっていた。

しかし、その天真爛漫さと無邪気さ、そしてあまりに彼女を纏う雰囲気が透明で清潔であるため、初夜以来、手を出せずにいる。

それはさておき、松太郎は愛しい妻の姿に自然と笑みをこぼした。

「……っ……」

松太郎が向ける、あまりに眩しい微笑みに、声をかけた妻 - 織りは思わず小さく呻き目を瞑った。

松太郎の心の奥底にある織りへの気持ちになど気づかぬ当の本人はこの美しすぎる夫に振り回されてばかりだ、と常々頬を膨らませていた。（松太郎にとってはそんな織りの表情や仕草も可愛らしくて仕方がないのだが……。）

「織り殿、目にゴミでも？」

そんな天然ボケっぷりを発揮しながら、松太郎は織りに近づく。

松太郎が美男子であるが故の嫉妬を受けぬ理由はこれであった。

松太郎のこのボケっぷりである。この美しい貴公子然とした男は次男坊であるがための、のんびりした性格と物事に捕らわれない無欲さ、そしてテンポのずれた性格をしている。

これが松太郎の愛される本当の所以であろう。

自分より頭一つ小さい織りの顔を覗くために、松太郎はかんだ。

「どれ、見てやろう。織り殿、顔を上げて」

頭にそつと手を置き、織りに上を向くように言う松太郎に、織りは心臓が飛び出しそうなくらいドキドキしていた。

こ…これは、初夜以来の、接吻を交わすチャンス…。

織りは目にゴミが入ったことにして上を向く。

薄目で松太郎を見上げると、見慣れてはいるものの相変わらず側にあることに慣れない彼の美しい顔が、すぐ近くにあった。

(しよ…松太朗さま…)

少女らしく頬を赤らめた織りは自らの心臓が飛び出すのを押さえるかのように、胸に手を当てた。そして心なしか唇を尖らせる。

「織り殿」

松太朗の低くも高くもない、心地よい声が聞こえたかと思うと、左手が織りの肩を支え、右手はそつと頬に触れられた。彼女を呼びかける声音は相変わらず優しく柔らかい。まるで今日の縁側のように心地よいものだ。

松太朗の気配がすぐ側にある。

目を閉じてしまっているのでその距離感がつかめず、逆にそれが織りの胸を高ぶらせた。いつくるかいつくるか、と待つ時間が歯がゆくもあり、くすぐったくもある。

ふと、松太朗の長い前髪だと思っものが、織りの額に触れた。

(ああ…近くにっ…)

久しぶりに松太朗を近くに感じて、織りは最早血圧が最高潮に上がりきっていた。

ふっ
…

松太郎の息が、織りの睫を揺らす。

(ひゃあああっ)

織りは失神寸前だった。

「取れた」

目頭から目尻にかけて、松太郎の指の腹が沿う。そして軽やかな声とともに、織りに触れていた両手が離れていく。

「へ？」

ぱちつと音がしそうなくらい勢いで、織りが目を開けると、そこには満面の笑みを浮かべた松太郎がいた。

「睫、取れましたよ」

織りの下瞼に付いていた睫を取ってやり、松太郎は頗る機嫌がよかつた。

（ま・・・睫？）

「あ…ありがとうございます…」

拍子抜けした織りが脱力したように呟く。

松太郎は「いえいえ」と答えながら、うぐんと庭に向かって伸びをした。

ただそれだけの気怠い午後の風景が、何とも雅な様に見えるのは松太郎のせいである。

肩から力の抜けた織りは、そんな松太郎の姿を見ながらいつもの如く、胸をもちやもやさせた。

（なんだか…いつもわたくしばかりドキドキしてるわ…）

天然の夫をもつ幼妻は、彼の見ていないスキに、ぷつと膨れっ面をしてみせた。

悪戯

「そういえば……」

織りが声をかけた時に、自分の膝からぴよんと飛び降りてしまったメダカの行方を目で探していた松太郎だったが、気ままな猫の姿はどこにもなかった。

そして、相変わらずのふくれっ面をした織りを向く。

その瞬間に織りは、条件反射のごとくピンと背筋を伸ばし、表情も整える。

「俺に何か用事があったのではないか？」

「あっ」

煮え切らない思いでいた織りも、はたと思い出し、目を大きくする。そして、つっと松太郎に近寄り見上げた。

「そうでしたわ。あの、実は実家から使いが来て、顔をだすようにと母からの伝言を受けてしまって……」

「うむ……」

「ですから、少しの間だけ出かけてこようと思うのですが、よろしいですか？」

申し訳なさそうに言う織りの言葉に、なにやら松太郎は顎に手を当てて考えた。だした。

「泊まりがけで行かれるのか？」

「いえいえ、夕方には帰ります」

松太郎の問いに、織りは目を丸くしたまま手をふって否定する。

結婚してから、実家に帰るということだけでも気が引けるのに、まさか泊まりがけで帰るなどとてもない。織りにもこのくらいの一般常識は備わっていた。

「では俺もお供しよう」

唐突に松太郎はそう言って織りを振り向くとニッコリ笑った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ」

なぜ!?

一体どういう風の吹き回しですか!?

と尋ねたかったのだが、とっさの事に頭が回らなくなったのと、相変わらずの松太郎のステキ笑顔に、織りは言葉を詰まらせてしまう。

そんな織りに気づかず、松太郎は名案だとばかりに長い指をピンと立てて言う。

「思えば婚儀以来、義母上には挨拶も行っていないし、行ってご機嫌を伺おう」

「そ…..そうですね」

松太郎さまと実家に！？

織りは嬉しいような恥ずかしいような複雑な気持ちになった。かつこよく、優しい旦那様を実家でお披露目できることは嬉しい。しかし、破瓜後に両親きょうだいに会うのは気恥ずかしい。それに何より、その破瓜をした相手の天然のボケっぷりが実家でどのように映るか。

そして、その天然ボケっぷりを発揮させ、松太郎が織りにとって都合の悪いことを言いかねない。

また、両親も自分に都合の悪いことを松太郎に言いかねない。

いろいろな事を考えた織りには、静かにそう答えるのがやっとだった。

「やはり女親はご心配召されるであろう。織り殿の元気な顔を俺ばかりが独り占めするわけにもゆかぬし、織り殿も夫のグチを聞いてもらわねばならぬし」

はははっと、鈴を鳴らしたように笑う松太郎に、織りはぶんぶんと首を振った。

「ぐ…グチだなんてとんでもございませんわつ。松太郎さまは織りには勿体無いくらいのダンナさまです」

勢いに任せてそう言う織りは、胸中で
(眩しさと、どきまぎさせられること以外は…)
とだけ付け足した。

あまりに首を激しく振りながら言う織りを見て、松太郎はまた鈴を
鳴らした。

そしてふわりと織りの頭に、自分の手を乗せる。

「逆であろう。俺には勿体無いくらいの妻だ」

ポツと織りが真っ赤になる。

それを見た松太郎はニヤリと笑う。

織りのこうやって照れる姿を見ると可愛らしくて、たまにからかい
たくなるのだ。

浮世離れたダンナ様は、そうやって奥さんをいぢめる男らしい気
持ちをたまに持ち合わせるらしかった。

松太郎は妖艶な表情で頭に載せた手をそのまま頬に滑らせた。

「こんな可愛らしい妻を頂いたことをしっかりと感謝せねばなるま
い」

そう言うのと、また手を滑らせそつと顎を持ち上げる。

「かつ…!?!?」

松太郎が自分のことを可愛らしいなどと言うのは初めてだった。それにこんな妖艶な表情でそんな殺し文句を言うだなんて。

「織り殿」

松太郎は、低く名を呼ぶとゆっくりと顔を近づけてきた。顎を捕まれたままの織りは完全にパニック状態だった。先ほどの余韻があり、ましてや完全に気を抜いた状態だったため、全く心の準備ができていない。

「しよしよしよたろうさまあ〜」

焦点も合わないほどに、松太郎の顔が近づいた時、織りはたまらず情けない声を出していた。

首まで赤くして松太郎を見上げると、いたずらっ子のような目をした松太郎がいる。

織りはカアッと茹で蛸のように真っ赤になった。

そして、ポカポカと小さな拳で松太郎の腕や胸を叩く。

「もっつ！！！！松太郎さま、またわたくしをからかったのですね！！」

織りがキンキン声で叫ぶが、松太郎は気にせず笑い飛ばす。

「からかったのではない。夫婦なのだから別によいではないか」

「ふ・・・夫婦ですけれども、織りには心の準備が必要なのです」

「では、常に準備をしておくがよい。いつ俺がまた手を出すとも分からんぞ」

そして、縁側にある草履に足を通すと、「ははははは」と笑いながら、そのまま家庭菜園の方へと向かってしまった。

「もう！！松太郎さまなんか知りません」

強かさ

そもそも織りは茜を供に実家へ行くつもりだった。

土産は茜特製のレンコンとゴボウの甘辛炒めだ。それと、ジャガイモの揚げ物である。

実家の家族は皆、茜の料理のファンだった。そして、それ故に織りの嫁ぎ先に茜を連れて行くこと家の者は反対したくらいだ。

準備を終えて、心なしかウキウキする松太郎と、その横にふくれっ面をする織りを、茜は土産の包みを持ったまま半眼で見た。

「俺も一緒に行くことにした」

「…はあ、そうですね」

至極冷静に答えた茜は織りを見た。

ぷいと顔を背けている。

どうせまた松太郎にからかわれたのであろうと、ここ3ヶ月近くこの夫婦と共に暮らした茜は、大方の予想がついた。

茜は、織りや他の人間を腑抜けにしてしまう松太郎の眩しい笑顔を見ても、冷静でいられる数少ない人間である。

本人曰わく

「お美しいお顔ではございますが、わたくしは面食いではございませんので」

らしい。

それはさておき、茜は小さくため息をついた。

松太郎が一緒ならば、帰る時間や夕飯の準備を心配する必要はない。あわよくばあちらの家でご馳走になろう……。

「では参りましょうか」

「うむ」

元気に返事をした松太郎は、よいせつ、とこちらも風呂敷包みを持ち上げた。

茜は眉を寄せる。

織りも不振な顔つきで松太郎を振り向いた。

茜はそつと包みを指さした。

「松太郎さま、それは……？」

松太郎は、重い荷物と茜・織りを見て首を傾げた。そして普段から猫背の背を伸ばし、

「土産に決まっております。妻の実家に手ぶらで挨拶に伺う夫がどこにいるのだ」

と自信まんまんに答えた。

『土産』と聞いて、織りは眉を顰めた。いつ準備したのだろう。

「いつ、何を準備したのですか？」

そして、茜も眉を顰めて織りではとうてい想像もつかない心配をし

始めた。

「松太郎さま、大変申し上げにくいのですが、手みやげを準備するような（懐の）余裕は……」
ハッキリとは言わず、茜は頭の中でそろばんをはじく。

女たちの心配をよそに家の主は、ふんと鼻息を荒くして心なしか自慢気に答えた。

「穫れたて、大根南瓜赤蕪だ」

それは松太郎が、休日の日課になっている家庭菜園の数々だった。

織りはあんぐりとして、野菜の包まれた風呂敷と松太郎、そしておそろおそろ茜を見た。

茜は膨らんだ風呂敷を無感情に見つめている。

この貧乏家計を助けているのは、松太郎の家庭菜園だ。そしてたまの松太郎のバイト代と本職の給料（微々たるもの）であった。

茜は視線を宙に漂わせた。

そして、

「帰りは織り様のご実家から土産を貰って帰りましょう」とおもむろに告げた。

「ご実家のお隣は野菜倉庫のような蔵をお持ちで、今の時期は野菜や柿がどっさりお裾分けでありましたから」

ねっと、茜は織りに向かって微笑んだ。

それは松太郎に勝るとも劣らない、うっとりしてしまうくらいに美しい笑顔だった。

しかし、その腹の底には儉約の鬼が住まうのだ。

油断ならない。

「俺は柿は好きなんだ」

茜の腹の底になど、全く気づかない松太郎が実に呑気に言う。

いつもの織りならば、頬を赤らめ、「まあ、松太郎さまは柿がお好きなんですね。わたくしもです」などと半分嘘を織り交ぜながら言うはずであった。

しかし、今、茜の本性を眼前にした織りにそんな余裕はない。

「わ…わたくし…渋柿を食べて以来柿は苦手で…」

と正直に答えた。

とにもかくにも、織りはこの美しい夫には適わない。

それ以上に、このしたたかな侍女には適わないのであった。

噂話

実家までの道のり、松太郎が土産を持ったまま、二人の女の歩調に合わせてゆっくり歩いた。

今日はあまり人の往来はないが、織りの家は比較的金持ち屋敷の並ぶ通りにあるので、上品な店や屋敷が建ち並んでいる。

「あ、織り殿。これを」

道すがら、人の家の塀の近くで何か拾いものをした松太郎は、織りの手にそれをポンと置いた。

織りは手の上のものを覗く。

茜も背後から主人の手を覗き込んだ。

「これは…」

「まつぼっくり。可愛らしいなあ」

小さな開ききつていない松ぼっくりを織りに手渡した松太郎はニコニコと言った。

織りと茜が松太郎を見上げる。

松ぼっくりなど珍しくもない。

織りの通う水村の道場にはたくさんの松が植えてあり、たくさんの松ぼっくりが落ちている。

しかし、植物が好きなのである。顔を上機嫌の松太郎は、二人の女が怪訝な顔をするのにも気を留めずに歩き続けた。

途中、松太郎の容姿の美しさにあちこちからため息が零れる。

「なんと美しい殿方かしら……」「一度でいいから、あんな方と添うてみたい……」「一言でもお声が聞ければ天にも昇るよう……」「あんな方になら遊ばれてもいいわ……」

などなど。

茜にもしつかりと聞こえていたが、もちろん意に介さず。しれっとした顔で聞き流している。

松太郎の隣で、一緒にならんで歩いていられる。彼の笑顔が自分に向けられる。

そんな妻という立場である織りにとって、このダンナ様は鼻が高いのだが……。

「松太郎さまはモテモテですわね」

あまり面白くないように織りが言う。

「ん？」

妻の言葉の意味が分からず、松太郎は目をぱちくりさせる。

「松太郎さまをご覧になって、みんな松太郎さまと添うてみたいと思ってみたいですよ」

そもそも妻が側にいるのに、不躰にもあんな声が聞こえるだなんて

…。
そもそも自分は、周囲から松太朗の妻に見えているのだろうか…。

(…きつと…見えてないんだわ…)

ゾツとするような事実を改めて思い知り、織りは何だか面白くなかった。

確かに自分と松太朗が夫婦として並んでもチンチクリンである。そんなことは織り自信が百も承知であったのだが…。

松太朗はそんな織りの気持ちも知らずに首を傾げた。

「俺のような男と添うてもつまらんだろうに…」
なあ、と松太朗は妻に同意を求めた。

織り殿がニコニコしているのは、元来の天真爛漫さと若さの青春故であろうと思っっている。それに考えたくもないが、おそらく織り殿は誰と夫婦になろうとも、こうやってニコニコしているのだろう。

松太朗はそう思っていた。

自身に対して無頓着すぎる松太朗は、本心からそう言うのだ。

織りは小さくため息をつく。

そして、ぴつと指をたて、師範のようにして説明を始めた。

「そう思っているのは松太郎さまだけです。松太郎さまのすばらしさは、内面からもにじみ出ているのです。お顔の美しさだけではありませんわ！松太郎さまは、わたくしが今まで見てきた殿方の誰よりもステキなお方だし、ステキなお姿をしておいでです。まるで絵巻物の貴公子さながらすわ」

「…織り殿、絵巻物は読まないのであるう？」

「うっ…」

後半勢いに任せて言ってみたものの、松太郎のあまりに冷静なツツコミに織りは言葉に詰まってしまう。

そんな夫婦を後ろからみていた茜がクスクス笑った。

「それにそんなにたくさん殿方をご覧になってこられたのか？」ズイッと顔を寄せて聞く松太郎にの言葉には少しだけ怒っているかのように低く、声音にはトゲがあった。

「ち…違います！だって水村さまの道場には殿方の方が多かったものですから…」

夫のいつもと違う雰囲気には織りは冷や汗を流しながら言い訳がましく言った。

「ふうん」

まだ疑うような目で言う松太郎に織りは「違います」と連呼した。

「ま。今は俺の妻なわけだし、よいがな」

そう言つて顔を背ける松太郎は肩を振るわせて笑つのをこらえた。

これだから織りをからかうのはおもしろい。

そんな二人のやりとりを一步退いた立場から見る茜は、はあっとため息をついたのだった。

帰省

織りの実家は二人が住む家より大きくて立派だった。

三人は部屋に通されていた。

上座には穏やかに微笑む織りの母・利玖がいる。織りは一男二女の末娘であるのだが、利玖はとてもしも子どもを産んだとは思えない若々しい。

「お久しゅうございますわね、松太郎殿。織りは何かとあなたに迷惑ばかりかけているのではないかしら」

「義母上、ご機嫌麗しいようで何よりです。織り殿とは仲良く暮らしております」

利玖の言葉に、松太郎は軽く首を振ると、ここでも美しく笑ってみせた。白い歯が覗き、キラリと光りそうなほどである。

利玖は上品に袖で口元を隠して軽やかに笑った。

「まあ。ほほほ。いいわねえ若い人たちは。織りは真ん中ということもあってワガママ三昧で育ってきたから…」

「お母さま!」
自分の都合が悪くなりそうな話しの展開に、織りは慌てて制止に入った。

「ほら、このように慎みもないでしょう」

利玖は頬に手を当てて、困ったものだわ、とため息を吐いてみせる。織りはぬううつつ、と悔しげに歯を食いしばった。

やはり心配したとおり、母は松太朗にいらぬ事を言いそうである。目が離せない……。

「それより、お母さま。わざわざたくしを呼びつけるような用があつたのではございませんか？」

わざと咳払いを挟み、織りはさつさと用事を済ませて帰ろうと思ひ口早くそう言った。

しかし、利玖は17年間織りを育てた母親であつた。

娘の居心地の悪い理由も、さつさと帰ろうとしていることもすべてお見通しだったらしく、こちらもわざと眉根を寄せて悲しみの表情を作ってみせる。

「何ですか……。久しぶりに帰つて来たと思えば薄情な。娘を心配する母に近況を伝えようとは思わないのですか。ああ悲しや……。わたくしが手塩にかけて育てた娘も、所詮嫁げば余所の娘。家に残される母の気持ちなど、とうてい分かるはずもあるまい……」

「残されるって……。まだ家には晴暁がいるではありませんか」

悲しみに暮れる母らしく、袖で目を押さえ泣きまねをしてみせる利玖に、織りは半眼で言う。

織りには先に嫁いだ姉・絹と3つ年下で元服間もない弟・晴暁がいた。その晴暁はまだ家にいる。家督も父の代で有るが故、気ままな寺子屋&道場通いをしているのだ。

だから、絶対に母は悲しみに暮れる程寂しい訳はない。

「晴暁もいずれは嫁を取り人のものになるのです。本におまえは人の気も知らず……。うう……。申し訳ございません、松太朗殿。こんな薄情な娘を嫁に出してしまい……」

「んな……!?!?」

「義母上」

くじけずに　むしろ松太郎を巻き込んで嘆き悲しむ利玖に、娘は言葉を失い、婿はすっかりとその義母に同情した。

松太郎も整った眉を顰めると、そつと利玖の肩に手をかける。

「義母上、元気を出してください」

「しよ・・・松太郎さま・・・!?」

優しく利玖の手を取らんばかりの雰囲気で松太郎は、やはり美しく哀愁を漂わせながら話し始めた。

「今日はゆっくり織り殿と話しをされると良い。私は毎日織り殿の元気な笑顔を見せてもらっているのだ。私が毎日元気に楽しく暮らせるのも、この妻のおかげ。ひいてはこのようなすばらしい娘をお育てになり、私に嫁がせて下さった義母上たちのおかげでもあるのですから」

「松太郎さま!!!」

松太郎の言葉に、利玖がぱあつと目を輝かせて顔を上げた。それは織りとそっくりである。

松太郎は目を細めて微笑む。

「では、今日はお泊まりあそばせ」

利玖は、先ほどの涙はどこへやら、極上の微笑みを浮かべてそう言った。

「ちよ・・・お母さま!？」

「ほほほ、織り。今日は松太郎殿のお許しも出たことですし、ゆっくりとしてらっしゃい」

完全に敵の罠にはまった織りと松太郎は、今宵を敵の陣地で明かす

こととなった。

夫婦

松太郎は遠慮して夕方帰ろうとしたのだが、結局利玖に捕まってしまった。

曰わく

「一人で帰ってもお寂しいでしょうしご飯もありませんでしょう。せつかくですから、うちに泊まってらしてね」ということだ。

織りは久しぶりの自室の真ん中にちょこんと座った。

3ヶ月前までここで毎日暮らしていたのに、何だか懐かしい。

松太郎は、織りの文机の上にある彼女の愛読書、兵法をパラパラ捲った。

「不思議なものだなあ……」

本に目を落としたままの松太郎が呟く。

「何がでございます?」

ぐるうり天井から床から眺めていた織りは、松太郎の姿に目を留めて首を傾げる。

松太郎は織り代わりにぐるうり部屋を見回した。

「初めて来た家で…織り殿の家族の中にいるというのに、落ち着くなあと思つてな」

織りは松太郎の言葉にきよんとする。

「織り殿の匂いに慣れてしまったのだろうか」

思えば3ヶ月、毎日一緒にいて同じ部屋で寝食を共にして来たことを実感し、松太郎は微笑む。

織りの実家が、一気に華やぐような微笑みだ。

松太郎は腰を上げ織りの正面に腰を下ろす。そして自分の両手で織りの手を包み込むように取る。

「ど…どうしたのです!？」

松太郎の仕草があまり優雅で、織りは小さく震えた。

松太郎はそんな織りに気づかず、柔らかく滑らかな手の甲の感触を楽しむように、指の腹でさすりながら言う。

「まだ3ヶ月しか経っておらんななあ…。もそつと長い時間を共に過ごしたような気持ちだ」

「でも、あつと言う間の3ヶ月でしたわ」

あつと言う間だから、まだ松太郎さまに慣れませんのね、と織りは胸中で呟く。

松太郎は、織りの言葉に「それもそうだなあ…」と答えると、ふつと笑った。

そして、やはり指の腹で織りの手の甲をさすりながら続けた。

その表情はとても柔らかい。

「さつきも言ったが…毎日が楽しいのだ。今までの…織りのいない生活は、もう考えられんな…」

松太郎はまたゾクつとするような妖艶な瞳で、織りを見返し言った。織りは松太郎に包まれた手から一気に熱が上がってきたかのようだった。

（お…織りって呼び捨てにされましたわ…）

家柄、両親姉にしか呼び捨てにされたがない織りは、松太郎の何気ないそれに、じいんと感慨深く目を閉じた。

松太郎に所有されているような不思議な胸の疼きを感じる。

「織り殿はどんな幼少期を過ごしたんだ？」

（元に戻った…）

「わたくしは、お転婆でした」

先ほどの心地よい胸の疼きが一気に冷め、織りは残念に思いつつも、いつもより饒舌な松太郎に少し、嬉しく思ってもいた。

松太郎は、織りの答えに苦笑する。

お転婆であることは容易に想像がつくし、今も大して変わらない。

松太郎は、丁寧に聞いていくことにした。

「うん、どんな風だった？」

「そうですねえ…」

織りの答えは、織り自身のようだった。

端的であちこちに話しが跳ぶ。そして遠回りして具体的に全貌が見えてくる。

年頃の娘らしく、よく笑い、よく喋り、身振り手振りで一生涯懸命。

松太郎は、慣れた部屋にいるせいか素顔を見せて話す織りの言葉や仕草に、1つひとつにニコニコとしながら相槌をうち、会話を楽しんだ。

誰かの過去をこんなにも聞いてみたいと思ったのも初めてだ。そして、こうやって終わりの見えない会話を楽しむのも…。

こんな毎日が今では日常となり、織りと過ごす日常が愛おしくて仕方なかった。

織りがいるだけで、こんなにも世の中が明るくなるものかと思う。織りがいるだけで毎日に張り合いがでて、生きる意味を感じるのかと、松太郎は目の前にいる少女の存在の大きさを、改めて感じていた。

「松太郎さまは？」

突如、織りはそう聞き返した。

松太郎はん？と柔らかい微笑みを妻に向ける。

いつもなら、目眩まし！？と、まるで仇を目の前にしているような思いにすら駆られる織りであったが、今日は違った。

素直に松太郎の柔らかな微笑みも、妖艶な仕草も受け入れられる。変に気張らずに済み、楽だった。

これが松太郎さまの仰る夫婦らしさかしら？

などと考えてみる。

そして松太朗が織りにしたように、織りもまた、松太朗の話しをニコニコと相槌をうちながら聞いていた。

兄弟

織りの部屋からは、夫婦の楽しげな声が屋敷中に響いていた。

「織りさまと松太郎さまは、すごく仲睦まじいのねえ」

「きつと直ぐにでも世継ぎができるわ」

『ねえっ』

などと、女中仲間がニコニコと茜に尋ねる。

茜は、それはどうかしらね。と胸中でつぶやきながらも、とりあえず愛想笑いを返しておいた。

「そう言えば、絹さま、ご懐妊の兆しですって」

久しぶりの客人をもてなすため、いつもより多めの肴を拵えていた古株の女中が、やはりニコニコとそう告げた。

「えっ？」

思わず茜はその女中を振り返る。

「あちらのご実家も、世継ぎだと喜んでいらっしゃるそうよ。どちらも長子で、申し分ない身分ですよ」

この家の長子である絹の懐妊は、確かにめでたいことだ。

しかし、絹はあちらの実家にそのまま嫁いだため、織りのように供を連れていなかった。

ダンナの家に、十分すぎる女中がいるからだ。

「これで織りさまも懐妊となれば、本当にめでたいのだけど」

年若い女中が夢見心地のようにして言うのを、茜は耳に入れていなかった。と、いうよりも、入らなかった。

突然の胸騒ぎに、茜は思わず手を止めてしまった。

同じころ、織りの部屋には弟の晴暁が訪ねていた。

姉とそつきりな木の実のように丸い瞳に、キリリと頼もしい眉毛。しかし、まだ完全に声変わりしていないそれは、幼さの残るものだった。それに合う身体。

まだ織りの方が少し大きいのではないかと思われた。

「義兄上、義兄上は休日は何をしておられるのですか？」

突然現れた長身でカッコいい義兄を前にして、幼い義弟は浮かれていた。

久しぶりに会う姉などそつちのけで、松太郎の側について離れない。

「俺は家庭菜園が趣味だから土いじりかなあ……」

「では義兄上は、土を耕しながら己を鍛えておられるのですね」

「そう言えば、最近は何つきり武芸もサボってるなあ……」

キラキラと姉そっくりの表情で矢継ぎ早に質問をする晴暁に、松太郎はのんびりと返事をする。

「では、夕餉までの間、私とぜひお手合わせを」

松太郎の腕を引き、今にも庭に連れ出してしまいそうな晴暁を、見かねた織りが諫める。

「晴暁、いいかげんになさい。松太郎さまはわたくしの夫であつても、今日はお客様ですよ。遠慮というものを知らないのですか」

松太郎はポカンと織りを見た。

いつもは自分の方が年上であるため、幼いなあ。可愛いなあ。と見ている織りが一変。

弟を前に、威厳をもってぴしゃりと言つてのけた。

松太朗は天晴れと手を叩きたくなった。

「姉上ばかりズルい」

ぷうつと膨れた晴暁は、ドングリ眼でキツと姉を睨みつける。織りはフフンと鼻で弟を笑った。

「悔しかったら、松太朗さまの奥方になってごらんなさい」

前言撤回。

天晴れな妻は、やはり幼い妻であった。

そんな織りを睨みつけていた晴暁は、くぬうつと歯ぎしりしたものの、次第に悲しく眉を潜め、真っ白な白眼を赤く滲ませて潤んだ瞳で姉と義兄を見上げた。

「年が近く、共に剣術を学び、強く逞しいて自慢の、お慕いしていた姉上も、嫁げば余所の娘…。家に寂しく残された弟の気持ちなど、わかるはずもあるまい…」

織りの声を少し低くしたような、しかしまだ少年らしい高い声でそう涙ながらに訴える晴暁の前に、姉はどこかで聞いたセリフだ、と眉を潜め、義兄は同情した。

「あぁっ…義兄上、こんな薄情な姉を見限ることなく添い遂げて下

され〜」

「晴暁殿っ」

目頭を抑える義弟の肩を、松太郎はガツシと掴む。そして拳を握り、キラキラと輝く瞳を向けた。

晴暁は男ながらに、この美しい義兄に見とれた。そしてこっそり姉を盗み見る…。

(かわいそうな姉上……………)

「織りは俺の大切な妻だ。どんな娘であろうと、俺には愛妻に変わりはない。必ずや織りと幸せな家庭を築き、添い遂げてみせよう」

織りと同様、晴暁はポツと顔を赤らめた。

夕日が差し込む部屋で、姉弟の顔は一樣に真っ赤で、耳まで熱くなつた。

「わ…わたくし、夕餉の手伝いをして参りますわ」

真っ赤な織りは、松太郎とも晴暁とも目を合わせずに、よろよろと立ち上がると、そのまま部屋を出て行った。

廊下の先からは、ドタンツツという音と、「織りさま!？」と騒ぐ女中の声が聞こえていた。

夕餉

夕餉には二つの家族が膳を囲んでいる。

松太郎は、義父の徳暁とほろ酔いで酌を交わしていた。

織りも久しぶりに家族と会い、ニコニコしながら、そしていつの間にか嫁入り前のように娘気分で利玖との会話と食事を楽しんでいた。

男同士意気投合しているらしい松太郎は、普段では見せない年相応の若者らしい姿で楽しんでいる。

徳暁も、すっかり婿殿が気に入ったらしく次々に注がれた酒を喉に下した。

「娘はいくつになってもかわいいもんだ。ましてや織りのように、晴暁と一緒に道場で剣術の稽古をつけてやっていただけだから尚更…。ま…嫁のもらい手があるかは心配したが…」

家族揃って心配ごとはただ一つ。

あの、織りがきちんと嫁ぎ先でやっているのかということだ。

徳暁は松太郎に酌をしてやりながら、胡座をかいて赤い顔でしみじみ言う。

松太郎も杯に口をつけながら、赤い頬で笑った。

「義父上も義母上も、そんなに心配せずとも、織り殿はちゃんと奥方然として来られた」

上座で酌を交わす二人は、そつと織りを見た。

「これ、織り。きちんと椎茸も食べなさい」

織りの皿の上で目立たないように避けられた、肉厚の椎茸を目敏く見つけた利玖が、ぴしゃりと言う。

織りは、えーっと眉を顰めた。

「だって、椎茸ってすごく匂うんですもの」

「何を言うのです。それが良いではありませんか」

駄多をこねる織りに、譲らぬ利玖が言う。

そして、配膳のため控えていた茜も、作り手として言葉を添える。

「織りさま、そちらの椎茸はただの椎茸ではございません。有名な西の国の特産品、どんこでございますよ。それを贅沢にも半分に分けて煮付けおります。食べなくては損です」

どんこを食べなくては損、なのか。それとも茜の料理を食べなくては損、なのか。

どちらとも取れる言い方で茜は微笑む。
その近くでは晴暁も、姉と同じように椎茸をどけていた。

「んまあっ晴暁まで！織りがそんなだから、弟に示しがつかないのです。椎茸ひとつまともに食べれなくて、家督を譲れますか」

利玖は嘆かわしい、と首を振った。

「晴暁、何ですか。お前は本当にわたくしの真似ばかりして」

自分のことなどすっかり棚に上げた織りが、晴暁の皿を見て、利玖そっくりな表情で首を振った。

山盛りのご飯を片手に、もぐもぐしていた晴暁はピンと眉を釣り上げた。

「これは残しているのではなく、最後に食べるためによけているだけですよ。ワガママな姉上と一緒にしないで頂きたい」

ぶいっとな怒る晴暁に、織りは目を丸くして「姉に向かって…！」と歯ぎしりした。

「松太郎殿…。織りは家でもああなのか？」

やりとりを見ていた徳暁は、我が娘の至らぬ成長っぷりに恐怖すら覚えた。

しかし、松太郎は相変わらず酒を片手にニコニコしている。

「元気があって自分に正直で、素直で照れ屋で頑張り屋で。俺には可愛くて愛おしくて仕方のない妻なんだがなあ」

娘を溺愛する婿殿を実父は、信じられない、とまるで物の怪でも見るかのように、見返した。

しかし、相変わらず美しい婿殿は、ニコニコと眩しい微笑みをたたえ、そして果てしなく優しい眼差しで織りを見つめていた。

徳暁は、一気に酔いが醒めてしまうようだった。

娘を大切にしてくれて何よりだが…、この溺愛ぶり。

（松太郎殿は…正気か…？）
とすら疑いたくなった。

こうして夜は更けていった。

母子

徳暁と松太郎はまだ二人で酒を交わしていたので、織りは先に風呂を済ませた。

檜の風呂釜は、織りが幼い頃から変わらず瑞々しく爽やかな香りに包まれている。

腕も脚も十分伸ばせるそこは、贅沢の極みだった。

口まで湯船に浸かった織りは、プクンプクンと水泡を作りながら息を吐く。

1日が慌ただしく過ぎて、地に足がつかないが、こうして一人で静かな湯船に浸かっていると、じわりじわりと現実に戻ってくる。

そして、こうして一人でいると、まるで松太郎との新婚の日々が夢のようにも思われた。

(実際、一族総出でキツネにでもつままれているんじゃないかしら)
ゆっくりお湯を顔にかけながらそう思う。
でなければ、あんな麗人が自分を溺愛しているなんて些か腑に落ちない。

(変なかんじだわ…)

ホカホカの身体に着流しを纏い、しっとり濡れた髪を背中に流して部屋に戻る。

そこには先客がいた。

襖を開けた織りは一瞬固まる。

「またお前はそんな格好で。風邪をひきますよ」

「お母さま…何をしておいでなのです？」

織りの部屋には、すでに二人分の布団がひいてあり、その脇には利玖が座っていた。

「まあ、ここに座りなさい」

そう言って利玖は、織りを自分の正面に座るよう指示した。

お説教かしら…と織りは苦虫を潰したような顔をする。

久しぶりに会った娘の、武家の妻としての至らぬところを、目敏い母が見つけたに違いない。

織りは気まずく腰を下ろす。

これまた幼い頃から変わらぬ、織りは肩を竦めて上目遣いに利玖を見た。イタズラが見つかった時のような表情は、今も変わらない。

利玖はじつと織りを見つめる。そしてすつと綿入れを織りの膝頭に滑らせた。

織りはそれを見下ろし、きよとんとする。

「若い二人が、婚儀を機に家を出てやっていくのは大変でしょう。これからは寒くなるのだから、風邪をひかぬよう頑張りなさい」

織りは渡された綿入れを手にとり、利玖とそれとを見比べながら驚いたように目を丸くしていた。

「松太朗さまの分は、お父さまより丈と袖を長くしといたから多分大丈夫でしょう」

織りには、彼女が好きな桃色と山吹色の小紋を。松太朗のものは濃紺に朱糸で刺し子がしてあるものを。

利玖はふつと柔らかく微笑んだ。

「松太朗さまにしっかりとお仕えするのです。あんなに寛大でお前を可愛がってくれるダンナさまなんて後にも先にも松太朗さまだけです」

「…お母さま…」

母の優しさに、織りは目を潤ませる。

利玖が織りを呼んだのは、心配ばかりの娘がどんなすごしているか見たかったからだ。そして、この綿入れを渡したかったのだ。

「辛いことがあっても逃げ出さずに踏ん張りなさい。それが武家の妻の勤めです」

「はい、お母さま」

母子はそっくりの表情で微笑み合う。

そして

「でもお母さま聞いて下さい。松太郎さまってばちつとも女心を分かって下さいませんかよっ」

相変わらずの甲高い声で、織りは眉根を寄せて頬を膨らませた。

利玖は娘の言葉に眉を顰めた。

「そんなの。お父さまで慣れているでしょう」

「お父さまに女心を分かって頂くうだなんて思ったことございません」

唇を尖らす織りに、ピンと指を立てて利玖は噛みしめるように続ける。

「いいこと、織り。お父さまのような朴念仁もつまりません。しかし、松太郎殿のような見目麗しい殿方は、勝手に娘たちが寄ってくるもの。女心なぞ考える必要もなく女道楽ができるのです」

女道楽！？と織りが目を吊り上げる。

「殿方とは、都合よく甲斐性だなんだと大義名分を掲げては己の好きに生きていくのです。お父さまを見ていれば分かるでしょう」

呆れ果てたように利玖は言う。

娘には分からぬ夫婦のシビアな事情があるようだが、「ここは知らぬフリをする。」

「松太郎さまに飽きられぬよう、夜のお勤めも頑張りなさい」

「…なんと…」

まさか実母から夜伽に励めなどと言われるなんて思ってもいなかった。

恥ずかしがりながらも、織りは実母に現実を伝えていた。

利玖は、目をひん剥いて織りに教え諭す。

それから松太朗が戻ってくるまでの間、本人以上に危機感を抱いている利玖は、織りが耳を塞ぎたくなるような講話を切々としていった。

微酔い

利玖の赤面を免れない演説を聞き終えた織りは、頭をクラクラさせながら縁側で秋の夜風に当たっていた。

「風邪をひくぞ」

廊下の先から、酒の席から戻った松太郎が織りに声をかける。

「もうよろしいのですか？」

部屋に戻りながら織りが尋ねる。

少しばかり千鳥足の松太郎は、ああ、と返す。

織りに促されながら部屋に入ると、どかっと座り込む。

「お水でもお持ちしましょう」

「すまん…」

こめかみを押さえる松太郎は、そう答えるとうなだれてしまう。

（あらあら…）

こんな松太郎初めて見る。儉約だと酒を飲むことはほとんどないからだ。

とりあえず湯のみに冷たい水を汲んで部屋に戻ると、松太郎は座つてうなだれたま高軒だ。

「まあ…。松太朗さま。起きて下さい。お水をお持ちしましたよ」

ゆっさゆっさと力任せに肩を揺さぶると、松太朗は薄く目を開けた。

「松太朗さまこそ、風邪をひきますよ」

そう言いながら、湯呑みを渡す。

「ん…ああ…すまん…」

くいつと水を飲んだ松太朗は、少しばかり頭が冴えたようだ。

「久しぶりだったから…飲みすぎたな…」

織りに湯呑みを返す松太朗は、まだぼんやりしているのだろう。紅潮した頬で、目はとろんとしている。

胸元をはだけた姿が、実に妖艶で、危険だ。

さっさと寝せてしまおう。

「今日は早く寝た方がよろしいですわね」

織りは湯呑みを脇に寄せ、枕を整えてやる。

「着替えはそこにありますから、着替えて下さい。お風呂は朝一で入れるように言いつけておきますから」

「うむ」

低くい声と共に、もぞもぞ動く気配がした。

枕を整えて、織りは満足げにポンと布団を叩く。

至れり尽くせりの実家でお嬢さん育ちの自分が、ここまで一人でできるようになり、織りは大満足だ。

「松太郎さま、どうぞお休み下さいませ」

織りが声をかけなが、松太郎を振り返る。

「……………。松太郎さまっ」

松太郎は立って帯を締めながら目を閉じてしまっていた。

織りの甲高い呼び声に、ハッと目を開けた松太郎は、いかんいかん…と帯を締め直す。

「早く寝て下さい」

こんなウトウトしている松太郎に、先ほどの妖艶さも危険も微塵もなかいが、早く寝かせるにこしたことはない。

織りは湯呑みを持ち、ポンと松太郎の腕を叩く。そして、襖に手をかけた。

「っわぁお!？」

突然背中に、ずっしりとした重みを感じ、織り奇妙な声を上げた。言わずもがな松太郎が背中に寄りかかってきたからなのであるが…。

「おり〜」

「んっ…」

すぐ側に松太郎の顔がある。

織りにもたれかかって、重い頭は、織りの細い肩に預けられていた。だから松太郎が口を開けば、酒の匂いがすぐそばです。思わず織りは顔を背けた。

少女には、まだこの酒の香りは強すぎる。

「しよ…松太郎さま、お布団に入って下さい」

間接的な酒の香りに酔ってしまいそうで、織りは鼻を指で押さえた。しかし、酔っ払いの松太郎はお構いなしだ。

「では、共に入ろう」

「織りは酔っ払いとは寝たくありません」

気丈な織りの言葉に、松太郎は高らかに笑う。

よほど気分よく酒が飲めたのだろう。頗る上機嫌だ。

そんな松太郎は、するすると織りの腕を撫でるように滑り、その手を取る。

「つれないことを…。たまにはよいではないか」

そう言いながら織りの手に口づける。

反対の腕は、しっかりと織りの腰に回されていた。

「嫌でございます」

いつもの織りとは違い、背後にいる酔っ払いには強気で行ける。どうせ正気の沙汰ではないからと思えば、平然を保てた。

「俺はいつでも織りが欲しいと思っておるのになあ……」

松太郎は、ぎゅうつと後ろから織りを抱きしめる。

「それは、ありがとう存じます」

着物の襟から侵入しようとする松太郎の手を、ペチッと叩くと、松太郎はその手を引っ込め、かわりに織りの肩を抱いて、やはり抱きしめる。

「松太郎さま、酔ってらっしゃるんだから、早く寝て下さい」

「こつやって抱きしめてると、安心するものだなあ……」

暖かくフワフワしたい織り。小さくて、一生懸命で武家の娘らしからぬ織り。

そんな彼女の一举一動が見ていて飽きない。意地らしくて可愛くて愛おしくて仕方ない。

めちやくちやに抱きたいと思うのに、大切すぎて手が出せない。そのくせ、からかって織りを真っ赤にして困らせたくない。

もっともっと、自分の一举一動で、織りを混乱させてドキドキさせて、頭の中を自分だけにしたい。

織りの側にいると、まるで松太郎は恋を知らない少年のようになってしまう。のくせ、知識と欲と経験だけは年相応にあるのだから困ったものだ。

「松太朗さま？」

突然、黙りこんだ夫を不振に思い、呼びかける。
すると、松太朗は織りを抱きしめたまま、規則正しい寝息をたてていた。

「もうっ」

本当に困ったダンナさまだ。

織りは小さくため息をついた。

こんな松太朗もたまには可愛くていいな…などと微笑み、そっと自分に絡まる腕に口づけた。

深夜

深夜、みんなが寝静まった頃。

ぱちつと松太郎は目を覚ました。
頭だけを動かすと、見慣れない天井が目に入った。普段より高い位置にあり、一瞬考える。そしてそのまま目だけを動かすと、隣の布団には織りが寝ていた。

…そうだった…。
と思う。

美味しい酒で、ついつい飲んでしまったのだった。

松太郎はゴソゴソ起き上がると、廁へ行く。その帰りには、また湯呑み一杯分の水を飲んだ。

「飲みすぎたな…」

口を拭いながら、独りごちる。

もともと、そんなに強い方ではない。

織りと夫婦になる前から晩酌することも、友人と飲みに出て行くことはあまりなかったのだ。

徳暁との酒が進んだのも、一重に織りの存在があったからだ。

彼女の幼少の頃の様子や、育ちについて聞いて、純粹に嬉しかった。それと同時に、子を思う親の姿を勉強した。

(まあ…いつかは俺にも分かるんだろっ…)

そんなことを考えて、自嘲ぎみに頭をかきながら、部屋へ戻った。

部屋に戻り、織りの枕元に腰を下ろす。

そして、ぼんやりと眺めた。

夫婦の契りを交わして3ヶ月。

織りはあっと言う間だったと言う。

松太郎にとっても「早いなあ」という感覚は変わらないが、しかし、時はのんびり過ぎていったようにも思う。

もう、随分と織りと暮らしているような気さえする。

松太郎は、織りの頬に触れた。

思いの外冷たい。

織りに触れる時は、いつも彼女が頬を紅潮させているため、熱持っている。

そう言えばもう霜月半ば。

やはり、あっと言う間の3ヶ月だったかも知れない。

松太郎は、織りの布団をしっかりと肩までかけてやった。
松太郎がこும்側にいてゴソゴソやっているのに、一向に目覚める
心配がない。

「うむ…」

最近はどうでもないが、婚儀から暫くは、織りはなかなか眠れな
ったようだった。

布団も、最初のうちは一緒だったが、それではいつまでも経っても
織りが眠る様子がない。

なかなか寝付けず、松太郎に背を向けたまま落ち着かずにいる心配
がいつまでもしていた。

その後布団を別にしたのだが…。

それでも、やはり暫くはなかなか寝付かなかった。
本当に最近だ。

お休みなさい、と声かけたのち、暫く後には規則正しい寝息が聞こ
えるようになったのは。

「何かと気苦労が耐えんなあ…お互い」

眠る織りに、松太郎は言う。

「ん…」

小さく織りを身を擦る。

松太郎は、そんな織りを見ながら再び布団に戻った。とは言え、松太郎の布団ではなく、織りの布団にだ。

別にイヤらしい気持ちはなかった。皆無とは言わないが、なかった。

織りの布団の中は暖かい。

自然と織りに足を絡めた。

直に伝わる織りの体温は、心地よく眠気を誘う。「ふあ……」

松太郎は、欠伸をしてゴソゴソ布団に潜り込む。

「うむ…邪魔だな」

そう小さく呟くと、織りの枕をどけた。

「ん ふう……」

さすがに織りが迷惑そうに眉根を寄せる。しかし松太郎は構わない。

「たまには俺の腕枕を貸してやろう」

そんな独り言を言いながら、松太郎は織りに腕枕をしてやりながら、その身を抱き寄せた。

小さな織りの体は柔らかく暖かい。
酒を飲んで眠気に襲われていなければ、間違いなくこのまま抱いて
いただろう。

「ふあ〜…」

再び欠伸をした松太郎は、「お休み」と小さく織りに声をかけ、軽
く口づけた。
そして抱き枕のようにして、ぎゅっつと抱きしめる。

「…ごうん…」

織りは何やら夢を見ているらしく、言葉にならない声をあげると、
きゅっと松太郎の背に腕を回した。

「…織り？」

起きたのか？と薄めを開けてみるが、聞こえるのは規則的な寝息。
織りは、居心地良さに松太郎にすり寄った。

松太郎は自然と、ポンポンと織りの頭を叩いてやる。

そしていつの間にか、眠りの淵に落ちていた。

翌朝。

織りは、心地よい暖かさと重さにゆっくりと目を開けた。

障子の奥からは小鳥の鳴き声と明るい光が洩れてくる。

体を起こそうとしたが叶わない。

「あら？」

パツと振り返って、織りは自分の置かれた状況を理解するのに暫く

かかった。

振り向いた先には、長い睫に縁取られた瞳を、しっかりと閉じた松太郎の顔。

寝ていても分かる鼻筋の通った美しい顔。

そして…自分の体はしっかりとその麗人が抱きしめている。

「朝っぱらから姉上の（叫び）声で目が覚めたので…何だか気分が重い」

朝餉の席でそう呟く晴暁に、織りは言い返す元気もなかった。

「朝っぱらから、本当に騒がしい娘ですこと」

眉根を寄せる利玖は、頭を振る。

もちろん、織りはそれに言い返す元気はない。

「松太郎殿、大丈夫だったか？」

気遣わしげに松太朗に尋ねる徳曉に、松太朗は苦笑する。

「ええ」

織りは誰とも目を合わさずに、いろいろな恥ずかしさに頬を赤くして、さっさと朝餉を済ませたのだった。

深夜（後書き）

織りたち3人は、朝餉を済ませると、お土産をどっさり抱えて帰って行った。

もちろん織りは、朝からご機嫌ナナメなので、家族への挨拶もそこそこに、だ。

嵐がさったような織りの家には、一家3人が揃っていた。

「そもそも母上は、何故姉上を呼んだのです？」

足を放り出して両親と共にいる晴暁が尋ねる。

利玖は、ああ、と言うと、苦笑気味に答えた。

「あの子たちに綿入れを渡したかったの。使いをやってもよかったのだけれども…。どんなしているかも気になって。まさか夫婦で来るとは思わなかったけれど」

「ふうん…」

結局、嫁に出した織りが心配だったのだろう。

織りのあの性格だ。

松太郎とうまくやっているか。松太郎に早くも愛想を尽かされていないか。ワガママ三昧していないか。

「母上も、相変わらず心配性ですね」

少年はクスクス笑った。そして天井に目をやり続ける。

「でも、松太郎殿。かつこいい殿方だったなあ。姉上にはもったいなくらいだ」

そう言っけてラケラ笑う。

しかし、その松太郎が、あの姉を気に入って可愛がっているというのも、また面白かった。

「松太郎殿って変！」

そう言っけて笑い続ける晴暁、利玖が窘めた。

そして、それまで黙っていた徳暁が利玖に声をかける。

「そう言えば、絹のことは伝えたのか？」

「あっ！そうでした」

利玖が目を丸くする。

徳暁は、はぁっと小さくため息を吐いた。

「おまえ…。その為に茜も呼んだのだろう」

呆れたように言う徳暁に、利玖は織りとそっくりの表情でふいっと顔を背ける。

「ま、まだ時間はありますわよ」

そんな母を見ながら、晴暁は胸中で

(やっぱり姉上の母親だ)

と呟く。

こうして、長い1日だった織りの里帰りは終わった。

【使命】（前書き）

葉も落ちてしまい、空気がキンと張り詰める季節。

「……おはようございます……」

またもや、いつの間にか自分の布団に侵入してきた松太朗に、織りは眠い目をこすりながら挨拶をする。

「おはよう。今日も冷えるな」

松太朗は先に起きて、いつからそうしていたのかは知らないが、頬杖について朝っぱらから爽やかな微笑みを浮かべて織りの寝顔を見下ろしていた。

寝ぼけ眼の織りは、閉じそうになる瞼と戦いながら続ける。

「では…そろそろ…えりまきをだしましよ……」
言いながら重い瞼は閉じてしまい、また織りは寝息を立て始めた。

「おや…」

松太朗は、眠った織りを見つめ、しばし考える。

そして

「もう一眠りするか」

まだ、夜は空けきれてはいない。
茜が起こしに来るまで寝ていよう。
そう決めて、眠る織りを抱き寄せて、自身も目を瞑る。

少し寒いのか、織りが身を丸める。

その気配を察した松太郎は、しっかりと織りを抱きしめ、自分の大きな体で覆ってやった。

すると、寝ぼけたままの織りは、松太郎の胸にすり寄ってきた。

無意識の成すことだが、それが松太郎の織りに対する庇護心をくすぐる。

そして一層、織りを大事に思うのだ。

今日も一段と寒くなりそうな、冬の朝だった。

【使命】

師走に入り、松太郎は勤めに出る日が増えた。そのため、昼間に織りと過ごす時間が減ってしまった…。

毎朝襟巻で口まですっぽり覆って登城する。

もともと猫背ぎみだが、肩をすくめて小さくなるため、余計に丸くなって歩く。

しんと冷えきつた朝の空気を割き歩く姿は、相変わらず美しい。

寒さのため赤くなった頬や耳や鼻先は、松太郎をいつもの如く麗人として見せない。

そこには、どこか少年のような可愛らしさがあった。

まあ、どちらにせよ、松太郎を見た市井の女たちは頬を染め、ため息を吐かずにはいられなかった。
そんな松太郎の頭にあるのは一つ。

今月は、たんまり給料をもらえるぞ。

というけど。

加えて、

今月はすこし警沢に暮らそう…。
何かうまいものでも食いに行こうか。

というものだった。

そんな松太郎の生活は、最近少し違う。

それは霜月も、あと数日で終わるころのことだった。

「茜、ちょっといいか」

食事の片付けをしていた使用人・茜に、松太郎はこっそり声をかけた。

「はい？」

振り向いた茜は、御年19歳になる美しい使用人だった。

もともと幼いころから織りの家に仕えており、織りとは姉妹のように育っている。

そのため織りは、茜に一目置いているし、いざというときは頭が上がないでいる。

また、料理の腕がいいこともあり、織りたち夫婦にとってなくてはならない存在だ。

そんな茜に、松太郎はすすつと寄った。

「実は、頼みがあるのだが……」

松太郎は腰を屈め、茜に耳打ちする。

茜は眉を顰めた。

主人である松太郎が、自分にこうして声をかけて頼みごとをするなど初めてのことだ。

松太郎は、あたりをちらつと伺う。

「お嬢様は湯浴みなさってますよ」

織りが嫁入り前は「お嬢様」と呼んでいた。

嫁入りしたのだから、「奥方さま」や「ご新造さま」と呼ぶべきなのだろうがピンとこず、茜はずっと名前で呼んでいた。

しかし。

たまに昔のクセが出る。

「そうか…」

茜の言葉に、松太郎が安心したように胸をなで下ろした。

「どうなさいました？」

「いや…。実はそろそろ布団を一つに戻してもらおうと思ってな」

松太郎の言葉に、茜は目をパチクリさせる。

「なぜです？」

茜の問いに、今度は松太郎が目をパチクリさせた。

「なぜって…。夫婦なのだから別に構わんだらう。…というか…それが普通であらう」

茜は、松太郎の言葉に今度は手をポンと打った。

スツカリ忘れていた。
松太郎と織りは夫婦だった。

茜はにっこりと微笑み、承知致しました、と答える。
そして、少し困ったような笑顔で松太郎に聞く。

「でも、よろしいのですか？お嬢様はまた眠れぬ日々を送られるの
ではございません？」

「いや、もう大丈夫だろう。ここ数日、頃合いを見計らい織りの布
団に潜り込むが、最近は朝から俺の顔を見ても何も叫ばなくなった
し」

自信満々、満足げな笑顔を浮かべて松太郎は言う。
心なしか胸を張っているようにさえ見えるので、茜も思わずクスク
ス笑ってしまう。

「左様でございますか。松太郎さまもご苦労されますね」

「うむ。全くだ」

「しかし、これでお世継ぎ作りに励めますね。お頑張りあそばせ」

大人の会話が出来る茜に、松太郎は腕組みして少し険しい顔つきに
なる。

「俺はお頑張りあそばせるのだが…一気にお世継ぎ作りまで織りに

求めることはできまい」

うぐんと唸るように松太郎が眉根をきゅっと寄せる。

茜は、あらあら…と思った。

しかし、そんな夫婦の姿もどこか微笑ましい。

「そこで、だ」

ピンと指を立てた松太郎は、イタズラを思いついた少年のように目を輝かせている。

「順を追っていい？」

「まあ、どのように？」

こちらも楽しそうに、松太郎を見上げる。

松太郎は声をひそめ、指を自分の口に当てて話し始めた。

「茜、とりあえず俺は今年中にもう一度接吻をするぞ。それも織りがちゃんとして起きている時に」

「起きてないときしかしてないのですか？」

呆れたように茜が尋ねる。

すると松太郎は、少し悲しげに肩を落とした。

「普段の俺たちが接吻を交わすような状況になることがあると思うか？最近、寝ているスキに唇を重ねるだけは何度かした」

「…そうですか…」

「しかし、寝ている人間に接吻をしても何も面白くはないのだ」
「だいたい、あれは接吻とは言わない。ただの触れあいには過ぎない。」

寂しげにも言う松太朗の言葉は、茜にとってツッコミどころ満載だ。満載すぎて、何からツッコめばよいか分からず、最早黙って、そして呆れながら聞くばかりだった。

この麗人は、ほっとけば全く女に苦勞をせず、ヘタしたら、タダで女道楽が出来そうなのに、妻とは接吻すらできずにいるのだ。

松太朗は、口元に笑みを浮かべるときゅっと拳を握った。

「と、言うわけだ。まずは近づいておかねば話にならん。そしてせつかく夫婦らしく同衾できるチャンス、逃すわけにはいくまい！」

「はあ…」

「そして、春までには二度目の初夜を迎えたいな」

「二度め!？」

松太朗の言葉に、茜は思わず声を上げた。

「二」度目なら、「初」夜にはならない。
いやいやそんな細かいことより…。

織りが松太郎に嫁いで4ヶ月目に入ろうとしている。
なのに、まだ一度しかないというのだ…。

確かに…。毎晩、茜は夫婦に気を遣わず安眠していた。気まづさが
なかった。

今更ながら、夫婦で睦合っていないなら当たり前か…と思ったりして
…。

茜は、こめかみを指で押さえながら、長い長いため息をついた。

一言、織りに言っておくべきだった。

夫婦が、とりあえず穏やかにのんびりと日々を送るので、すっかり
世継ぎなんて忘れていた。

「申し訳ありません、松太郎さま…。わたくしからお嬢様に念を押
しておくべきでした…」

主人の至らない点は使用人がカバーする。

それをすっかり…。いや、うっかりしていた。

「こればかりは茜が言っても仕方あるまい」

意外にも当事者である松太郎の方が落ち着いていた。

しかし、茜はキッと目を挙げる。

「いいえ。 magari にも、武家の息女であられる織り様のお務めは、お子を成し、お家繁栄を図ることつ。」

「堅いなあ……」

「松太郎さまっ！」

呑気な松太郎に、茜はぎゅっと拳を握ってみせる。

「織りさまも、そろそろ奥方さまとしての自覚を持つべき時期。わたくしが全面的に協力いたします。だから、安心してお睦あそばせ
！！」

一つの大きな使命を持った女は、力強く男に頷いてみせる。

男も、それならばと気合いも入った。

かくして同士は手を取り合い、新しい道を開いていくのであった。

疑惑

がしつと堅く手を握り合い、松太郎と茜は、今や同士となった。

そんな二人の姿を、湯浴みから出た織りが襖の隙間から見ている。話している内容はすっかりとは聞き取れないが、なにやら二人が真剣な眼差しで手と手を取り合っている。

(まさか・・・)

織りはこの後自分の身に起きる事も知らずに、目をつり上げていた。

松太郎が部屋に戻ると、織りはすでに鏡台の前で髪を梳いていた。「義母上からいただいた綿入れを着ておかねば、風邪をひくぞ」

寝間着姿の織りに、松太郎はそう言いながら織りの綿入れを取ってやる。

織りは鏡越しにその姿を目で追った。

そして、くるりと松太郎を振り返る。

頭の中に聞きたいことは山ほどあるのに、織りはそれを口にできずにモヤモヤしていた。

もし、本当にあの二人に何かあったら自分はどうしたらよいのだろう。

姉妹のようにして育った茜と、大好きな夫である松太郎。

「ほら、ちゃんと着ておかねば」

松太郎がそう言って、織りの肩に綿入れを掛けてやる。

「・・・松太郎さま・・・」

肩におかれた松太郎の手をとり、織りは悲しげな瞳で松太郎を肩越しに振り返る。

松太郎はきよとんと小首を傾げた。

「どうした？」

織りは、鏡台に向き直り俯くと、ふるふる首を振った。

「何かあったのか？」

織りの様子を心配した松太郎が彼女の顔をのぞき込み尋ねるが、顔を背けた織りは、再び首を振る。

モヤモヤしたものをどう口にしていいのか分からない。

「何も無いことはないだろう。何だ、どうしたというのだ？」

後ろから織りの頭を胸に抱き、松太郎は優しく聞く。

織りのただならぬ様子に心配でならないが、当の本人が口を開こうとしないのだ。

「織り殿は子どもに戻ってしまったようだなあ」

抱きしめながら、松太朗がぼんぼんと織りの頭をなでる。

口を開かない織りに、しつこく聞いても仕方ないと思ったのが、松太朗はただただ優しく織りをいたわった。

「ううつ・・・」

「織り？」

松太朗の優しさに織りは涙が出てしまった。

そして、絞り出すように言う。

「お腹・・・痛いので、先に寝ます・・・」

その嘘を松太朗がどうとつたのかは分からない。

しかし、松太朗はやはり優しく織りの肩に手をポンと置いた。

「そうか。では茜に頼んで布団を敷いてもらおう」

コクンとうなずく織りを見て、松太朗は部屋を出て行った。

静かに障子を閉めながら、松太朗は腕組みして考える。

（俺の腹は何ともないが……。それとも俺が何か泣かせるようなことをしたのか？）

とりあえず、松太朗が本日織りと同衾することはできないようだ。茜に布団を頼みに、松太朗は再び茜を呼んだ。

次の日、織りはしばらく布団から出て来なかった。仕方なく、松太朗は一人で朝餉を済ませる。そして、未だに横になる織りを、登城前に訪ねる。

「織り殿、体調はどうだ？」

織りは、その声にはちりと目を開けるとのそのそ起き上がる。

「ああ、そのままでよい」

「松太朗さま・・・」

再び、織りを布団に寝かせた松太朗は柔らかく微笑む。

そして、織りの額を優しく撫でた。

「今日は一日ゆっくりしておくといい。何か食べたいものはないか？」

「いいえ・・・」

きゅうと布団を口まで引き上げ織りは目を伏せる。

松太朗があまりに優しく気遣ってくれているのが分かる。そして自分を撫でる彼の手は、いつも織りを愛おしんでくれるときと同じだ。織りは、昨夜のモヤモヤする胸に、さらに息苦しさを感じた。

「では、行ってくる」

「行ってらっしゃいませ」

松太朗は、名残惜しげに織りから手を離すと、静かに仕事に行ってしまった。

「ううっ・・・」

誰もいなくなってしまった部屋で織りは布団に潜り込み、嗚咽を漏らした。

こんな風に涙を流したり、胸が締め付けられるような気持ちになるのは初めてだ。

元来、思ったことはわりと口にする方である。ましてや自分のモヤモヤするものを胸に秘めておくなど。

ありえない。絶対に。
なのに、口にすることができないなんて、普段の自分から想像もできない。

恋する乙女の胸の痛みを、織りはまだ知らなかった。

だから、織りはこの思いをどうしてよいか分からず、ただただ涙を流した。

「織りさま、お粥ができましたよ」

しばらく一人でシクシクしていると、茜がほかほかのお粥を持って来た。

もちろん織りは布団から顔を出さない。

「織りさま、お医師を呼びましょうか？」

茜の気遣う言葉に織りはふるふると首を振る。

茜は、目を丸くした。

十余年、織りと一緒にいるが、こんな織りは初めて見る。

嫁入り直前の織りも、こんな風ではなかった。・・・少し情緒不安定ではあったが・・・。

「お嬢さま、もし何かお悩みがあるのでしたら、わたくしに仰ってみてはいかがでしょう。お力になれるか分かりませんが、全力でお嬢さまをお助け致しますよ」

茜はあえて、嫁入り前のように「お嬢さま」と呼んだ。

その方が、織りが安心できるかと思っただからである。

織りは、茜の言葉に耳を傾けていたが、余計にその言葉が伝わった。

優しい茜を疑う自分が悲しい。

そして、大好きな二人のことだから余計につらかった。

だが。

すべては織りの早とちりでもあるのだが・・・。

「茜……」

涙声で織りが茜を呼びかける。

織り様が泣くだなんて!?

茜はぎよっとした。

「ど……どうなさったのです!?!」

思わず布団を織りからどかして、その顔をのぞき込む。

織りは枕に顔を埋めて、茜から顔を背けた。

「お……お嬢さま!?!」

「茜……。申し訳ないのだけれど、一人にしてもらえるかしら」

くぐもった声で、織りはそう言う。

織りが泣くなんて、ただ事ではない。

茜は居ても立つても居られなかったのだが……。しかし、織りが一人にしてくれと言うので、聞き分けるしかない。

茜は後ろ髪を引かれながら、部屋を出た。

落涙

茜が出て行ってどのくらい経ったのだろう。

しばらくは、茜が洗濯する音や掃除をしている気配がしていたのだが、今はしんと静かだ。

ぎゅるる・・・

とお腹が鳴った。

織りは、もぞもぞと起き出して、冷えてしまったお粥に手を伸ばす。鍋に入ったお粥には、ちよこんと真つ赤な梅干しが乗っかっている。織りが大好きな茜の漬けた梅干しだ。

そして、小鉢にそれをよそって食べる。

ほのかに温かいお粥は、塩加減もばっちりだ。

茜は誰よりも織りの舌を知っている。

だから、いつも料理の塩梅は完璧なのだ。

そんな茜の優しさに、また織りは涙が出てきてた。

「そうだわ・・・」

いつまでも、このように部屋でウジウジしていても仕方がない。

織りは、早々とお粥をかき込み、胴着に着替える。そして、いそい

そと竹刀を取り出した。

「茜」

茜の部屋へ行くと、彼女は針仕事をしていた。

「まあ、織りさま。まさか道場にお出かけになるのですか？」

織りの姿を見て、目を丸くした茜は声を荒げる。

織りは、泣きはらした目を細くする。

そして、ええ、と答えた。

「体調は戻りました。ああやっておとなしく寝ているのは、やっぱりわたくしの性に合わないわ。ちょっと水村さまに稽古をつけてもらって来るから」

「では、わたくしもお供いたしましょう」

茜は、針山に針を戻して着物に落ちた糸くずを払う。

今朝の織りの状況を見れば当然のことであった。

しかし、織りは「大丈夫」と、立ち上がるうとした茜を止める。

そして、もう一度言う。

「大丈夫よ。昼過ぎには帰るから」

茜はまだ何か言いたげだったが、織りは構わず踵を返す。

そして、足早に家を出た。

織りが道場を訪ねるのは半月ぶりだった。

やって来た織りを見て、水村もぎよっとする。

細い目が、一瞬大きく見開いた。

だが、すぐにいつもの顔に戻る。そして苦笑を浮かべて

「また、えらく暗い表情で来ましたね」

と言った。

織りは苦虫を噛んだような表情で、短く「お久しぶりです」と言う。

とりあえず中に通そうと、水村は弟子にお茶を準備するよう命じる。

「水村さま、そんなお気遣いありませんわっ。わたくし、練習をしに参ったのです」

慌てて織りが言うと、水村はふっと微笑む。

「美味しいお饅頭を朝からもらったんですよ」

朝から饅頭！？と思ったのだが、織りは何も言わずにおいた。

とにかく体を動かして、さっさとこのモヤモヤをどうかしたい。

「どのみち、一旦休憩するつもりでしたから」

そう言いながら、水村はさっさと奥へ行ってしまう。

仕方なく織りもあとに続いた。

水村の部屋に通された織りは、二人で縁側にすわってお茶を啜った。

「このお饅頭を持ってきた方も、久しぶりに来られたんですよ」

ふかふかの饅頭を見下ろしながら、織りは首を傾げる。

「わたくしも存じ上げている方ですか？」

かぷつと饅頭に食らいついた水村も首を傾げた。そしてモグモグしながら考える。

ほんのり梅の爽やかな香りが口に広がる。

漉し餡だが、梅の風味がする、実に爽やかな饅頭だった。

「うーん…顔は見たことがあるかも知れませんが…。あちらは織り殿をご存知としますよ。私の道場に武家の娘なんてあなたくらいしか来ないからね」

若い師範代は、にっこりと笑う。

織りは、口元だけ上げて笑うと、ふうつと溜め息を吐いて俯いた。

「やっぱりおかしいですわよね。武家の…しかも嫁入りした娘が道場通いだなんて…」

水村は、おやと織りを見返した。

随分（織りにしては）思い詰めた表情でやってかたものだから、心配はしたのだが…。

「やはり…茜のような娘が嫁御なら、よいのでしょうか？」

「あっ…茜殿!？」

水村はぎよつとした。

大方、嫁としての不甲斐なさに気づき、松太郎に対して申し訳なくなつたのだらう、と思つていた。
まさか茜の名を出すとは…。

水村も茜とは顔見知りだ。織りが幼い頃は彼女がお迎え役だったのである。

「二人が…わたくしのいない間に、手と手を取り合い、見つめ合つていたのでございます」

言いながら織りは声を震わせた。

水村は、生唾を飲み込む。

「二人とも大好きな…そして大切な家族なのです。胸の中がそわそわしてモヤモヤして居ても立ってもいられないし、ちゃんと知りたいの…二人を前にすると言葉が出てこないのです」

織りはそう一気に話すと、ポロポロ涙をこぼし始めた。

土産

仕事を早めに済ませて、昼食用にと茜が朝から持たせた握り飯を風呂敷に包んだまま、松太郎は家路を急いだ。

「そこのおサムライさま」

わき目もふらず…とは言わないが、美味しそうな昼食の香りを胸一杯に吸い込みつつも、街頭をスタスタと闊歩する松太郎を、陽気な声と呼ぶ。

松太郎は声のした方を向いた。

そこにはニコニコと極上の笑みを浮かべた饅頭屋が、彼に向かって手をふっている。

「ふむ……。俺に何か用か？」

よだれが垂れそうになる口元をきゅっとしめた松太郎が尋ねる。

「アンタさまは、たまに可愛らしいご新造さん連れて歩いてたろ。どうだい、今日くらい可愛らしいカミさんにお土産買っていつちやあ」

気軽に声をかけてくる饅頭屋を、松太郎は黙って見つめた。

確かに道場の帰り道でもあるここを、松太郎は織りを連れてよく歩いている。

『可愛らしいご新造さん』などと気安く言うが、やはり市井の男たちは、そんな目で織りを見ていたらしい…。

織りの数十倍一目につく自分のことなど知らぬ松太郎は、胸の奥に小さく疼くものを感じた。

しかし、それ以上に疼く腹には抗えず…。

「まいどお〜」

結局、茜の分も合わせ、3人分の饅頭を買った松太郎は、いささか腑に落ちない心地はするものの、足早に家路についた。

相変わらずの我が家は、昏間だつというのに、なんだか静かだった。

「戻った」

恐る恐る松太郎が玄関から顔を覗かせた。
しばしの間をおき、パタパタと足音が聞こえる。

「はて…」

園芸が趣味でも、出は武家。松太郎は足音を聞いただけで織りでないことを容易に察した。

案の定、茜が口元にだけ笑みを浮かべて手をつく。そして僅かに眉根を寄せた。

「お帰りなさいませ。随分お早いお帰りです…」

松太郎から荷物を受け取りながら茜は小首を傾げた。

松太郎は草履を脱ぎながら答える。

「新妻の体調が優れぬというのに、のんびり仕事をしている場合ではないだろう」

「…はあ…」

と言うか、逆にその程度で家でのんびりしている場合か。そんなことから、いつまでたっても安月給なのだ…。

などと、口が裂けても言えない。

茜は言えず、こっそりと胸におさめた。

「織りはどうしている？ 饅頭を買って来たぞ。茜の分もあるから、茶を頼む。温かいうちに食べよう」

懐から饅頭の包みを出し、キラリと白い歯が光そつな錯覚を覚える美しい微笑みを浮かべ、松太郎は茜に言う。

茜はその饅頭も受け取りながら、あ…と、苦虫を潰したような顔をする。

それを見て松太郎が、小さく首を傾げた。

「何だ、その顔は」

「いえ…実は織りさまは…」

茜の言葉に、松太郎の目が厳しく見開かれる。

「まさか、具合が悪く…？」

「いえ、水村さまのところへ行かれております」

自分の腕を掴み、先ほどとは変わり鬼気迫る表情で聞く松太郎に、茜は冷静に答えた。

しかし、松太郎は冷静でいられなかったらしい。

「な…何故！？ やはり、昨日の腹痛は嘘か…！ どおりで俺の腹は何ともないはずだ…。…しかし、ではなぜ織りは泣いておったのだ…。やはり俺が何かやらかしたのだろうか…」

頭を抱える松太郎につき合えきれない茜は、静かにその場を後にした。

饅頭を持って炊事場に行く。

織りが帰ってきたらお茶を淹れよう。

そう思い、とりあえず昼食の準備に取りかかる。

「茜っ。ちょっと出て来る」

茜は松太郎を振り返って尋ねる。

「どちらへ？もうすぐ織りさまも帰ってこられますよ？」

「迎えに行くのだ。妻の一大事にじっとしては居れぬ」

「左様でございますか」

答えながら、茜は「大丈夫かしら…」などと考えていた。

織りのただならぬ様子が心配でないわけがない。

しかし、静かにしているからこそ、あえてそっとしておく方がいいようにも思うのだが…。

（ま、任せてみるか…）

松太郎は足早に水村の道場へと向かった。

距離

憎らしい青空だ。

自分の心にはこんなにも暗雲がたちこめているというのに…。

立冬を過ぎたきんと澄んだ青空を見上げながら織りは、きゅっと目を閉じた。

水村に稽古をつけてもらい、みな昼食を前に休憩に入っている。人の居ない道場の戸を開けたまま、織りは床に寝転がった。

「うちで昼ご飯も食べて行きますかか？」

穏やかな声に目を開けると、逆さまの水村が微笑んでいた。

「あ、いえ…」

慌てて織りは起き上がる。

「家で茜が用意してますので…」

小さく笑ってはみたものの、いつもの彼女の明るさは微塵も感じない。

水村には、そんな痛々しい織りの姿を見てはいられなかった。

ちよこんと床に力なく座る織りを覗き込むようにして水村は言う。

「送りましようか？」

織りはやはり力なく首を振った。

ポンと水村の手が織りの頭に置かれる。

そして、幼いころ織りにしていたように、そのまま頭を撫でた。そしてしゃがんで目の高さを同じにする。

「俺は織り殿も茜殿も、昔から知っているから、どっちがどうと言うつもりはないのだが…」

静かに水村の、遠慮がちに選ばれた言葉を聞く。松太郎より高く澄んだ声だ。

「だが、やはり、茜殿が織り殿を裏切るわけではない。絶対に」

「…どっちがどうだ、と仰ってますわ…」

「いや、だが。織り殿もそう思うであろう！？清く美しく、それでいて気だてもよく料理も上手で強かで忠義者の茜殿にとって…」

「思いますわよっ！！」

次から次に茜を褒めちぎる水村に、織りは溜まらず声を荒げて遮った。

思わず立ち上がってしまう。

「思いますわよ！茜は姉妹のように育ったし、松太郎さまはわたくのダンナさまですもの…！でも、だからこそ…。分からなくなるし…モヤモヤするし…。それなのに、何と言えよいか分からないし…何も言えないのですっ……………」

ポロポロと零れ落ちる涙もそのままに、織りは小さな拳をキュツと握った。力が入り、指先が白くなるほどに強く。

水村は、何も言わずに織りを見上げた。細い目をしっかりと開き、織りの悲しみを、ただただ黙って見つめていた。そして、すつと音もなく立ち上がる。

草履を脱いで、道場に行くとすつと織りを抱きしめた。

物腰の柔らかい水村からは、想像もできないがっしりした体だ。

水村は、優しく織りの頭を撫でた。

「よしよし」

胸で泣きじゃくる織りは、幼い頃のままだ。

泣き顔を見せないようにして、うっつと泣く。

「落ち着いたら、ゆっくり話さない。二人と。…それまでうちに泊まりますか？」

昼食には即答した織りであったが、躊躇いを見せた。

水村は、ふうっと小さくため息をつく。

「ま、しばらくここにいなさい。でも、もうすぐしたら弟子が戻って来るから…奥に」

水村は、やんわりと織りの肩を押して奥へ促した。

「水村殿」

織りを奥に案内し、道場に戻っていた水村を松太郎が呼んだ。

「おや、松太郎殿。久しぶりですな」

いつものように織りを迎えに来たのであろう松太郎を見て、水村はどうしたものかと思う。

困惑するが、それを一切表情に出さない。

強かなのは…水村も同じだ。しかも、武家の出であるから、その心は頑ななところもあり…一筋縄ではいかないのだ。

だが、それは松太郎も同じだった。

「妻を迎えに来た。すまんが織りを呼んでもらえるか？」

「織り殿には、少し手伝ってもらっているんだ。昼食を済ませて…夕方には返せると思うが…」

「うむ…。人妻を使うとは…。どれ、俺も手伝おう」

縁側から上がるうとする松太郎を、静かに制した。

松太郎は、ゆっくりと水村を見上げる。

いつもは穏やかに、そしてキリリと美しい表情でいる松太郎の眼に、僅かな強い意思が宿った。

僅かな怒り。

僅かな戸惑い。

「なんだ」

「勝手に上がられては困りますよ」

不穏な雰囲気纏う松太郎に、水村は静かに、そしてうつすらと微笑みを浮かべて言う。

松太郎はしばらく考えたのち…

「お邪魔します」

そう言うと、よっこいせと縁側に上ってしまった。

「松太郎どの、待ちなさい。今は…まだ時ではない。夫のあなたなら、分かるだろう」

やはり、松太郎の前に立ちほだかり、しっかりと見据えながら水村が言う。

松太郎は眉を顰めた。

「どういうことだ？」

「織り殿も、どうしてよいか分からず、混乱しているのです。今はあなたや…私の言葉も冷静に受け止められないだろう」

松太郎は更に眉間に深い皺を刻むが、静かに水村の言葉を聞いた。

「織り殿は…まだ幼いのだ。あなたの妻としてには…まだ、時間がかかる。彼女は竹刀が捨てられない。武家の妻のように貞淑には、まだ振る舞えない」

松太郎は、水村をまつすぐ見据えた。

かさかさと、冬の風が落ち葉を攫い、二人の頬を冷たく掠める。

松太朗は、ふうつと深いため息をつく、その場に腰を下ろした。

「どんな娘であろうと俺の妻に変わりない。… 昨日から、腹の具合がよくないと言っておった。饅頭屋のオヤジは、可愛いご新造だとめかした。一人で帰らせるには心配ごとばかりだから、ここで待たせてもらっぞ」

そう言って、ぐっつと伸びをするとそのまま後ろに倒れて目を閉じた。

耳には水村が立ち去る音が、床板を通して響く。

「水村殿は、織りのことがよく分かっておられるのだな」

松太朗の呟きが聞こえ、水村は足を止めた。
それも、床板越しに松太朗に伝わる。

昼飯をまだ食べていないからだろうか、胃のあたりがもぞもぞする。
心臓は、締め付けられるようにキュツとした。

この感覚はなんだろう…。覚えはあるのだが…。

「羨ましいな。俺には織りの心が見えん」

ああ…。

そうだ。初めて女というものを知った時に似ているのだ。
興奮する気持ちや、高ぶる心臓とは別に、女の表情を見て、こんな
ふうに胸が苦しくなった。

もう…昔のことだ。

水村は、クスリと笑う。

「そのうち分かるようになるでしょう。今は私の方が織り殿とのつき合いは長いが…。あなたたちは夫婦なのだから」

水村の言葉に、松太郎はゆっくりと瞳を開き、憎らしいほどの澄んだ青空を見上げた。

「そつだな…」

初見

織りは水村の部屋に通されていた。
ござっぱりしている。

織りは棚にある本を眺めた。
兵法書から哲学書、物語から医学書まである。
雑読者であるらしい。

とりあえず適当に手を伸ばしてみた。

「先生、お茶を煎れましたよ」
「っ！？」

突然、部屋の襖が開けられたので織りはビックリと肩を震わせて、
手にした本を取り落とした。

相手も床に膝をついたまま、織りを見上げてぽかんと目を丸めて
いる。

「あ…あの、わたくし道場に通ってる者で、水村さまとは幼い頃から
存じあげてて…その…決して怪しい者ではございませんし」

あたふたと身振り手ぶりで言ってみたものの、それがかえって怪しい。

男は勘違いをしたのだらう。
うつすらと顔を赤らめると「し…失礼致した」とか言いながら、襖を閉める。

「お…お待ち下さいませつ。わたくし本当にただのいち弟子に過ぎませんのよ!」

慌てて襖にかじりつくと、恐る恐る開き、先ほどの男と目があつた。「あの、ちよつと、休ませて頂いている、だけなのです。本当に」

一言一句噛みしめるように織りが言う。
男は真剣な眼差しの織りをしばし見つめていたが、ぷつと吹き出した。

「早とちりをしてしまったようですね」

「早とちりでございます」

「で、先生はどちらに?」

「水村さまは、昼の稽古に行かれました」

そうか…と呟くと、男は湯呑みの載つた盆とお茶請けの羊羹を見下ろして、ちよいと頬をかいた。

ぐううつと腹が鳴る。

「…おや」

自分と変わらないくらいである男は、織りを見てぱちくりと瞬きをする。

織りは真つ赤になって俯いた。

「あの…お昼…まだだったものですから…」

男は遠慮がちに盆を差し出す。

織りは気まずそうに俯くばかりでいた。

「私は吾妻清介といいます。3年ほど前までこちらに通っていたのですが、しばらく丁稚奉公に上がっていたので留守にしていたのですが、一週間くらい前に戻って来たのですよ」

男 吾妻清介は、織りを安心させようと言葉を紡いだ。

織りはおずおずと湯呑みに手を伸ばす。

「そうでございましたか」

「あなたは、成山家の織りさまでしょう？」

羊羹を口に運びかけた織りは、目も口もあんぐりさせて清介を見た。清介はニツコリと微笑む。松太郎のように妖艶でも美しくもない。ただ爽やかで、少年らしさを残すあどけないものだ。

「あなたはご存じないでしょうが、この道場ではあなたを知らぬ者はおりませんよ」

澁刺と言う清介に、織りは空腹なども忘れた。どこかで聞いた言葉だ。

「えっと…」

「通っていた頃は、何度か一緒に稽古をつけてもらってるんですよ、私たち」

「ええっと…」

「女がてらに竹刀を振り回す武家の娘なんて、あなたくらいですか」
「ら」

そっだ。

さっき饅頭を食べながら水村が言っていたのだ。

「しばらく見ない間にずいぶんとお美しくなられたんですね」

「おっ……………!!!」

まさか松太郎以外に、こんなことをサラリと言う人間がいるだなんて…。

織りは真っ赤になって、陸に上がった魚よろしく口をパクパクさせた。

それを見た清介がケラケラと笑う。そして続けた。

「まさか、まだ通っていらっしやるとは思いませんでしたよ」

織りは真っ赤になって、ぷつと膨れた。

「松太朗殿」

呼びかけられた声に、松太朗はゆっくりと目を開く。すると澄んだ青空と一緒に相変わらず細い目の水村がこちらを覗き込んでいた。

気づかなかったが、いつの間にか稽古が始まり、竹刀のぶつかり合う音とともに、若い男たちの雄々しい声も聞こえる。

水村も相手をしてきたのだろう。上気した頬に、一筋の汗が光る。

「あ…寝ていたのか…」ゆっくりと体を起こした松太朗が、肩を鳴らす。固い床に寝ていたので、体が痛い。

「一緒にやりませんか？」

「えっ…」

水村の言葉に、松太朗は頬をひきつらせる。

本当にしばらく、竹刀すら握っていないのだ。

「いやあ…俺は…」「まあまあ。奥方が頑張っておるのに、旦那様がそんなでは、家も大切な人も守れませんよ」

はっはっは〜と水村は軽やかに笑うが、「先生」と呼ばれてそちらへ行ってしまふ。

残された松太朗は、稽古の音を聞きながら考える。

(うむ…。確かにこれではいかなんなあ)

松太郎は意を決して立ち上がると、道場へ足を向けた。

「水村殿」

松太郎の呼びかけに、道場にいた猛者たちが、一斉にそちらを向く。

「おや、どうされました？」

「俺も、一汗流そうと思つてな。やはり女一人守れなければ、家族を守っていくことも出来ん」

ニツ笑う松太郎に、猛者たちは頬を赤らめる。

いつもの爽やかな美しい微笑みではなく、愛しい者を思う妖艶で、それでいて力強さを感じさせる、浮世絵の中の役者のような笑いであった。

(こんな風に微笑まれて、あの織り殿が平静を保てるわけではないな…)

呆れるやら感心するやら…。

水村は胸中で独りごちた。

手合わせ

耳に響く竹刀のぶつかり合う高い音。幼少の頃を思い出す、引き締まった鋭い音に、松太郎はしばし耳を澄ませる。

「松太郎どの、次に私とお手合わせ願えますか？」

ふと目を開けると、ニコニコと笑顔をまき散らす水村がいた。

「水村どの、師範代のあなたと俺では全く対等ではないだろう。と言うか、俺が不利すぎて自分がかわいそうだ」

意地悪で言っているのか否か分からない水村に、松太郎は半眼で返す。

しかし、水村は笑顔を崩さず、細い目を更に細めて返した。

「妹のように可愛がっていた娘を悲しませる男は、ちいっとばかり懲らしめてやらねばなりません」

松太郎は、水村の言葉に一瞬目を大きくすると、口の端を不敵に上げ見せた。

「うむ……。まあ、仕方あるまいな」

これが、自分に返ってくる『ツケ』というものである。知らず気づかずだったとは言え、これまで自分が女性にしかして来たことの『ツケ』なのだ。

羊羹を食べ終えた織りは、少し落ち着いた気持ちで茶を啜る。

「すっかり冷えてしまったでしょう。淹れ直してきましょう」

清助が盆を持ち立ち上がりうとするのを、慌てて織りは止めた。

「十分でございます」

「しかし、先生のお客人は手厚いもてなしをせねば」

ね。と笑う清介に、織りはフルフルと首を振り、ピンと指を立てる。

「吾妻さま」

「清介、でいいですよ。私も織りさんと呼びます」

「では…清介さん。わたくしは水村さまの客ではなく、弟子です。

弟子同士でもたなすももてなさぬもないでしょう。それに」

織りは小首を傾げる。

「なぜ、あなたはそんな自由に水村さまのお家をウロウロ出来るのです？」

織りの問いにきよとんとした清介は、平然と答える。

「だって私と先生はいとこ同士ですから。ここの師範をしてる大先生は、私の伯父です」

清介の言葉に、織りは目を丸々とさせた。

そんな織りに、清介は軽やかに笑ってみせる。

「だから私、そこそこ強いんですよ」

「ま…まさか、水村さまの道場を乗っ取るために帰って来られたのですか!？」

唐突に戦慄の表情を浮かべる織りに、清介はむしろ感心した。

頭の回転が早いと言うか、究極に思い込みが激しいと言うか、恐るべき妄想癖と言うか…。

清介は、爽やかな笑顔を崩さないまま音もなく立ち上がると、織りが湯呑みを持つ手首を取った。

(細いな…)

「な…何をなさるのです…」

戦慄の表情をさらにひきつらせた織りが、清介の笑顔を見据えながら聞く。

清介はずいと顔を近づけた。

「気づかれたのでは…生きては帰せませんね」

「…つつつ!?!?!」

低く呟き屈んでくる清介の黒い影を顔に受けながら、織りは声にならない悲鳴を上げた。

にじりにじり間合いをとっていた松太郎と水村は、見ている者の手に汗握る試合をみせていた。

つま先から滑るように松太郎が左に動けば、水村が右に。水村がすいっと一歩足を進めれば、松太郎も一歩下がる。

当然だが、松太郎は水村に圧され気味だ。しかし、松太郎の瞳には諦めなどはない。強い意思を感じさせる光が宿っていた。

「水村どの、これが終われば織りを連れて帰るぞ。茜が晩飯を用意しているはずだ」

腹が減っているのだ。

松太郎に宿る強い意思是、織りを連れて帰り、いつものように3人で夕飯を食べること。

これは譲れない。

ましてや自分は、今日はまだ昼食もとっていないのだ。

松太郎は竹刀の柄をきゅっと握った。

「松太郎どの、そんなに茜どのに対する強い思いがあられるのか？」

織りの言葉を真に受けたつもりはないのだが…。しかし、確固たる言葉を松太郎から聞いておきたかった。

松太郎は、怪訝そうに眉を顰めた。

「茜がおらねば、誰が我が家で飯の準備をするのだ。織りも茜がお

らねばまだまだ嫁としてはやって行けぬのだから…」

きよとん。と水村は瞬きを一つする。

その時だ。

ダン！

ほんの一瞬の隙に松太朗が踏み込んだ。

「おっ…」

あまりに不意打ちだった為、よろめきながら水村はよけた。そして、振り向き様に、松太朗のわき腹に竹刀を払う。

「織り殿はあなたと茜殿が、ただならぬ関係ではないかと疑っていますよ」

さすがと言っべきか否か…。

両腕を振り上げて、今まさに振り下ろさんとする松太朗のわき腹僅かで、片手で払った竹刀を、水村は寸止めしていた。

片膝をついたまま、視線だけを背後の松太朗に向けて言う、余裕たつぷりの声音に、さすがの松太朗もいつものポーカーフェイスを僅かに崩して悔しげに鼻に皺を寄せた。

そしてそのまま答える。

「なぜ俺が茜とただならぬ関係にならねばならんのだ…」

すつと立ち上がった水村は、いつも通りの細い目で松太郎を振り返ると苦笑した。

「あなたの奥方は、あの、織り殿ですよ。昔から勘違い甚だしい娘でした」

「うむ…。他人に妻を語られるのは、あまりいい気がせんなあ…」
しみじみとボヤク松太郎に、水村は軽く笑い飛ばした。

「それでは、あなたが早く妻を語れるようになりなさい」

さらに苦虫を潰したような表情をする松太郎の耳に、聞き慣れた騒がしい足音が聞こえた。

「みつ……………水村さまああ！！！！！」

続けて聞き慣れた、耳をつんざく金切り声。

水村より先に、松太郎が道場から飛び出した。

「織り殿!?!」

「きやああつ!!?!?!?!?しよ…松太郎さまつ!!?!?何でここにっ」

走ってきた自分を、柔らかく抱きとめた松太郎を見上げて、もはや織りはパニックを起こしていた。

「ホントに騒がしい娘ですねえ…」

ノロノロ水村が呆れた声音で廊下に出てくる。

それを松太朗の肩越しに見つけた織りが、ハッと本来ここまで走ってきた理由を思い出した。

松太朗に腕を掴まれたまま、織りは鼻息も荒く水村に訴える。

「大変です、水村さまっ！！道場破りさまが現れましたわっ！！」

松太朗と水村は、織りを見下ろして首を傾げる。

『道場破りさま』とやらも、大変な人間に見つかってしまったものだ。

「で、その道場破りさまは、どこですか？」

先ほどより、更に呆れた声音で面倒そうに水村は尋ねる。

織りは居ても立ってもいられない、というよに足だけをバタバタさせた。

騒ぎに他の弟子たちも顔を覗かせる。

妻の醜態を見せるより、可愛い妻を猛者たちの目に触れさせることの方が松太朗には我慢ならなかった。

さり気なく自分で織りが猛者たちの視界になるように動く。

「のんびりと奥でお茶なぞ煎れてますわ」

「ああ…清介のことですか」

あれに会いましたか、と水村は目尻を緩める。

「覚えていましたか？あなたたちは、幼いころに何度か一緒に稽古をしているんです。懐かしいですねえ…」

水村は幼い織りと清介を思い出すように目を閉じて、天を仰いだ。そしてしみじみと呟く。

「昔もそうやって清介にからかわれては、一人でギャーギャー騒いでましたねえ」

水村の言葉に、織りは相変わらずのどんぐり眼をパチクリさせると、ピタリとウルサイ足踏みと、金切り声を止めた。

「そうやって昔から先生が間に入ってましたね」

大量の湯呑みと竹水筒を盆に乗せた清介が、爽やかに歩きながら奥から出てきた。

水村は苦笑した。

織りは真っ赤になつて、風船より丸く膨れた。

松太郎は、3人を見渡しながら、面白くないといじけた。

「はあ…静かだわ」

家では茜が一人、粗方夕飯の支度まで終わらせてお茶を煎れて一服していた。

「早くしないと饅頭がかたくなってしまっじゃない…」
茜は冷たくなった饅頭を憎らしげに見つめ、主人たちの帰りを待つのであった。

手合わせ（後書き）

すっかり日が傾いた、冬の夕方。

吐く息は白く、吹く風は皮膚を裂いてしまいそうなほど冷たい。

織りは膨れたまま、松太郎について歩いていった。

しばらく歩くと小走りし。また歩くと、しばらくして小走る。

松太郎はそんな織りを振り返ると首を傾げた。

「さつきから何を一人で歩いたり走ったりしておるのだ？」

「だって…早いんですもの…」

松太郎は視線を宙に漂わせる。

「確かに…日が落ちるのが早くなった」

「松太郎さまが歩く速さを申しておるのです」

相変わらずのボケをかます松太郎に、織りは半眼で言う。

「ん…？そうか…。すまんすまん。ちと考えごとをしておった」

そう言いながら、織りの竹刀を持っていない方の手を松太郎が差し出す。織りはその手と松太郎を交互に見た。

松太郎はもどかしげに、織りの手を取ってまたスタスタと歩き出す。

引つ張られるようによろめいた織りは、やはり小走りで松太郎に歩いて行く。

「松太郎さまっ…」

「なぜ、俺と茜がただならぬ関係だと思っただ？」

もう少しゆっくり歩いて下さい。

そう言おうとしたのだが、松太郎が畳みかけるように尋ねてきたので、否応なく織りは自分の言葉を飲み込んだ。

構わず松太郎が続ける。

「今回は、全く身に覚えがないのだ」

『今回は』ですって？

聞き捨てならないが…聞き捨てる。

「水村さまから？」

「ん？まあな。茜のことを疑っていると聞いて、寝耳に水だ」

「だって…」

織りは唇を尖らせる。

「だって…。茜は気だても器量もいいし、料理は美味しいし優しいし。奥方にするには、申し分なさすぎなんですもの…」

松太郎は、俯き拗ねたよう言う織りを見下ろした。

そして、清介とのことや、昨日からのことなど聞きたいことは山ほ

どあるが、今はこの愛すべき幼妻を励ますことにした。

「料理は出来んし、気だてがいいわけでもないが。何事にも一生懸命で真つ直ぐで背筋を伸ばして前を見据える、うぶで思い込みが激しくて騒がしく可愛い妻が、俺は良いのだ」

俯く織りの耳が赤く染まる。

松太郎は、一步織りに近づいた。

「よいではないか。どんな織り殿であろうと、今のままの織り殿を、俺は好いておるのだから」

冬の風が心地よく感じるほどに、織りは頭に血が上っていた。

f i n

【大晦日】（前書き）

「まだ目標が達成できん……」

明日の昼前には実家に帰る茜は、おせち料理の準備で夕飯の片付けをした後も慌ただしく働いていた。

織りは先に湯浴み中だ。

そのスキに、松太郎は茜にうなだれたまま告げた。

茜は一端手を止めて松太郎を振り返ると、またそのまま料理仕込みに戻る。

「左様でございますか」

「なぜ、自分の妻と接吻するのにこんな悩まねばならんのだ……」
うなだれたままの松太郎は、沈んだ声で呟く。

「来年の夏前には、松太郎さまたちにも甥御さまか姪御さまができますのにな」

淡泊な茜の言葉に、松太郎はチラリと目を上げる。

「絹さまか」

「つわりも大分落ち着いてこられたそうですよ」

織りの姉である絹は、嫁いで1年余りでやっと子宝に恵まれた。

松太郎の兄も、まだ子宝には恵まれておらず、初めての身内の子どもだ。

「ややか……。俺たちには出来んだろうな……当分。子どもは嫌いではないのだがなあ……」

またもやうなだれたまま、松太郎はブツブツと呟く。

茜は、作っていたこぶ締めの手瓢箪を置くと、くるりと振り返った。そして極上の笑みを浮かべる。

「じゃあ、一気にややまでおつくりになればよろしいではないですか」

忠義者の女中は、訝しい気な目を挙げる松太郎に続けた。

「織り様に、ややが欲しいと言ってしまえばよいではないですか」
「いや…そんなすぐは…」

「そうすれば、接吻どころか、褥も共にできますし、2度目の『初夜』も迎えられますし、万々歳じゃございませんか」

ヨロヨロと頼りなく、茜の突っ走った発言を制そうとした松太郎だが、万々歳な茜の提案に、いつの間にか顎に手を当てて、得意の「うむ…」で考え込んでいた。

「順を追うのも大切ですが、あの方に順を追ってやっていては、やなんなか出来るに至る頃には、松太郎さまはご隠居を控えるような御年になってますわ。一気に行く方がお二人のためですわよっ」

ニツコリと力強く微笑み、きゅっと拳を握りしめた。

いつの間にか、松太郎も輝く瞳で茜を見つめた。茜でなければ、一瞬で松太郎に恋してしまいそうな、美しい顔だ。絵巻物の光源氏で

もここまで美しい瞳ではなかったはずだ。

しかし、相手は茜。そんなモノには心揺るぐはずもない。

「確かにそうだな……。うむ……。よし。計画変更だ。一気に織りに迫るぞ」

意気込む松太郎に、茜は一つ入れ知恵した。

「女は雰囲気弱いものですわよ」

【大晦日】

大晦日を明日に控え、世の中は慌ただしく動いていた。

どんよりと鉛色の空からは、今にも雪が降りそうだ。

茜は、おせち料理をある程度作り終えて、しばしの暇をとって家族の元に帰っている。

松太郎は今日が仕事納めで、昼過ぎには帰ってくるはずだ。

それまでに織りは掃除を済ませておきたかった。

タライに沸かしたお湯をはり、拭き仕事に精を出す織りは、殆ど家事などしたことない。竹刀と箸しか握らない織りの手は真っ赤になっている。

開け放った戸から冷たい風が吹き込む度に、織りはブルツと身震いした。

「さっさと終わらせてしましょ…」

そう独りごちると、あつと言う間にぬるま湯になったタライで雑巾を絞る。

濡れた手に冷たい風が当たり、織りはまた一つ身震いした。そしてふと外を見る。

「あらあ…」

織りは顔をほころばせると、開け放った戸に近づく。

今朝は冷え込むと思っていたが、とうとう雪が降り始めた。
今年は暖冬ではあったらしく、これが初雪だ。

「積もるかしらあ……」

茜がない、一人で家のことをせねばならない、挙げ句に嫁入りして初めての正月。

重い気分でいた数日だったが、それを払拭するような初雪に、織りは年甲斐もなく心を踊らせた。

「ふふ…晴暁も気づいているかしら」

毎年姉弟で、庭に積もった雪で遊んでいた。
今年はできそうにないが…。

襷をつけたまま、織りはすっと手を伸ばした。
フワリフワリと雪が舞い、織りの手の中で溶けてしまう。

「見てることちが寒々しい」

「えっ……」

背後から呆れたような、しかし優しい声が聞こえたかと思い振り返ると、いつの間にか松太郎が帰ってきていた。

「松太郎さま、いつの間に……」

「一応ただいま、とは言ったが…掃除をしておったから気づかんだ

「ったのだろっ」

気にすることじゃない、と松太郎は微笑む。

織りは「すみません」と呟くと、こちらもニコリと笑う。

そしてまた雪に手を伸ばした。

「初雪ですわっ。積もりますかしら」

声を弾ませる妻を微笑ましく見ていた松太郎は「そうだなあ…」と言いながら、こちらもスツと腕を伸ばした。

ただし。

織りの手を下から掬い上げるように。

そして、反対の手は織りの腰に回して抱き寄せた。

「しよ…松太郎さまっ…？」

「そんな恰好でいたら、風邪をひくぞ」

下から重なってくる松太郎の手は、いつの間にか織りのそれと絡めていた。

大きな手に包まれた織りの赤い手にも、一気に血が巡りだす。

「わ…わたくし、まだ掃除が終わっておりませんので…」

「うむ…。そのようだな」

松太郎は、絡めた手を持ち上げ、織りの肩越しに自分の唇を寄せて、はあっと白い息で暖めてやる。

ついでにそのまま唇を、織りの柔らかい掌に当てた。

「しよ…松太朗さまっ…！雑巾を絞った手でございます」

恥ずかしい気持ちより先に織りの頭を掠めたのは、松太朗に取られている方とは反対に持つ雑巾のことだった。

新年に向けて、新しく卸した端切れではあるが…。これでもう畳を拭き上げたのだ…。

織りが恐る恐る振り返ると、僅かに青筋をたてた松太朗がいた。

「…すみません…」

思わず織りは謝っていた。元はといえば、松太朗が思いがけない行動を起こすのがいけないのだが…。

松太朗は何も言わずに織りを見下ろす。

茜に、今年中に起きている織りと接吻を交わしてみせる、と宣言した。

ついでに宣言したその日から同衾する予定だったが、織りの早とちりのせいで流れて…今も別々の布団で寝ている。

（ちと、焦ってしまったか…。…いや、しかし、明日で今年も終わるしなあ…。十代の子どもでもあるまいし。何故、俺は接吻ごときでこんなにも悩んでおるのだ…。しかも相手は自分の妻だというのに…）

むうっ。と唸る松太郎を側で見上げて織りはどうしようっ…と思う。

(ヤバいわ…。こんなに眉間に皺を寄せて唸ってらっしやる…。怒らせてしまったかしら…)

未だに自分の腰に腕を回す松太郎の腕に触れようとしたのだが、片手は松太郎がしっかりと握っているし、もう片方はしっかりと雑巾を握っている。

「松太郎さま…」

仕方なく、呼びかける。

「お口なおしと申しますか、お茶にしませんか？」

松太郎はチラリと織りを見下ろした。

「織り殿、今日は寒いし、そろそろ同じ布団で寝ないか」

考えごとをしていた松太郎は、ダイレクトに織りに聞いた。

冷静に妻を見下ろす男と、驚愕の表情で夫を見上げる女。

松太朗と織りの年末攻防戦が今、幕を開けた。

かも、しれない。

雪降り

「つくしっ」

いつまでも吹き曝しの縁側で見つめ合っていたので、すっかり冷え
てしまった織りが小さくくしゃみをする。

松太郎は弾かれたように我に返ると同時に、ギュウウ〜と腹が大き
く鳴ったので、一気に空腹を覚えた。

思えば、昼食をとらずに帰宅したのだった。
なぜなら…

「織り殿、昼飯は外に食べに行かないか？」

「え？」

鼻をズズツといわせた織りが、眉を顰めながら聞き返す。

「どうせ今日は二人なのだし、織り殿も忙しいだろうし明日は大晦
日で店も開いてないからな。せつかくだから」

な、とニッコリ微笑む松太郎に、織りはフニヤリと目尻を下げてし
まう。

松太郎さまと外でお食事だなんて…ステキ…。

先ほどの松太郎の爆弾発言なんてスツカリ飛んでしまった織りは、
松太郎と初めての外食デートに、完全に浮かれていた。
茜がいたなら、目をつりあげ、算盤を弾いたに違いない。

「じゃあ早速行こう」

「はい」

地に足が着いていない織りは、フワフワとした足取りで雑巾を片付けて、もちろん手も洗って着替えた。

「襟巻きは？」

玄関で待っていた松太郎は、とりあえず着込んで来た織りを見て、尋ねる。

織りは草履に履き替えながら、

「わたくし、襟巻きは持っておりませんの」と答えた。

娘時代は、父からもらった襟口にファーの付いたマントを着ていた。しかし、嫁入りした自分には少し可愛らしすぎて、実家に残してきたのだ。

「うむ…。ついでに買いに行くか」

腕組みして言う松太郎に、織りはふんわり笑って首を振った。

「いいえ、お気持ちだけ。そんなにわたくしも出歩きませんし」

茜ではないが、織りも少しだけ算盤を弾いてみた。そこまで必要でないものを買うのは無駄遣いだ。茜に怒られてしまう。

「じゃあ男物だが…」

言いながら松太郎は自分の襟巻きを織りに巻きなおしてやる。

ふわりと松太郎が使う香の香りが鼻をくすぐる。

「でも松太郎さまが…」

「よいよい。俺はアホだから風邪をひかないんだ」

「それを言うならバカですわ」

「俺はバカか？」

「い…いえっ！そういう意味では……」

真面目な顔をして冗談を言う松太郎に、織りは案の定アタフタする。松太郎はやはり軽やかに笑いながら外に出た。

まだチラチラと雪が降っている。

「ほら、まだ雪も降っているのだから。気をつけなければ、風邪をひいて寝正月を迎えることになるぞ」

そう言いながら松太郎は手を差し出す。

織りは玄関の戸を閉めると、くるりと振り返った。

そして、出された手をパチクリと見ると、おずおずとその手を取る。

「こ…このまま歩くのですか？」

しっかりと繋がれた手を見ながら織りが尋ねる。松太郎も同じように見下ろしながら、小さく小首を傾げた。

「別に構わんだらう？」

「松太郎さまのお知り合いに会っても……」

「『妻だ』と言えばよいではないか」

織りは恥ずかしい半分嬉しさで顔を上げる。

「積もらないかしら。わたくし毎年、弟と雪遊びするのが恒例でしたの」

「風邪をひくだろうに……」

呆れたように言う松太郎に、織りはクスクス笑う。

「二人で走り回りますもの。でもたがらでしょうけど、母に怒られてました」

「うむ…まあ…元気があってよいが……」

少なくとも、松太朗の回りにはそんな女は居なかった。清少納言ではないが、雪の日は戸を開けた部屋で、雪を愛でる。気が向けば歌を詠んでみるのだ。
だから、織りに返す言葉に苦心する。

「何を食べに行くのですか？」

雪の降る中、大好きな松太朗とお出かけとあって頗る機嫌のよい織りが尋ねる。

松太朗は、ん？と柔らかく微笑みか返した。

「うどんだ」

大晦日を明日に控えた市井は大勢の人で賑わっていた。

幼馴染み

「おっ、松太郎！」

賑わう街中、織りとラブラブラ歩いていた松太郎を、店先から呼ぶ声がした。

「む？おっ 織り殿、あそこだ」

呼ばれた方を見て、松太郎はニツコリと笑う。

松太郎と変わらないくらいの年の男が、松太郎を見ながら笑顔で手を振っていた。

松太郎は手を上げると、年相応の爽やかな笑顔を浮かべた。そしてそのまま、織りの手を引いて呼ばれた店へと向かう。

「お知り合いのお店なのですか？」

ニコニコと若者らしい笑顔を浮かべる松太郎を見上げて織りが尋ねる。

心なしか松太郎の声が弾んでおり、なんだか織りも楽しい。

「うむ、幼なじみの店だ。ここはうどんも美味しいが、蕎麦もいいぞ
言いながら店に入ると、先ほどの男が近寄って来た。

「久しぶりだな、松太郎。今日はもう仕事納めか？」

「うむ、折角だから妻と昼飯でも思ってたな。数馬、妻の織りだ」

自分の後ろにおずおずと控えている織りを振り返り、男 数馬という名だ に紹介した。

こうやって織りを知り合いに紹介するのは初めてで、松太郎も気恥ずかしいやら嬉しいやら不思議な気持ちだ。

数馬は松太郎ごしにひよこつと顔を出して、織りを見る。織りはちょこんと頭を下げた。

「は…初めまして…。あのお…夫がお世話になっております」

言いながら、織りは次第に俯きながら声を小さくした。

(お…夫とか言っちゃったわ…)

何だか『奥方』らしい挨拶に、織りは心臓が飛び出しそうなくらいドキドキしていた。

そしてチラつと松太郎を見上げる。

後ろからなので、しつかりとは見えないが、彼の耳が赤くなっているのは、寒さのせいだけではないようだ。

「へえつ。そういえば、お前も立派に嫁さんを貰えたんだっただな」

あの松太郎がねえ…。と松太郎と織りを交互に見ながら、数馬は一人イタズラをする子どものようにニヤニヤとする。

松太郎は、そんな数馬のわき腹に拳を軽く入れた。

「数馬、余計なことは言うなよ。それより腹がへってるんだ」

バツが悪そうにする松太郎に、数馬はコロコロと笑いながら二人を席に案内する。

その間、織りは落ち着きなくキョロキョロキョロキョロしていた。

「わたくし、外でこうやって食事をするのは初めてですわっ」

ほんのり上気した頬で、目をキラキラ輝かせる織りを見て、また数馬が笑う。

「武家のおひいさんなんざ、そんなモンだろ。しかし、松太郎も隅に置けないよなあ。こんな可愛い嫁さん貰って」

人なつっこい笑みを浮かべた数馬は、織りの顔を覗き込みながら、肩に手を回す。

慣れないことに、織りはそのまま固まってしまった。

「こら、数馬。人の妻に何をしておるんだ」

キツと目を釣り上げて言う松太郎を見て、数馬はビックリしたように目を見開くと、すぐに織りから手を離す。

「松太郎…お前、変わったなあ…」

呆然と呟く数馬に、松太郎はチロリとまた睨む。

しかし、そんな瞳も数馬は笑い飛ばした。

「いや、松太郎！めでたい！今日は俺の奢りだ！好きなモン頼みな」

威勢よく数馬が言う。

松太郎はニツと笑い返して、織りと二人でお品書きを見た。

「うむ…キツネか…。それともトロロか…。迷うなあ…」

「松太郎さま、わたくし決めました」

お品書きを睨みつけ、悩む松太郎をよそに、織りはさっさと決めてしまった。

むううつと眉根を寄せて悩む松太郎を見ながら、織りは胸の奥にモヤがかかったような気分になった。

数馬は人なつつこい笑みを浮かべて、松太郎も一緒に話していると、普段織りの前では見せないような爽やかで、若者らしい笑顔を見せる。

それは凄く魅力的で、織りに見せる妖艶な松太郎とは違う一面だ。

（わたくしは、松太郎さまのこと、なあんにも知りませんのね…）

そんな思いに駆られ、何だか面白くない。

どうすればよいのだろう。

時が徐々に埋めてくれるものなのだろうか。

（わたくしたち、別に好きあって夫婦になったわけじゃあございま

せんものねえ…)

考えれば考えるほど、織りは得意の突っ走りでもネガティブな方へ落ちていく。

「…どの。織りっ」

「はいっ!?!」

考えこんでいた織りは、松太郎が呼んでいる声にも気づかなかった。顔を上げると、松太郎が心配そうに自分を見ている。

「やはり風邪をひいたのではないか？」

「いえ…」

そう言いながら、松太郎の大きくしなやかな手が、優しく織りの額に当てられる。

「熱はないな…」

スツと手を引っ込めて、松太郎は良かったと笑う。織りは気まずく俯いた。

「すみません…ぼうつとしてました…」

「うむ、俺も決めたぞ。数馬、俺はかき揚げうどんの大盛だ。織りは何にする?」

「えっと…」

最近、たまに呼び捨てにされる。

まだ慣れなくて、その度に胸がきゅゅと甘く締め付けられた。

織りは数馬の方を向き、はにかみながら言った。

「えっと、わたくしは卜口蕎麦を」

「へいつ」

意気揚々、数馬は奥へと消えた。

松太郎は、織りを振り返って頗る上機嫌に言う。

「最後は蕎麦湯でしめるといいな。俺にも一杯分けてくれ」

織りはきょとんとしたが、何だかわからず「はい」と苦笑しながら答えた。

悪友

蕎麦茶を初めて口にしたら織りは、口当たりのよさと温かさから、ネガティブ思考も一緒にふうっとため息を吐き出す。

「美味しいお茶だろう」

湯のみを片手に、松太郎が織りの和やかな表情を見ながら言う。

織りは目尻を緩めた。

「はい。数馬さまと松太郎さまは長いお付き合いですの？」

「そうだな。父に幼いころに連れてきてもらって以来だから……。もう十年以上になるなあ」

松太郎の言葉に、織りは「まあ」と目を丸くしてみせる。

「長いですわねえ」

「だから、松太郎のことはなんでも聞いてくださいませ」

織りにニコニコと愛想のいい笑顔を向けながら、数馬は松太郎の横に腰掛ける。

松太郎は、数馬の背を軽く叩いた。

「お前はこんなところで俺たちと話てる暇はないだろう。腹が減っているのだから、早く作ってくれ」

空腹から少々眉を顰めて言う松太郎に、数馬はカカカツと笑って見せる。

「相変わらず口卑しいなあ、お前は」

織りは、不満げな夫と豪快に笑い飛ばす夫の幼馴染を交互に見やっ

「俺は一仕事終えて来たから朝から何も食っておらんのだ」

「お城務めは大変だなあ。俺たちあ、お客がいりゃそれがそのままおまんまに代わるが、松太郎たちはそうもいかないもんなあ」

腕組をし、一人納得したように言う数馬に、松太郎もきゅっと眼を閉じてうなずく。

そんな二人を、織りはひょいと肩をすくめながら、やはり交互に見た。

「そうは言うが、城主につかえてこそ我ら武家であるのだからなあ。お上がおらねば、俺たちは食いつぱぐれだ。仕事があるだけでも感謝せねばなるまい」

「相変わらずお前はクソがつくほどの真面目な野郎だなあ」

からかうように言う数馬に、松太郎はチロリと片目をあけて睨む。

「家族があれば、真面目に生きてゆかねばならんだ。そんなことも分らんとは…。数馬もまだまだだ」

フツと織りは口元がほころぶのを隠せなかった。

家族を守ろうとする松太郎の心遣いが嬉しい。

そして、その守ろうとする家族が自分であるということが、織りに
は極上の喜びだった。

しかし、そんな織りを横目に見ながら、数馬もニッと笑い、再び奥へと引っ込んだ。

「まったく、口だけは達者な男だ」

数馬が引っ込んだ奥を見ながら、松太郎はお茶をすすする。

「でも、松太郎さま。なんだか楽しそうですわ」

おっとりとした夫にほほ笑む織りに、松太郎は目を挙げる。

「そうか？」

「ええ。今の松太郎さま、お年相応に見えますわよ」

普段より、よっぽどトツキやすいです。

とは、織りの胸中にもしまっておいた。

「うむ……。まあ、子供のころから知った仲だからな。今さら気構えもせんでよいし」

「うらやましいですわ」

織りは、数馬が、というつもりで言ったのだが、松太郎は小首をかしげて見せた。

「そうだろうか。まあ気心の知れた友がおるのは…人生を豊かにするかも知れんな」

友がいる自分を羨ましがっていると勘違いしている松太郎を、織りは訂正するつもりはなかった。

穏やかな笑みを浮かべ、松太郎の話しに耳を傾ける。

「しかし、家族がいるというのも、何にも代えがたいことであろう」
「……えっ？」

突然しつかりと自分を見据えて言う松太郎の言葉に織りは一瞬言葉を失った。

「守る家族があるというのは、なかなか人生を豊かにしてくれるぞ。仕事にも張り合いが出るしな」

織りは、目をマン丸にしてぽかんと夫を見つめた。

松太郎は、頬杖をついて織りを見ながら軽やかに笑って見せる。

「なんだ、織り殿はそうは思わんか？」

「い…いえ。そんなこと、考えたこともありませんでしたわ」
「そうか？ふうん…」

呆然とする織りが答えると、松太郎は頼杖をついたまま返事をする。

「あ…いえ、なんと申しますかしら…。毎日を駆けるように過ごしておるようで…。そんなことをじっくり考えたこともありませんでした。皆さま、お嫁に行けばそんなモノなんでしょうかね？？」

初めてのことに戸惑うばかりで、あつという間に過ぎて行ったこの数力月を振り返りながら言葉を紡ぐ妻に、クソ真面目な夫はともに首を傾げた。

「うむ…。どうなのであろう…」

夫婦そろって首を傾げては、なにやら難し顔をしている松太郎たちを見て、数馬も首を傾げる。

「あいつら、何をそんなに思い悩んでんだらうなあ…」

傍らにいる数馬の奥方は、蕎麦湯を急須に移しながら答える。

「腹が減ってんじゃあないのかい。早く持ってお行きよ」

腹が大きな奥方の言葉に、数馬はおとなしく注文の品を運んだ。

紅と香

腹いっぱいうどんを食べた松太郎は、数馬が本当におこりだといつので、その言葉に甘んじていた。しかしながら腑に落ちないような表情で、数馬とその妻を見る。

「だいたい、数馬はなぜ早く言わんのだ…」

松太郎を見ながら、数馬は力力カッと笑う。

「お前も、しつこいな」

その言葉に、織りもプツと吹き出した。

「妻も子もおるなど、俺は聞いていないぞ」

「子はまだいねえよ」

数馬は照れているのか、壁によりかかったままで小さく頭を掻いた。松太郎は、そんな数馬の奥に控える、大きなおなかを抱えた、頬の赤い女を見る。

年のころは、数馬より少しばかり若いくらいだろう。

気前よさげに、口の端をキュッと上げている。

「春には生まれるのであろう」

松太郎は、視線を数馬に戻すと、どこか恨めし気に言う。

「ま。お互い若いんだから、子どもくらいすぐにできるだろうよ」

むうっと唸る松太郎の後で、織りは気まづく俯いた。

帰り道。

行きと変わらず賑わう市井を、織りは遠慮がちに見まわっていた。

それに気づいた松太郎は、織りの手を取り、小間物屋まで連れて行く。

店の前には飴屋も出ていた。

甘い香りが鼻をくすぐり、織りは知らずため息をつく。

「どれでも好きなものを買おうといい」

ニツコリとほほ笑む松太郎を見上げて、織りはキラキラと目を輝かせた。

「正月前にケチケチするのも、貧乏臭すぎていかんだらう。今年一年を労うつもりで、好きなものを買ってやるぞ」

「よ…よろしいのですか？」

恐る恐る聞く織りに、松太郎は苦笑する。

「着物や帯は買ってやれんからな」

「まあっ」

織りは、思わず年相応の娘らしく店の中に足早に向かう。

店の中には、女子供が喜ぶような縮緬細工の小物や、髪飾りや鈴の

ついた根付けなどが並んでいる。

織りは目をキラキラさせたまま、一つひとつ手にとり、じっくりと眺めた。

その様子を店先から優しいほほ笑みを浮かべた松太郎が見ている。愛おしい妻との買い物に幸せを感じる。

しかし、そんな松太郎の姿を店の中にいる娘たちや行きかう女どもは頬を染め、うっとり見つめている。

「松太郎さま、これどうです？」

そう言つて織りが見せたのは、鈴のついた扇を模した根付けだった。

「どれ？」

店の中に入って来た松太郎の後ろから、数名の若い娘がついて入ってくる。

「これ、かわいいと思いませんか？」

「うむ…。そのようなものより、こちらの巾着はどうだ？それとも、この櫛は？」

薄紅の巾着と鼈甲の櫛を見せながら言う松太郎に、織りは苦笑した。

買ってくれる松太郎に失礼にならないように、安すぎず、そして決して高くはない可愛らしい小物を選んだつもりだったのだが…。

「そう言えば…」

「えっ」

突然ずいと織りに顔を近づける松太郎に、織りはどきまぎする。

「紅はつけんのか？」

本人にその自覚はないのだが、松太郎は妖艶に親指の腹で織りの唇をなぞる。

ポツと織りの顔が真っ赤になる。

そして、なぜかその様を見ていた女店主や客の娘たちも深く熱っばいたため息をつき、砕けて座り込みそうになるのを必死でこらえる。

さらに、真っ赤な織りの首筋に松太郎は鼻先を近づける。

「香も使わんのか？」

松太郎でなければ、セクハラと思われるも仕方がないくらい妖しい様だが、織りは完全に腑抜けてしまった。

「よし、じゃあ、今回は俺が織りに紅と香を買ってやるっ」

そう言うと、松太郎は浮ついた織りを横目に

「この色がよいだろうな…。香は…」
とブツブツ言いながら選び始めた。

結局桜色の紅と、瑞々しく爽やかな甘さのある練香を買い、そして店の前に出ていた飴屋で犬を模した飴まで買った。

「よろしのでしょうか…こんなに買ったいて…」

嬉しいながらも、贅沢をしているようでなんだか素直に喜んでばかりはおられず、織りはおずおずと聞くが、松太郎は満足げだ。

「夫婦らしいではないか。一つの財布から二人分の飯代を出し、妻の使うものを選んでやるとは」

「はあ…。でも、どこにつけて行くこうかしら…。この飴も可愛らしくて食べるにいいですね」

買ってもらった飴を眺めながら織りは苦笑する。

「どこでも、これから二人で出かけることなどたくさんあるのだから、悩まずともよいではないか」

「そうですね…。春になったら、桃や桜を見に行きたいですね。河川敷は、春になると菜の花と桜でとてもキレイなんですわよ。あ、でもその前に水村様の道場の庭にある梅も見に行きたいですね」

「織り殿は花が好きだったのだな」

「ええ。…似合いませんでしょう」

恥ずかしそうに言う織りに、松太郎はははは！と笑った。

「女子供は得てして花が好きなのであろう。そうだな…数馬ではないが、3人で花見をしたいな」

「3人？」

「俺たちと俺たちの子と3人だ」

松太朗の言葉に、織りは笑顔をはりつけたまま固まった。そして、やっとの思いで口を開く。

「えつと…。つ…次の春は難しいですわね」

さすがに4か月弱では見ぼ持つてもいない子どもを生むことは難しい。

「まあ、よいではないか。今日から褥をともにするのだから。お…織り！？大丈夫か？」

忘れていた言葉を思い出し、織りはフラリとよろめいた。

恋人

「うううっ…寒い寒い」

手をこすり合わせながら、足早に松太郎は家の中へと入る。

そうじをしていたため、火鉢の火も昨晩から消えている我が家は、外よりは温かい程度であった。

織りよりも先に部屋へと入り、急いで火をおこす。

後から入って来た織りは、丁寧に借りていた襟巻を畳んで箆笥にしまう。そして、買ってもらった紅と香を懐から取り出すと、実家から持ってきた漆塗りの化粧箱の前に腰を下した。

ともに蓋を空け、淡い桜色の紅と爽やかな甘い香りの香を楽しむ。鏡を前にして、織りはしばらく自分の顔を眺めた。

ほっそりとした顎と、ふっくらと膨らむ頬。

松太郎と一緒にいれば、どちらかという幼さが目立つ織りの顔にそつと小指にとった紅を引いてみた。淡い桜色の紅が、織りの顔の中ではぱつと色めき、しかしけつして唇を悪目立ちさせず、上品に彼女を飾る。

(なんとまあ…。松太郎さまのお見立てはバツチりだわ)

鏡を見ながら織りは自分の顔をまじまじと見つめて関心した。

そして、すつと紅も香も大切に化粧箱にしまつと、すつと立ち上がった。

心なしかウキウキしながら、そして気恥かしさも漂わせながら松太郎のもとへ向かう。

（自分で言うのもなんだか恥ずかしいし…でも、言わなければ、松太郎さまは気づいてくれるとも思えませんものねえ…）

腕を組み、うううんと考えていた織りが部屋に戻ると、

「ああ、織り殿。熱い茶をいれたぞ」

膝に愛猫を乗せた松太郎が、その背を撫でながらニコニコと言う。

「まあ…、松太郎さま！申し訳ないですわ、そのようなこと、本来であればわたくしがせねばなりませんのに…！！」

「いやあ、よいのだ。朝からずっと掃除で疲れていただろう。ん…」
慌てる織りに、松太郎は柔和な笑みを浮かべていたわった。

そして、申し訳なさそうに腰を下ろすを、松太郎はまじまじと見詰める。

湯？みを手にした織りは、その視線に気づく。

「な…何でしょう」

織りが目をきよどきよどきさせると、松太郎はニツと口角を上げる。
そして、湯呑みの淵に指を添えて茶を口に含んだ。

「もうしばらく、茶を飲むのも茶菓子も食つのも我慢した方が良さな」

そう言いながら松太郎は、織りの湯呑みをそつと彼女の手から取った。

織りは、わけが分らず変わらず目をパチクリさせている。そんな妻を見ながら、松太郎は愛猫を抱えた。甘えた声で鳴くメダカの下顎を撫でると、気持よさ気に目を細める。そんなメダカを見下ろした松太郎は、まるでメダカに話しかけるように続けた。

「せっかく綺麗な桜色をしておるのだから、茶を飲めば、落ちてしまうではないか、なあ」

「よ…よくお気づきになりましたわね…」

驚いた織りは、目を丸くしたまま呆けたように言う。

この夫が、まさか妻の化粧に気づくなど微塵も思っていなかった。

驚く織りに、松太郎は片手をついて体を傾けたきた。

ゆっくりと自分に落ちる影に、織りは夫を見上げる。

柔らかく微笑む松太郎が、ゆっくりとした動作で織りに近づいた。

息が触れてしまうほどの距離で、心臓が飛び出しそうなくら胸が

早鐘を打つ。

松太郎が近づいた分、体は後に退きたいと思つのに、体はまるで硬直してしまつたかのように動かない。

ふわりと香る松太郎の香を鼻先に感じながら、織りは形のよい松太郎の唇に目を落とす。

閉じられたように震える織りの長く、ほどよく上を向く睫毛を見ながらその先にある、桜色の唇に己のそれを重ねた。

夫婦の胸の間で、メダカは目を細めて小さく鳴いた。

長い接吻から名残惜しげに唇を離すと、真っ赤な顔の織りが俯いたまま手で唇を押さえている。

松太郎は、織りの細い顎を取るとそつと持ち上げた。

「うむ…すつかり取れてしまったな…」

顎に添えた手はそのままに、長い親指の腹で織りの唇をなぞる松太郎に、織りはクラクラするほど頭に血が上っているのを実感した。

「まあ…よいか」

「よ…よくありませんわ」

呑気な声音で言う松太郎に、織りはやつとそう言った。

織りの困ったような怒ったような表情を見て、松太郎は小首を傾げる。

「なぜだ」

「だって…こんなにすぐ取れてしまつては…。おなごは、外に出るときには綺麗にしておきたいものなのです。たとえば、一人でおろうとも、しっかりとしておきたいのでございます」

「…まさか織り殿から、おなごについて語る日がくるとは思わなんだ…」

むううつと、唸りながら織りは恥ずかしそうにしながらも、心底感心したように言う松太郎をきゅつと睨んだ。

しかし、織り自身も口にしてから「まさか、自分の口からこのような事を言う日が来るなんて…」と半信半疑でもあったため、それを人に指摘されると気恥かしく、唸るしかなかった。

「うむ…。そのような表情を可愛いと思う俺は、もう織り殿に溺れているのかも知れんな」

「松太郎様、寒さで脳味噌が凍っておいでなのではないのでしょうか？」

「もともと、そんなに詰まってはおらん」

「またそのような冗談を…。松太郎さま。殿方がおなごに溺れておるなど、軽々しく口にするものではござせんわよ」

織りは松太郎に諭すように言う。

織りの言葉に、松太郎はメダ力を抱えたままふつと笑って見せる。それは妖艶な笑みでも、不敵な笑みでも、ましてや柔和な微笑みでもなく、どこか諦めたような力のない、ため息にも似たものだった。

「俺の妻ははつきりとモノを言わねば気づかぬ者ゆえ…仕方あるまい」

鈍感だと間接的に言われた織りは、首を傾げる。

「わたくし、間を読むのは上手だと水村様に言われるのですが…」
「それは、剣における間合いの話であろう。俺も空気を讀んでもらえた方が助かるのだが…」

にやあつとメダカが松太郎の腕から飛び降りる。

そして戸をカリカリとひっかくので、松太郎は腰を上げて戸をあけてやる。するとメダカは、夫婦を交互に見ると、もう一度にやあつと小さく鳴いて、ぴよんと庭に下りると優雅に尻尾を振りながらどこかへ行ってしまった。

「まったく、おなごも猫も気ままなものだと思わんか？」

ふうつと今度は本当にため息をつきながら、松太郎が言う。

「…わたくしは松太郎様に振り回されておりますのに？」

「俺のどこが振り回すのだ？」

織りは、いまだに熱持つ頬をそのままにプイと顔をそむけた。

「わたくしは、いつつも、松太郎様が近くに居られるだけで…触れられるだけで心臓が止まりそうなくらい意識してしまいますわ」

そして、松太郎からのアクションを少なからず期待する自分がいることを自覚していた。

しかし、それは口に出さない。

松太郎は一瞬パチクリと大きく瞬きをする。

しかし、すぐに小さく笑うと、「そうか」とつぶやいた。

「俺たちは夫婦というより、まるで恋人同士だな」

「こっ……!？」

両家の親が揃っていたら、

「何を寝言を言っておるのだ！」

やら

「そのような甘ったれたものではないわ！」

などと叱責されそうな言葉に、織りは真っ赤になって言葉を失った。

「恋人同士なら、しばらくは接吻で我慢するしかないな」

うーんと伸びをする松太郎に、織りは道場での素早さを見せて、彼の胸倉をつかんだ。

「わ…わたくしたち、夫婦でございますわよ。め・お・とっ！義母上が悲しまれますわ！」

利玖にも一度夫婦の夜のことについては話している。

それが、もしかしたら松太郎の母にも伝わっているかもしれない。

(なんせ、母親同士は婚儀を機にお茶仲間になったのだから)
そんなことになっていれば、実におもしろくない。

松太郎は、血相を変えて自分の胸倉を掴む織りを見下ろして、豪快に笑って見せた。

「そ…それは分っておる。たとえ話であるっ」

「シヤレにならないたどえ話ですわ」

松太郎は、ははは！と笑うと、織りの肩に手を置き、あまり高くはない我が家の天井を見上げた。

「まあ、俺の両親は世継ぎを望んでおるのは事実だな」

織りは、松太郎の言葉に眉根をきゅっつと寄せると、「うっつ」と小さく唸る。

「分っております…」

やはり唸るような低い声で俯いたままの織りがつぶやく。

松太郎は俯く織りをちらりと見た。

「それは、わたくしの両親も同じですわ」

「まあ…武家の婚姻などそんなものだな」

「武家なんてそんなものですわ」

少し顔を上げた織りは心なしか唇を尖らせたまま拗ねたように言う。

「うむ……」

「でも…、わたくしは、もう少し、松太郎様と二人の時間を楽しみとっくぞいますわ」

松太郎は、黙って目を丸くして織りを見下ろした。

俯く織りはうなじまで真っ赤にしていた。

「おや、また雪が降り出したな」

松太郎の言葉に織りは夫ごしに外を見た。

チラリチラリと柔らかな雪が風に舞っている。

それを二人で黙って見ていると、どちらともなく視線を絡ませた。そして、夫婦はたがいにほほ笑みあい、再び唇を重ねた。

家の事も全てやり終えて、松太郎たちも無事に大晦日を迎えることができた。

そして、未だ台所に立たせては危なっかしい織りの不慣れな年越し蕎麦の準備を見ていた松太郎は、ネギを乗せてしまった井ぶりを盆に乗せた。

「これは俺が運ぶから、織りは湯呑みを」
「はあい」

額にうつすら汗をにじませた織りは、夫婦茶碗を持ち、松太郎の後について部屋へ戻る。

まったく、茜がないというだけで、本当に大変である。

(やはり、茜はすごいわねえ…)

など、呑気にそんなことを考えた。

「では、今年も一年ご苦労」

松太郎の労いの言葉で、二人は仲良くいただきますをした。同時に、遠くから鐘の音が聞こえ始めた。

「もう、年が明けようとしておるのだなあ」

「ずっと蕎麦をすすりながら、松太郎が言う。」

「今年は人生の分かれ道だったよなあ…」

「明日はあいさつ回りで大変になりますわね…」

しゅるるつと蕎麦を吸い上げる織りが続けた。そして、さらに続ける。

「お布団は敷いてありますゆえ、今日はお早目にお休みくださいませ」

「お早めに」とは言っても、今日は普段よりも夜更かしをしている。今日くらいは、ろうそくを少しくらい長く使ったとしても、茜は怒らないはずだ。

しかしそれよりも、松太郎は布団がいくつ敷いてあるのか気になるのだが…。

松太郎は、チラリと寝所に目をやる。

そんな松太郎に織りは気づかず、うつすらと頬を染めたまま極上

の笑顔で告げた。

「また、来年もずっと…ずっとよろしくお願いしますね」

ニッコリと自分に笑いかけてくる織りの笑顔を見て、松太郎は布団の数を気にするなど、細かいことに思え、勢いよくつゆを飲んだ。

（ま。気分は恋人同士だな…。時間はたっぷりあるのだし、焦らずともよいか）

昨日から降り始めた雪は、あたりをすっきり銀世界に変えてしまっていた。

大晦日…の4日後

三が日も終わり、茜もやっと戻って来たことで、日常が動きつつあった。

「松太郎さま、織りさま。明けましておめでとうございます」

上座に夫婦を座らせた茜は、恭しくこうべを垂れる。

松太郎はその仰々しさに、尻がムズムズするのだが、織りはすっかり笑顔で頷くばかりだ。

これが昔から茜と織りたちの年始であるのだから、いつものことだ、とお互い割り切って、そして場を楽しんでいる。

「また、此度は長の暇ありがとうございます」

「ゆつくり出来ましたか？」

いつになく、上品に言う織りの口調からも、本人らにとってこれがただの『イベント』だと知れる。だが、慣れない松太郎は胡座をかき、腕組みしたままブルっと身震いしてみせた。

「つまらぬ物ですが、お年賀にどうぞ」

そう言っつて茜が風呂敷から出したのは、上等な生菓子だった。

松太郎は苦笑して、それを受け取る。

こんな茶番でも、彼女らにしてみれば、伝統であり、そしてただ

の茶番だけではないのだと知れる。

「すまんな、気を遣わせて。正月はゆっくりできたか？」

茜は風呂敷を畳ながら、「ええ」と答えた。

「懐かしい方々と、再会できたのではない？」

織りの何気ない言葉に、茜が目を丸くして

「そうなのでございますっ」

と鼻息を荒くした。

「なんと、2年ぶりに楊蔵さまに会ってしまいました!!!」

興奮する茜に、織りはまあっと目を剥き、松太郎は首を捻る。

「また、何で？」

「実はここに戻る道すがら、お稲荷さんに参ったのでございます」

「そこで、会った、と？」

「ま、そんなかんじですわね。あちら様は薬種問屋で大店の跡取りですから」

「ふうん。焼けぼっ杭に火などはありませんの？」

からかう様に目をニンマリと細める織りに、茜は即答で、否と言
う。

「焼け……………なんだ。そのヨウゾウ殿とは、茜のかつての思い人が
何かか？」

「ははは、と新年も変わらず美しく笑う夫に、妻も袖で口元を隠しながら、無邪気に言う。

「違いますわ、松太郎さま。楊蔵殿は、茜の昔の旦那様ですわ」

「なっ……!？」

「2年前に暇を申しつけられましたの」

無邪気な妻の言葉に目を剥き驚愕の表情で、口をパクパクさせながら一家の主は美しい使用人を見た。

茜は松太郎の反応を楽しむようにココロと笑う。

「わたくしも、一応おなごの幸せを掴んではみたのですけれどもね」

織りは、茜に氣遣う風でもなく、実に無邪気に言う。

「茜は、奥方としても、わたくしの先輩なのです」

「まあ、結局離縁致しましたけれども」

まったく気に留めないのは茜も同じで、織りの言葉になんとも返答のしにくい言い回しをしてみせた。

口元を歪にゆがめて、なんとか笑おうとする松太郎をよそに、織りは大きく頷きながら付け加える。

「武家でみっちり行儀見習いをしていた茜が、大店の女将など、務まりませんわよ」

「ほほほ。でも楊蔵様もお元気そうでした。なんでも去年の春には新しい奥方を迎えて、今年の夏前には待望のややも……」

若い娘たちらしく、鈴を鳴らしたような爽やかな声で楽しげに話していたのだが、茜は意味ありげにニッコリと極上の笑みを浮かべ

た。

本当は、あまりの茜の美しい笑みに、楊蔵は彼女を「妻」という女として見れなくなり離縁したのだが……。

それはさて置き、その美しい笑みを顔面に貼り付けたまま、茜は松太郎を見てもう一度言う。

「待望の、ややもつ。産まれるそうです。おややがっ」

「えええい!!!何だと申すのだ!!!小姑のようにやや、やや、と。我ら夫婦、ちゃんと年末にやや計画をしたわ!!!」

「えっ!!!??はっ!!!??」

「んつまあ……!!!松太郎さま、それはそれは!!!!誠におめでとございます!!!!念願叶いましたのね!??」

松太郎は織りと過ごした大晦日を思い、一人で『織りとのやははしばらく待つ』と合点させていた。勿論、彼らに姫はじめなどあるはずもない。

そんな松太郎の気も知らず、織りが慌てて赤面しうろたえる。

そんな二人を見て、忠義者の女中は目を爛々と輝かせる。

山田家（松太朗は姓を山田という）の賑やかな年明けであった。

大晦日…の4日後（後書き）

何とか奥さんとの接吻に成功した松太郎さまは、とりあえず目標達成。 ややは作らずとも、次は春までに『二』度めの『初』夜を迎えることが目標です。

松太郎家の姓、茜の過去。

微妙な新発見で、おままごと夫婦＋忠義者の女中たちの生活は、また始まるのでした。

【星詠】（前書き）

「なぜだろうなあ？」

首筋から松太朗の声が体を伝って聞こえてくる。

「なにゆえ、古の歌に星を詠んだものは少ないのであろう？」

普段の織りならば、

「そうなんですか？松太朗さまはお歌の教養もおありでステキですわね」

などと、目をハートにして呑気に感心しそうだが…。

何やら高尚なことを言っている松太朗は、織りの着物の襟から右手をスルリと滑り込ませて、その手に吸いつくようにしっとりとした彼女の肌を楽しんでいた。左手は、しっかりと織りの腰を抱き寄せている。

織りはくすぐったさと、恥ずかしさからきゅっと目を閉じた。

「消えてしまいそうだ…」

織りの首筋に唇をあてながら、松太朗はささやく。

その言葉を感じながら、織りはうっすらと目を開けて、自分の首筋に顔をうずめる松太朗を見た。

「この輝く星ぼしも、今にも消えてしまいそうなほど儂く美しいのに、我ら先祖は夜に月見しかしておらんようだな…」

背後から、妻を足でしつかりと自分に引き寄せ、あいた左手は織りの手を取る。

「それに、強がっていてもかようにか弱いおなごを見て、それを歌にせんとはな」

指を絡めて手を合わせても、織りの手はすっぽりと松太郎の手がつつんでしまふ。

歌の教養など幼少のころからほとんど受けていない織りは、これがたとえ普通の状況であったとしても「松太郎さま、何だか分らないけれど素敵ですわ」としか答えられなかつただろう。

それが、このような状況ともなれば、受け答えはおろか、もはや松太郎の声など己の盆踊りでも踊れそうなくらい勢いのある心臓の音と血液が台風の際の川の流れのように激しく流れる音で、まったく聞こえていない。

ヒヤリとする空気に少し我に返る。

いつの間にか、織りの着物の襟はゆつたりとはだけられていた。

そのため、松太郎の手は先ほどよりも自由に肌の上を滑る。そして、時にはその感触を楽しんだ。

「しよ…松太郎さま…」

絡められた手と反対の手で、自分を好きに行き来する松太郎の手を掴むが、何にもならない。

「か弱いものだな…」
「や…」

松太郎が囁きながら織りの耳たぶを噛む。

松太郎の手と唇に意識が集中してしまう。

睦月とはよく言ったもので、空気はこんなにも冷たく皮膚を裂いてしまいそうなのに、織りの体は熱を帯びてくる。そして、松太郎の手も心地よく温かい。

襟から滑り込ませた手に力が入る。

「きゃ…松太郎さま…あ」

酒よりも、甘い甘い、織りの声。

織りはうつすらと唇を開けて呼吸をした。

すばらしい早業というか…目敏いというか。

織りの一瞬の隙に、松太郎は織りの顎をとらえ、そのまま強引に唇を捉えた。

うつすらと開く織りの瞳には、キラキラと輝くちいさな星が、小さく開いた戸口越しに見えた。

【星詠】

夫婦がこのように睦みあう状況になる前まで、グイッと時間は遡る。

一月も半ば過ぎ、仕事も世間も大分落ち着いたある休日。織りと松太郎は、久しぶりに水村の道場を訪ね、新年のあいさつをした。

奥に通された二人は、お年賀とも手土産ともつかない代物を水村に手渡し、談笑していた。

「ただ今戻りました」

しばらくすると、玄関から少年よりも低い、成人男性より澄んだ声が、道場に響く。

あら、と織りが声の方を振り返る。

水村は「帰ってきましね」と独り語散ると、よっこいせ、と相変わらず年不相応の声とともに立ち上がった。

「今の声は…?」

織りが、口元に笑みを浮かべて聞くと、湯呑みを茶棚からもう一つ取り出した水村が苦笑した。

「清介ですよ。実はしばらくうちに居候することになりましたね。お使いに出てもらっていたのです」

「左様でございますか。では、賑やかなお正月になったのですね」

ニツコリと微笑みながら言う織りに、水村も細い目を更に細めて「ええ」と笑いながら頷いた。

「稽古始は大きな催し物のようなものですからね。清介に準備を手伝ってもらったので助かりましたよ」

(…いいように使っておるのだろうなあ…)

水村の腹黒い笑みを見ながら、松太郎は胸中でそうツッコミ茶をすすする。

「先生！只今帰りましてございます」

勢いよくふすまを開け、清介の分の茶を入れていた水村に元気に声をかけるが、すぐにその場に膝をついた。

「し…失礼致した！」

確か、初めて（実は幼いころに面識があつたらしいのだが覚えていない）会ったときも、勘違いをして織りに同じように謝っていた。

「清介、頭を上げてこちらへ来なさい。織り殿たちからお土産をもらいましたよ」

客人が織りであると告げられた清介は、輝く笑顔をたたえて、パツと顔を上げ、織りを見た。

が、すぐにその横に控える麗人に気づく。

「清介さん、明けましておめでとございます。今年のご都合が合えば、一度手合わせ願いますわ」

清介に丁寧な手をつく織りに、清介は慌ててこうべを垂れる。

「あ…いや。おめでと存じます。俺でよければ、いつでも手合わせ致しますよ」

そう言いながら、清介は再び麗人―松太郎を見た。

「お付きの方ですか？」

松太郎を手で示し、清介は訪ねる。

織りの家、成山家と言えば、外様とは言えなかなかの御家柄。お付きの人がいても何もおかしくはない。一つだけおかしいのは、お付きにしては、主人と並んで…いや心なしか前に出て座っていることだけである。

織りは、清介の言葉に目をパチクリさせた。

水村は面白そうに目を細める。

そして…

「挨拶が遅れて申し訳ない。何やら妻が世話になっているようだな。松太郎と申す」

松太郎は、不敵な笑みを口元に浮かべて清介の目をとらえてそう自己紹介した。

「な…なぜ…。織りさん、キツネがタヌキに化かされておるのではないだろうか。でなければ、このような絵巻物の中から飛び出したような殿方が…」

清介は、最後まで言わなかった。

いささかムツとする織りをよそに、松太郎は清介の言うことの意味が分らず小首を傾げる。

「はははは。なんだ、清介。お前、やたらと織り殿に気のある話ぶりをすると思ったら…。新年早々失恋をってしまったなあ。はははは」

腹を抱えんばかりに、水村は清介の肩に手を乗せて無神経にもそういった。

「きつ…気のある話ぶりなど…！！何を申しておられるのだ!？」

松太郎は、本気で狼狽する清介を見て、無表情を保った。しかし、眉が不機嫌そうに跳ねたのは、本人も、周りの人間も気づかなかった。

昔話

幼いころから男勝りな織りは、花や書を教える利玖の目を盗んでは、しょっちゅう水村の道場へと足を運んでいた。

『織り殿、そなたが身につけなければならんのは、竹刀の振り回し方ではなく、針や裁ちばさみの使い方ですぞ』

わざわざ自分の分のお八つまで持参する織りは、道場の縁側にちよこんと座り、饅頭を頬張りながら、水村の父親である師範の言葉を右から左に聞き流していた。

『泰平のこの時代、男の武芸とて嗜み程度になってきておるのだ。姫のそなたがそのようなモノ身につけても一銭の価値もありませんぞ』

手についた餡子まで綺麗に舌で舐め取った幼い織りは、唇を尖らした。

『水村先生、わたくしはお花や書は嫌いなのでございます。それに、こんなタイヘイの世ですもの。きっと、おなごも殿方も、同じように暮らせる日が来ますわ』

甲高くたどたどしい口調で、織りはよくそんなことを言っていた。

『なんとまあ……』

師範が目を丸くして織りを見る。

そこへ、ハタハタハタと、土をせわしなく蹴る音がしたかと思う

と、織りほどではない甲高い声が響いた。

『また来ておったのか、このバカ女！やい！俺が相手になるからかかって来い』

声の主は、まだ前髪も下ろしたまま、太ってはいないが、年端もいかない幼い少年らしく、肩から手首までくびれがほとんど見当たらない、ふっくらした腕を織りに翳した。

師範はこめかみを人差し指で、グリグリ押しながらため息を吐く。

『清介、口を慎みなさい』

『なんでだよ、おじ上！こんなじゃじゃ馬、ここいらでギャフンと言わせるんだ』

静かな声で諭す師範に、幼い清介は織りのようなキンキン声で勇む。

織りは、パタンと縁側から降りるときゅっと清介を見返した。

『じゃじゃ馬とは失礼な！』

『おまえがじゃじゃ馬じゃなければ、暴れ馬か！？』

『ンまあ！！なんて減らず口なのでしょう…！！』

織りは真っ赤になって、鼻息を荒くする。

清介はフフンと、勝ち誇ったように腕組をして顎を反る。ほとんど身長の変わらない幼い二人であるため、清介が織りを見下ろすようにするには、こうするしかなかった。

『わたくしをナメてかかると怪我しますわよ』

ズイっと右足を突き出し、こちらも今にも喧嘩をせんばかりに勇

みこむ。

『お前こそ、やめるってんなら今のうちだぞ!』

同じようにズイと右足を摺りだした清介も、負けじと答える。

そんな二人を見ながら、お茶を淹れて来た息子とともに、師範はこめかみを相変わらずグリグリと押さえていた。

『父上、弟子はもう少し選ばれた方がよいのではないですか?』

『宗佑…。そうは言うが、選んでおられるほど、うちの道場も儲かっちゃいないんだよ』

宗佑 つまり現在織りたちの前にいる師範代の名である は、父の俯き顔を横目で盗み見る。

(武士道云々偉そうなことを言っても、やはり利潤あつてのものダネなのだ…)

まだ元服して間もない若い師範代は、道場運営と武士道という微妙な掛け合いの、大人の世界を垣間見てしまったのだった。

そうしている内に、幼い二人は、掴みあいの喧嘩を始めてしまった。

『ああ…こら、清介、織り殿、やめないか!』

宗佑が慌てて二人をひきはがす。

幼い割に力強く、なかなかお互いの着物を離そうとしない。

『はなせ、兄さま！今日こそはこのじゃじゃ馬に痛い目見せねば！』

『清介、男がおなごに手を出すのは感心ならんぞ』

織りの着物と髪の毛を離さない清介に、宗佑はやんわりと言いつつ、

しかし、清介はその手をゆるめない。

実は、今まで何度か手合わせをしているが、まだ織りにきちんと勝つことがないのだ。とはいえ、織りが特別強いわけでも、清介が弱いわけでもない。

一重に運だ。

清介の、運、が悪いのだ。

『じゃじゃ馬じゃじゃ馬と、バカの一つ覚えのように！』

『ぬううう！！よくそんな憎まれ口を』

ムキになる清介のプニ腕とやはり着物をつかんだまま、織りも負けじと言いつ返す。

喧々囂々。

『自業自得だな』

道場の奥にある、水村家居住地の一室で、幼い二人は宗佑の手当

てを受けていた。

『ジゴウジトクって何ですか？』

ムツとした表情のまま、首と鎖骨に引っかき傷を受けた織りは、宗佑を見上げた。

宗佑は、フツと鼻で笑う。

『自業自得も分らぬ子どもが、一著前に喧嘩をしたのですか』
『子ども相手に、偉そうに言っただけでどうするのだ』

ほつぺたを思いつきりつねられ真っ赤になって、足には織りが蹴りを入れたため打撲の青あざをつけている清介は、宗佑そっくりの表情で、大人げないと、首を振ってみせる。

そんな清介を見て、宗佑はチョンと彼の青あざを指で押す。

『~~~~~つつ!!』

痛みで声も上げられず悶絶する清介を横目に、宗佑は織りの手当てを続ける。

そんな澄まし面の宗佑を見ながら、織りはゾツとしながら彼を見やった。

『ああああ。どうするつもりです、清介。お前の傷がもとで織り殿が嫁に行き遅れでもしたら』

織りは、良家の令嬢である、と、宗佑は幼い清介に教える。

幼い清介や織りには、身分云々など、遠い世界の話だった。

悶絶の表情から、清介はゆっくりと顔を上げる。
織りもきよとんとして、宗佑を見上げた。

『責任、とるんですか？』

真面目な面持ちで、宗佑が二人に言う。

『ふ…ふん！行き遅れたら、俺のここに来ればいいだろう』

『そしたら、毎日清介は、織り殿に蹴られますよ』

『わたくし、そんなに悪いことばかりしませんわ！セイスケが、わたくしを怒らせなければ、仲良くできますもの！』

自分の言っていることが、どれくらいことだとも知らず言う清介に、宗佑が憐れむような表情で言っただけ。その言葉に、織りも幼さゆえの受け答えをする。

『織りが俺の家来になれば、いつでもヨメに来ていいぞ！』

『バカ言うんじゃないわよ！誰がセイスケの家来になるものですか！あなたこそ、わたくしの言うこと聞かないと、ヨメに来てあげませんわよ！』

訳も分らず『嫁にくる・来ない』と話す二人の言葉を聞きながら、薬箱を片づける宗佑がぼんやりと言う。

『今の二人の言葉は、大人になっても私が覚えておいてやりますよ』

十数年経つが、織りの鎖骨には、引っかき傷がつつすらと残っている。

それは、織り本人はすっかり忘れていた。

松太朗も数回、織りが着替えている時に目にしたが、たいして気にもしていなかった。

「懐かしいですねえ」

水村宗佑師範代は、のほほんとお茶をすすりながら言う。

清介と織りは、自分たちも覚えていない幼いころの話に、恥ずかしさから顔を真っ赤にした。

蚊帳の外の松太朗はいささか面白くない表情でその話を聞き、二人を盗み見た。

「まあ、子どもの頃の話です。今日は、ゆっくりその話でもしまし
よう。今晚はうちでご飯を食べて行きなさい」

ね。とニツコリ笑う水村に、織りと清介は、勢いよくフルフルと
首を振った。

松太郎だけは、聞いてみたい気もしていたのだが…。

師匠と夫

あまり気の進まない中ではあったが、結局織りたちは道場の弟子だとういう少年に、茜へ食事をして帰って来るといふ伝言を預けた。

「では、私は準備をしますから、みなさんはくつろいでいて下さい。手早く襷掛けをして席を立つ清介に、水村は「よろしく」とやんわり答える。

「わたくしも手伝いますわ」

そう言つて織りも立ち上がる。

「では、俺も手伝おうか」

続けて立つのは松太郎だ。

清介は、慌てて手を振る。

「お客人は座っていてください。夕餉の支度は俺の仕事ですから」「そうですね、松太郎殿。われわれはゆっくりして待ちましょう。暮でも打ちますか？織り殿は清介を手伝いなさい」

言いながら水村は、早々と碁盤を持ち出した。

そして、じゃらじゃらと碁石を取り出しながら松太郎に自分の正面の席を勧める。

やる気満々の水村に、松太郎は立つたまま答えた。

「いや、ただ飯を食うわけにはいきまい」

清介はさつさと台所に行つてしまい、織りも水村から手伝えと言われたので、その後を追つていた。

だから、松太郎は自分も手伝おうと言っているのだ。

「奥方が手伝っているのだから、ただ飯ではありませんよ。それに、

男子厨房に立たず、です」

松太郎の気持ちを知ってか知らずか、水村は笑顔で彼を手招きする。

松太郎は、感情を表に出さずに水村の正面に腰を下ろした。

「そう言いながら、清介殿を厨房に立たせておるではないか」

「うちは女手がないものですからね」

碁石の感触を楽しみながら、水村が答えた。

「人の妻を手伝わせるとは……」

むうっと唸り、松太郎は碁盤を睨みながら腕組した。碁は好きなのだが、本格的に勝負をつけてやったことなどない。

「織り殿には、これから奥方としてしつかりとやってもらわねばなりませんからね。ご承知の通り、あの子は幼いころから、包丁よりも真剣が好きな娘でしたから」

碁石を並べながら、水村はそれに、と付け足した。

「ま、親バカかも知れませんが、突然失恋した清介があまりに可愛そうでしょう。少しくらい二人で話をする時間をやってもよいのではないかと思いましてね」

清介を幼いころから知っている水村は、松太郎を前にしやあしやあ言った。

あまりに包み隠さない水村の言葉に、松太郎はあつけにとられて目を瞬かせる。言うに事欠いて、清介が織りに失恋して、その直後に二人きりにしたいと……。それを、夫である自分の前で言うなど。

水村の考えも神経も分らず、松太郎はムツとした。

「万が一、織りに何かあったらどうするのだ？」

「何もないでしょう」

珍しく怒りを表情に出す松太郎に、水村はあっけらかんと答えた。

「何を根拠に…」

あまりに、水村ののほほんとした答え方に、松太郎は呆れた口調で呟いた。

「何を…。あの清介とあの織り殿ですからね。何も起らんと思
いますよ」

「うむ…」

どんな説明を受けるより「あの」といわれる方が、説得力がある
のだから不思議なものである。

確かに、「あの」清介と「あの」織りでは、間違いなど起こそう
と思っても、なかなか起きるものではなさそうだ。

「しかし、面白くないなあ…」

パチツと小気味よい音を響かせて碁を打ちながら、松太郎は顔を
曇らせる。

妻と、妻に好意を寄せる男（松太郎からしてみれば、まだまだガ
キに見えるのだが）と一緒に離れた炊事場で夕餉の準備をしている
など、普通に考えて、夫にとっては全く面白い状況ではない。

「面白くないでしょうなあ」

こちらのパチツと応戦しながら、水村はどこかニヤニヤしながら
言う。

些か、水村が優勢だ。

「面白くない」

ムクれた松太郎が荒く碁石を打つ。

「まあ、よいではありませんか。たまには織り殿の気持ちも分るといい」

一瞬の躊躇を見せるものの、碁盤を見つめたまま水村は言った。
言われた松太郎は、またしても呆けたように石を手にしたまま小首を傾げる。

「水村殿の言うことは、いつも訳が分らない。しかし……俺が見ているものよりずっと先のモノを見ているのだろうなあ……」

水村は、パツと顔を上げて松太郎を見ると細い目を更に細くした。

「そりゃあ。松太郎殿が私の言う言葉の意味を逐一理解しては、松太郎殿ではなくなってしまう。あなたは、今のあなただからこそ、魅力的なのですよ」

「俺はほめられているのか、けなされているのか分らん」

己の脳味噌がやはり、そんなに詰まっではないのではないだろうか、心配しながら松太郎は素直にそう呟いた。

「まあ、それに心配なら後で覗きに行くといい」

「うむ。確かにそうだな。織りの包丁使いは未だに危なっかしいものだし…」

茜に料理の一切を任せている織りの料理は一向に上達しない。

嫁いで来て、まだ半年もたっていないので、松太郎もあまりそのことについては言わないようにはしていたのだが…。いざ、よそでこうやって台所を任せることになる、些か都合が悪い。

「やはり、そろそろ奥方らしく家庭の一切が出来るようになってもらわねばいかなあ…」

そう言いながら、突破口の見た碁盤に石を置く。

「織り殿が奥方然としているなど、想像もつきませんな。そもそも奥に引っ込んでいるような性分でもなし」

「…その通りなのだ……。織りが奥でおとなしくしては、彼女らしくないし…。織りには織りらしく過ごして欲しいからなあ…」

天井を見ながら苦笑いを浮かべる水村と、はあっとため息をついて背を丸める松太郎。

男二人は、しばらく碁を打って寛いだ。

弟子と妻

厨房に立つ2人は、最初に必要な会話を交わしたただけで、あとは無言のままである。清介が握る包丁の小気味よい音を耳にしながら、織りは火を起こそうとしていた。

しかし、竹筒で、ふうつと息を吹きかけるのだが、一向に火がつく心配がない。

「なんだ、まだ火がつかないのか？」

竈の側にしゃがみこむ織りの横に座り、覗きこむ清介が尋ねる。額に汗を浮かべた織りは、その汗をぬぐいながら首を傾げた。

「思えばわたくしは、火など起こしたことがございませんでしたわ」
「……そ…そうか……。じゃあ、俺がこっちはやるから、その野菜を切ってくれ」

苦笑いを浮かべて言う清介が指さす方を見て、おとなしく包丁を握った。

トン、トン、とゆっくり、そして危なっかしく野菜を切る織りを横目に見ながら、清介は竹筒から口を離して尋ねた。

「家で…包丁も持たないのか？」

織りは目も向けずに「ええ」と答える。

「実家では、使用人がやってくれましたし、今も茜がいますし」

ふうつと大きく火種に息を吹きかけながら話を聞く清介も、額に汗を浮かべながら「ふうん」と答える。

「で、あのダンナ様は何もおっしゃられないのです？」

そう言うと、また大きく息を吹きかける。

パチパチを音を立てながら、薪が燃え始めたのを確認すると、清介は数本の薪を入れたして、もう一度、息を吹きかけた。

「よし、ついた」

清介は、竹筒を傍らに置くと、未だ危なっかしい手つきで野菜を切る織りの横に立つ。

「おおと…こりゃ…まあ……………」

織りの切った野菜のカケラを手にしてた清介は、あまりにチグハグな切り方をするので言葉にすることができない。

「松太郎殿は…何もおっしゃられないのです？」

野菜と織りを半眼で見やりながら、再度聞く。

「さあ…。何か思うところはありますかも知れませんが、何もおっしゃっては下さいませんので」

冷たい隙間風も吹きこむ厨房で、織りは額に汗をかきながら必死にジャガイモの皮を剥いていた。

顔も上げず、真剣なまなざしで手元を睨みつける織りを見て、清介はふうつと小さなため息を吐く。

「包丁の背に人差し指を添えてだなあ……」

「え……ちよ……」

織りの背後に回り込み、清介は織りの右手を取った。

自分と背の変わらなかつたじゃじゃ馬をいつの間にか追い越し、自分と変わらず小さなふつくらとしていた手も、いつの間にか自分の方は大きく節の目立つものになってしまった。

その節と豆だらけの手で、織りのほっそりとした白い手を握る。

突然のことに織りも慌てる。しかし、清介は構わず続けた。

「ふん。チビのままの織り殿は包丁の使い方も知らぬようなのでなで、親指はこうやって、刃を滑らせればよいのだ」

手を添えてやりながら、ゆっくりとジャガイモの皮を剥いていく。

「松太郎殿は……何故奥方に料理の一つも出来ねば困ると言われないのだろうな。こんな包丁一つろくに使えぬ娘、俺なら絶対に黙ってはおらんがな」

「口やかましい旦那さまですこと。松太郎さまは優しいのですわ」

「夫婦というものは優しいだけではやってはいけぬと思うがな。まあ、俺のように家事全般においてそつなくこなし、武芸にも励むような男が織り殿にはあっているのではないか？」

織りの顔が見えないのをいいことに、清介は強気にそういう言う。そして、やはり本心から解せぬという声音で続けた。

「あのような見目麗しいご仁が、そこいらの一般武家の娘を嫁に迎えるというのもなあ…。あのようなご容姿であれば、どこか大名かはたまた公家のお姫様方からお声がかかってもおかしくはないと思うのだが…。なあ。そうは思われんか？」

意地悪でも、嫌味でもない。

清介は本当に無邪気な少年のように、解せない問題を解くかのよう口にしていた。

それは織りにも伝わり、織りはムツとするよりもただ共に首を傾げる。

「それも、そうでございますが…」

自分自身ですら、キツネにつままれていたのではないかと思っ
ているのだ。それを今さら清介に言われたからと言って、怒る気にも
ならない。

「でも、これが現実でございますしね。今さら考えても仕方がない
と思っておるのですよ」

ゆっくり手を動かす織りは、ふっと困ったように言う。

清介は、手を添えてやりながらもその言葉に耳を傾けた。

「松太郎さまが、わたくしを妻にと迎えてくださったことも、わた
くしと添い遂げると言ってお下されたことも、どれも夢のようですけ
れども、せえくんぶ現実なんですもの。そして、わたくしも毎日目
覚める度に、夢ではなかったのかと思えますけれども、隣には松太
朗さまがいらっしやって、毎日が始まるのです。そんな生活も半年

近くもたてば、いい加減現実なのだろうと、いやでも思うしがあり
ませんわ」

(うつむ…)

厨房の入り口に隠れた松太郎は、織りの言葉に腕組をした。
清介がこれ以上、織りに触れようものなら、怒鳴りこみ、引っ張
ってでも織りを連れて帰るつもりだったのだが…。

(タイミングを失ってしまったな…)

入るタイミングも、立ち去るタイミングも。

「ならば、なおさら妻には妻としてあり方を教えるべきではないの
か？」

「それは…」

「ままごとではないのだから」

言い淀む織りに、清介は畳みかけるように言った。そして、織りに添えていた手を、そつと離すとそのまま彼女を後ろから抱きすくめる。

「せ…清介さん!!」

驚いた織りが、包丁を持ったまま、清介を肩越しに振り返ろうとする。

厨房の入り口では、松太郎が一步踏み出す。

「腹がたつなあ…まったく」

清介の呟きに、松太郎はそのまま足を止める。
織りも、怪訝な表情をした。

「久しぶりに会った、幼馴染は…俺の敵にはならんくらい小柄だし。美しく育っておるし…。ましてやキツネにつままれるような嫁入りまでしておるし…。俺だけが、まるで時が止まったかのようだ」

織りが小柄なのではない。

清介が青年として成長したのだ。

織りが美しく育ったと思うのも、清介が織りを好いていたからだ。

だから、そんな織りがのほほんと、鈍感で呑気な見目麗しい、自分よりずっと大人の松太郎のもとで幸せにすごしているようだから、腹が立つ。

織りに。

松太郎に。

そして、自分自身に。

清介の心のうちなど分らぬ織りは、そっとジャガイモをもった手で清介の手に触れた。

「何も、変わってませんわ。清介さんがいらっしやらなかった時の間にはそんなに変わってなどおりません。すぐ、元の生活に戻ってきますわよ」

優しい声音で言う織りに、清介はただただ黙って、その身を抱きすくめていた。

織りは、そんな清介に母のように、ポンポンと手を叩いてやる。

「また、わたくしが相手になって差し上げますわ。そして、またわたくしが勝ちます」

織りの言葉を聞いて、清介はしばしのちスツと体を離れた。

そして、再び織りの横に並んで、鍋の様子をうかがう。

「相変わらず生意気な口だ。もう織りさんなんかには負けませんよ」

ニツと笑う清介に、織りはやんわりと「どうかしらね」と笑って見せた。

(うむ…。黙って飯を待つとしよう)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2596o/>

ture life

2011年9月18日13時45分発行